
熊谷市

北島遺跡Ⅸ

熊谷スポーツ文化公園建設事業関係
埋蔵文化財発掘調査報告

- I - 2 -

<第1分冊>

2004

埼玉県
財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



木簡



戲画円面硯他



山吹双鳥鏡

序

「とどけ この夢 この歓声」を掲げた第59回国民体育大会「彩の国まごころ国体」が、いよいよ幕を開けようとしております。続いて第4回全国障害者スポーツ大会も、ここ熊谷市の熊谷スポーツ文化公園をメイン会場として開催されます。

熊谷スポーツ文化公園は、昭和63年の「さいたま博覧会」以来、着々と整備が進められ、これまで拠点都市公園として県民のみなさまに親しまれてまいりました。

さて、ラグビー場をはじめとして各施設を含むこの地域一帯には、先人達の残した貴重な埋蔵文化財が、豊富に包蔵されておりました。

埼玉県埋蔵文化財調査事業団は、昭和61年以来、公園の整備工事に伴う発掘調査を行い、これまでに縄文時代から江戸時代にわたる竪穴住居跡や大形の建物跡、土器や石器を発見するなど数多くの成果を挙げてまいりました。

国体開催にあたり、この公園内に屋内競技場や陸上競技場、調節池などの建設が予定され、この地域の埋蔵文化財の取扱いについて関係各機関が慎重に協議を重ねてまいりました。その結果、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課の調整によって、やむを得ず現状で保存が困難となる範囲について、当事業団が埼玉県県土整備部の委託を受け、発掘調査を行うこととなりました。

調査の結果、弥生時代の大規模な集落、馬や人物をかたどった埴輪をならべた古墳、古代豪族の家の跡、そして熊谷次郎直実の活躍したころの村の姿などが明らかになってまいりました。

また、奈良時代の「習書木簡」も発見されました。この木簡は、字を習いたての幼い子供の筆使いを思い起こさせます。

これらの発掘調査によって得られたおびただしい情報は、郷土埼玉の歴史をより深く理解するための礎となり、また、県民に豊かな文化をもたらすものと思われれます。

本書が埋蔵文化財の保護、学術研究の基礎資料として、また、学校教育の「総合的学習の時間」や公民館活動などの生涯学習の場で、広く活用していただければ幸いです。

なお、本書の刊行にあたり、発掘調査に関する諸調整に御尽力いただきました埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課をはじめ、県土整備部都市公園課、埼玉県熊谷スポーツ文化公園建設事務所、熊谷市教育委員会ならびに地元の関係各位に対しまして、厚く感謝申し上げます。

平成16年3月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理事長 桐川卓雄

例 言

1. 本書は、埼玉県熊谷市に所在する北島遺跡の発掘調査報告書（第Ⅰ巻第2編）である。

本編では、北島遺跡第19地点の古代から近世にかけての遺物堆積層・土器集中出土地点・塚樋などの遺構・遺物や、木製品・骨などの遺物、及び遺物・遺構写真を掲載した。

なお竪穴住居跡・掘立柱建物跡・井戸跡・土壇・溝跡・小穴・地鎮跡の遺構・遺物については、第1編に掲載した。御参照願いたい。

また北島遺跡は、これまでに以下の報告書を当事業団から刊行している。

北島遺跡	事業団報告書第81集
北島遺跡Ⅱ	事業団報告書第88集
北島遺跡Ⅲ	事業団報告書第103集
北島遺跡Ⅳ	事業団報告書第195集
北島遺跡Ⅴ	事業団報告書第278集
北島遺跡Ⅵ	事業団報告書第286集

（第Ⅱ巻 北島遺跡第19地点 弥生時代編）

2. 遺跡のコード番号と、各年度の発掘調査届に記載した代表地番、およびこれに対する埼玉県教育長の指示通知は、以下のとおりである。

平成11年度

北島遺跡 第12次 (59-058)

熊谷市大字上川上町364他

平成11年4月16日付 教文第2—5号

平成12年度

北島遺跡 第15次 (59-058)

熊谷市大字上川上町323・192他

平成12年5月2日付 教文第2—3号

3. 発掘調査は、熊谷市スポーツ文化公園建設事業に伴う記録保存のための事前調査であり、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課が調整し、埼玉県北部公園事務所の委託を受け、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。

4. 発掘調査事業は、第Ⅰ章—3に示す組織により

実施した。このうち、本書にかかわる第19地点の発掘事業については、平成11年4月1日から平成12年3月31日までを今井 宏、利根川章彦、若松良一、富田和夫、細田 勝、鈴木孝之、黒坂禎二、石井伸明、村田章人、吉田 稔、田中広明、福田 聖、岩田明広、渡辺清志が担当し、平成12年4月1日から12月28日までを、小野美代子、赤熊浩一、宮井英一、鈴木孝之、大谷 徹、山本 靖、君島勝秀、福田 聖が担当した。

5. 遺跡の基準点測量と航空写真は、株式会社シン技術コンサルに委託した。また遺跡から出土した骨及び樹種同定については、パリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。

6. 掲載した遺構写真は各調査担当者が、遺物写真は大屋道則が撮影した。

7. 出土品の整理および図版の作成は、兵ゆり子・大和田瞳の協力を得て田中が行なった。なお、金属製品は瀧瀬芳之、中近世の陶磁器については、木戸春夫の協力を得た。また墨書土器の筆順筆法については、塩野秀影に協力を得た。

8. 本書の執筆は、第Ⅰ章—1を埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課、第Ⅳ章—(1)12・16、(2)2 vii、(3)3 viを大和田、第Ⅳ章—(2)2 viを大谷、その他を田中が行った。なお、第Ⅴ章3については、黒須 茂氏より玉稿をいただいた。

9. 本書の編集は、田中が行った。

10. 本書にかかわる諸資料は、平成16年度以降、埼玉県立埋蔵文化財センターが管理・保管する。

11. 発掘調査から本書の刊行まで、下記の方々に御教示、御協力を賜った。記して謝意を表します。

井上喜久夫・金子正之・栗岡真理子・黒須 茂
倉品敦子・権田宜行・寺社下博・高畑知功
鳥羽政之・白田正子・松田 哲・松村恵司
水口由紀子・山崎 武・山中敏史・山田昌久
吉野 健 (敬省略)

凡例

本書における挿図等の指示は以下のとおりである。

1. 全体図および遺構挿図

①XとYで示した数値は、国家標準直角座標第Ⅸ系に基づく各座標値であり、方位を表わす矢印は全て座標北を示す。

第Ⅸ系の座標原点は、北緯36度00分00秒、東経139度50分00秒で、原点座標値はX=0.000m、Y=0.000mである。

②グリッドは上記の座標に基づき、10m×10mの方眼を設定した。各グリッドの呼称は北西隅の杭を用い、北から南へアルファベット、西から東へ算用数字で表示している。

③遺構の表記記号は次のとおりである。

P…ピット SA…柵列跡 SB…掘立柱建物跡
SD…溝跡 SE…井戸跡 SJ…竪穴住居跡
SK…土壙 SS…古墳 SX…性格不明遺構

④挿図の縮尺は原則として遺構全測図を1/200とし、他は個別にスケールを示した。

⑤土層図中のレベル数値は、すべて標高(単位 m)を表わす。

⑥土層図の説明文に用いた色調表示は、『新版標準土色帖』1997年版(農林水産省農林水産技術

会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色標監修)を基に通用表記とした。

2. 遺物挿図

①挿図の縮尺は原則として1/4とした。例外は、個別にスケールを示した。

②土器実測図の網は、緑釉(20%)・赤色塗彩(20%)・黒色処理(10%)・灰釉(10%)の範囲を示す。

③土器実測図の断面は、須恵器(還元・硬質)(100%)・灰釉陶器(20%)・緑釉陶器(40%)で表現した。

3. 遺物観察表

①口径・器高・底径の計測値の単位はmmである。()を付した数値は、口径・底径については推定値、器高については残存高を示す。

②胎土は、本文中に記した基準に基づき、推定産地を記した。

③色調は、『新版標準土色帖』に基づき、通常表記を行った。また緑釉陶器については、カラーチャートを用いた。

④残存率は5%刻みで表示した。目測であくまで目安である。

目次

〈第1分冊〉

口絵

序

例言

凡例

目次

I 発掘調査の概要	1
1. 発掘調査に至る経過	1
2. 発掘調査・報告書作成の経過	2
3. 発掘調査、整理・報告書刊行の組織	4
II 遺跡の立地と環境	5
III 遺跡の概要	10
IV 遺構と遺物	11
(1) 古代	11
8. 道路跡	12
9. 河川跡	19
10. 集石遺構	32
11. 土器集中出土地点	37
12. 井戸枠	123
13. グリッド・表採	163
i. 土師器・須恵器	164
ii. 灰釉陶器	205
iii. 緑釉陶器	218
iv. 土製品	235
v. 石製品	260
vi. 金属製品	266

〈第2分冊〉

14. 墨書土器	273
15. 木簡	356
16. 木製品	360
(2) 中世	365
1. 遺構	366
i. 掘立柱建物跡	366
ii. 井戸跡	367
V 結語	427
1. 北島遺跡の変遷と周辺集落の動態	427
2. 井戸構造の変遷と構築について	440
3. 上川上村水路構造物遺構について	448

iii. 溝跡	367
iv. 山吹双鳥鏡出土土壙墓	367
2. 遺物	370
i. 中世陶器	370
ii. 青磁・白磁	371
iii. かわらけ	379
iv. 硯	379
v. 獣脚	381
vi. 板碑	381
vii. 木製品	385
(3) 近世	393
1. 遺構	394
2. 遺物	399
i. 近世陶磁器	399
ii. 土管	401
iii. 瓦	401
iv. 古銭	401
v. 木製品	403
vi. 木札	409
(4) 自然遺物	415

写真図版

挿 図 目 次

第 1 図	埼玉県 の地形区分	5	第 37 図	土器集中出土地点の出土遺物 (6)	47
第 2 図	北島遺跡周辺遺跡の分布 (中世)	6	第 38 図	内弯口縁坏の等密分布	48
第 3 図	道路跡・河川跡他全体図	11	第 39 図	土器集中出土地点の出土遺物 (7)	49
第 4 図	道路跡土層断面	12	第 40 図	土器集中出土地点の出土遺物 (8)	50
第 5 図	道路跡模式図	13	第 41 図	土器集中出土地点の出土遺物 (9)	51
第 6 図	道路跡全体区割図	14	第 42 図	土器集中出土地点の出土遺物 (10)	52
第 7 図	道路跡全体図 (1)	15	第 43 図	土器集中出土地点の出土遺物 (11)	53
第 8 図	道路跡全体図 (2)	16	第 44 図	土器集中出土地点の出土遺物 (12)	54
第 9 図	道路跡全体図 (3)	17	第 45 図	土器集中出土地点の出土遺物 (13)	55
第 10 図	道路跡全体図 (4)	18	第 46 図	内弯口縁坏の分類別法量	56
第 11 図	道路跡全体図 (5)	19	第 47 図	土器集中出土地点の出土遺物 (14)	57
第 12 図	道路跡全体図 (6)	20	第 48 図	土師器坏 A の等密分布	58
第 13 図	道路跡全体図 (7)	21	第 49 図	土器集中出土地点の出土遺物 (15)	59
第 14 図	道路跡全体図 (8)	22	第 50 図	暗文土器の等密分布	60
第 15 図	道路跡全体図 (9)	23	第 51 図	土器集中出土地点の出土遺物 (16)	61
第 16 図	浅間山 B 軽石層堆積範囲と 除去後の地形	24	第 52 図	土師器鉢の等密分布	62
第 17 図	河川跡出土の杭	25	第 53 図	土器集中出土地点の出土遺物 (17)	63
第 18 図	河川跡出土土器 (1)	26	第 54 図	須恵器蓋の等密分布	64
第 19 図	河川跡出土土器 (2)	27	第 55 図	土器集中出土地点の出土遺物 (18)	65
第 20 図	河川跡出土土器 (3)	28	第 56 図	湖西産須恵器坏の等密分布	66
第 21 図	河川跡土層断面	29	第 57 図	南比企産須恵器坏の等密分布	66
第 22 図	集石遺構全体図	32	第 58 図	土器集中出土地点の出土遺物 (19)	67
第 23 図	集石遺構詳細 (1)	33	第 59 図	土器集中出土地点の出土遺物 (20)	68
第 24 図	集石遺構詳細 (2)	34	第 60 図	土器集中出土地点の出土遺物 (21)	69
第 25 図	集石遺構他出土遺物	35	第 61 図	末野産須恵器坏の等密分布	70
第 26 図	集石遺構土層断面	36	第 62 図	土器集中出土地点の出土遺物 (22)	71
第 27 図	全器種の等密分布	37	第 63 図	土器集中出土地点の出土遺物 (23)	72
第 28 図	坏蓋模倣坏の等密分布	38	第 64 図	土器集中出土地点の出土遺物 (24)	73
第 29 図	土器集中出土地点の出土遺物 (1)	39	第 65 図	土器集中出土地点の出土遺物 (25)	74
第 30 図	有段口縁坏の等密分布	40	第 66 図	土器集中出土地点の出土遺物 (26)	75
第 31 図	土器集中出土地点の出土遺物 (2)	41	第 67 図	土器集中出土地点の出土遺物 (27)	76
第 32 図	有段口縁坏の黒色処理率	42	第 68 図	土器集中出土地点の出土遺物 (28)	77
第 33 図	土器集中出土地点の出土遺物 (3)	43	第 69 図	土器集中出土地点の出土遺物 (29)	78
第 34 図	土器集中出土地点の出土遺物 (4)	44	第 70 図	土器集中出土地点の出土遺物 (30)	79
第 35 図	土器集中出土地点の出土遺物 (5)	45	第 71 図	土器集中出土地点の出土遺物 (31)	80
第 36 図	比企型坏の等密分布	46	第 72 図	土器集中出土地点の出土遺物 (32)	81
			第 73 図	土器集中出土地点の出土遺物 (33)	82

第74図	土器集中出土地点の出土遺物(34) …83	第112図	第85号井戸跡の北面井戸枠(1) ……145
第75図	土器集中出土地点の出土遺物(35) …85	第113図	第85号井戸跡の北面井戸枠(2) ……146
第76図	土器集中出土地点の出土遺物(36) …87	第114図	第85号井戸跡の南面井戸枠(1) ……147
第77図	黒色土器の等密分布 ……88	第115図	第85号井戸跡の南面井戸枠(2) ……148
第78図	灰釉陶器の等密分布 ……88	第116図	第85号井戸跡の東面井戸枠(1) ……149
第79図	土器集中出土地点の出土遺物(37) …89	第117図	第85号井戸跡の東面井戸枠(2) ……150
第80図	土師器高坏の等密分布 ……90	第118図	第85号井戸跡の西面井戸枠(1) ……151
第81図	土器集中出土地点の出土遺物(38) …91	第119図	第85号井戸跡の西面井戸枠(2) ……152
第82図	土器集中出土地点の出土遺物(39) …92	第120図	第85号井戸跡の井戸枠最下段 ……153
第83図	土器集中出土地点の出土遺物(40) …93	第121図	枠材・井戸枠・補強材 ……157
第84図	土師器甕の等密分布 ……94	第122図	第19地点の空間分割 ……165
第85図	土器集中出土地点の出土遺物(41) …95	第123図	遺物堆積層出土土器全体の 等密分布(1) ……166
第86図	須恵器壺・甕の等密分布 ……96	第124図	遺物堆積層出土土器全体の 等密分布(2) ……167
第87図	土器集中出土地点の出土遺物(42) …97	第125図	遺物堆積層出土の土師器食器の 等密分布 ……169
第88図	土器集中出土地点の器種構成と変化 …98	第126図	遺物堆積層出土の土師器食器 (比企型坏)の等密分布 ……170
第89図	土器集中出土地点出土状態 ……121	第127図	遺物堆積層出土の須恵器食器 (南比企)の等密分布 ……171
第90図	土器集中出土地点の標準土層 ……122	第128図	遺物堆積層出土の須恵器食器 (末野)の等密分布 ……173
第91図	土器集中出土地点の遺物(43) ……122	第129図	遺物堆積層出土の 土師質土器の等密分布 ……175
第92図	井戸の構造・ 枠材の名称および計測位置 ……124	第130図	遺物堆積層出土の 黒色土器の等密分布 ……177
第93図	第21号井戸跡井戸枠(1) ……125	第131図	遺物堆積層出土の 須恵器貯蔵具の等密分布 ……179
第94図	第21号井戸跡井戸枠(2) ……126	第132図	遺物堆積層出土の 土師器貯蔵・煮沸具の等密分布 ……181
第95図	第42号井戸跡井戸枠組み上げ図 ……128	第133図	遺物堆積層出土の羽釜の等密分布 ……183
第96図	第42号井戸跡の南西面井戸枠(1) …129	第134図	遺物堆積層の出土遺物(1) 土師器・須恵器(1) ……185
第97図	第42号井戸跡の南西面井戸枠(2) …130	第135図	遺物堆積層の出土遺物(2) 土師器・須恵器(2) ……186
第98図	第42号井戸跡の南西面井戸枠(3) …131	第136図	遺物堆積層の出土遺物(3) 土師器・須恵器(3) ……187
第99図	第42号井戸跡の北東面井戸枠(1) …132	第137図	遺物堆積層の出土遺物(4)
第100図	第42号井戸跡の北東面井戸枠(2) …133		
第101図	第42号井戸跡の北東面井戸枠(3) …134		
第102図	第42号井戸跡の北西面井戸枠(1) …135		
第103図	第42号井戸跡の北西面井戸枠(2) …136		
第104図	第42号井戸跡の北西面井戸枠(3) …137		
第105図	第42号井戸跡の南東面井戸枠(1) …138		
第106図	第42号井戸跡の南東面井戸枠(2) …139		
第107図	第42号井戸跡の南東面井戸枠(3) …140		
第108図	第42号井戸跡の井戸枠最下段 ……141		
第109図	第42号井戸跡の井戸枠補強材等(1) 142		
第110図	第42号井戸跡の井戸枠補強材等(2) 143		
第111図	第85号井戸跡井戸枠組み上げ図 ……144		

	土師器・須恵器（４）……………188	第161図	緑釉陶器の等密分布……………221
第138図	遺物堆積層の出土遺物（５）	第162図	緑釉陶器の詳細等密分布……………222
	土師器・須恵器（５）……………189	第163図	遺物堆積層中の緑釉陶器分布（１）…223
第139図	遺物堆積層の出土遺物（６）	第164図	遺物堆積層中の緑釉陶器分布（２）…224
	土師器・須恵器（６）……………190	第165図	遺物堆積層の出土遺物（20）
第140図	遺物堆積層の出土遺物（７）		緑釉陶器（１）……………225
	土師器・須恵器（７）……………191	第166図	遺物堆積層の出土遺物（21）
第141図	遺物堆積層の出土遺物（８）		緑釉陶器（２）……………226
	土師器・須恵器（８）……………192	第167図	遺物堆積層の出土遺物（22）
第142図	遺物堆積層の出土遺物（９）		緑釉陶器（３）……………227
	土師器・須恵器（９）……………193	第168図	遺物堆積層の出土遺物（23）
第143図	遺物堆積層の出土遺物（10）		緑釉陶器（４）……………228
	土師器・須恵器（10）……………194	第169図	遺物堆積層の出土遺物（24）
第144図	遺物堆積層の出土遺物（11）		緑釉陶器（５）……………229
	土師器・須恵器（11）……………195	第170図	土錘模式図……………235
第145図	遺物堆積層の出土遺物（12）	第171図	遺物堆積層の出土遺物（25）
	土師器・須恵器（12）……………196		土錘（１）……………236
第146図	遺物堆積層の出土遺物（13）	第172図	遺物堆積層の出土遺物（26）
	土師器・須恵器（13）……………197		土錘（２）……………237
第147図	灰釉陶器産地別消費量の推移……………205	第173図	遺物堆積層の出土遺物（27）
第148図	灰釉陶器の等密分布……………207		土錘（３）……………238
第149図	遺物堆積層の出土遺物（14）	第174図	遺物堆積層の出土遺物（28）
	灰釉陶器（１）……………208		土錘（４）……………239
第150図	遺物堆積層の出土遺物（15）	第175図	遺物堆積層の出土遺物（29）
	灰釉陶器（２）……………209		土錘（５）……………240
第151図	遺物堆積層の出土遺物（16）	第176図	遺物堆積層の出土遺物（30）
	灰釉陶器（３）……………210		土錘（６）……………241
第152図	遺物堆積層の出土遺物（17）	第177図	遺物堆積層の出土遺物（31）
	灰釉陶器（４）……………211		土錘（７）……………242
第153図	遺物堆積層の出土遺物（18）	第178図	遺物堆積層の出土遺物（31）
	灰釉陶器（５）……………212		土錘（８）……………243
第154図	遺物堆積層の出土遺物（19）	第179図	遺物堆積層の出土遺物（32）
	灰釉陶器（６）……………213		漆附着土器……………256
第155図	北島遺跡他の産地別消費量の推移……………214	第180図	遺物堆積層の出土遺物（33）
第156図	緑釉陶器の産地別構成……………219		瓦（１）……………258
第157図	緑釉陶器の器種別構成……………219	第181図	遺物堆積層の出土遺物（34）
第158図	緑釉陶器の3D棒グラフ……………220		瓦（２）……………259
第159図	猿投産緑釉陶器の器種別構成……………220	第182図	遺物堆積層の出土遺物（35）紡錘車…261
第160図	尾北産緑釉陶器の器種別構成……………220	第183図	遺物堆積層の出土遺物（36）玉類…261

第184図	遺物堆積層の出土遺物 (37)	第220図	「少君」の分布……………299
	砥石 (1) ……………263	第221図	「下」の変遷……………299
第185図	遺物堆積層の出土遺物 (38)	第222図	「家」の変遷……………300
	砥石 (2) ……………264	第223図	「家」の分布……………300
第186図	遺物堆積層の出土遺物 (39)	第224図	「主」の変遷……………301
	砥石 (3) ……………265	第225図	「主」の分布……………301
第187図	鉄製品 (1) ……………267	第226図	「金」の変遷……………302
第188図	鉄製品 (2) ……………268	第227図	「金」の分布……………302
第189図	鉄製品 (3) ……………269	第228図	「十」の変遷……………303
第190図	墨書文字の種類……………274	第229図	「十」の分布……………303
第191図	墨書の位置と方向……………274	第230図	「日上」の変遷……………304
第192図	「綱」の記載部位……………275	第231図	「千万」の変遷……………304
第193図	「綱」の底部外面記載方法……………275	第232図	「千万」の分布……………304
第194図	「綱」の変遷……………276	第233図	「文」の変遷……………305
第195図	遺構出土の「綱」の分布……………278	第234図	「文」の分布……………305
第196図	グリッド出土の「綱」の分布……………279	第235図	「太」の変遷……………306
第197図	「土万」の記載部位……………281	第236図	「太」の分布……………306
第198図	「土万」の底部外面記載方法……………281	第237図	「兵」の変遷……………307
第199図	「土万」の変遷……………282	第238図	「龍」の変遷……………307
第200図	「土万」の分布……………283	第239図	「龍」の分布……………307
第201図	「第成」の記載部位……………285	第240図	武蔵国内の郡別墨書土器出土遺跡……………319
第202図	「第成」の底部外面記載方法……………285	第241図	武蔵国内の郡別墨書土器の出土点数……………319
第203図	「第成」の変遷……………286	第242図	墨書文字の変遷……………319
第204図	「第成」の分布……………287	第243図	墨書の記載部位と時期の関係……………320
第205図	「中」の記載部位……………288	第244図	全墨書土器の記載部位……………320
第206図	「中」の底部外面記載方法……………288	第245図	北島遺跡出土墨書土器 (1) ……………321
第207図	「中」の変遷……………289	第246図	北島遺跡出土墨書土器 (2) ……………322
第208図	「中」の分布……………290	第247図	北島遺跡出土墨書土器 (3) ……………323
第209図	「丸人」の変遷……………291	第248図	北島遺跡出土墨書土器 (4) ……………324
第210図	「丸人」の分布……………292	第249図	北島遺跡出土墨書土器 (5) ……………325
第211図	「我」の変遷……………293	第250図	北島遺跡出土墨書土器 (6) ……………326
第212図	「我」の分布……………293	第251図	北島遺跡出土墨書土器 (7) ……………327
第213図	「益」の変遷……………294	第252図	北島遺跡出土墨書土器 (8) ……………328
第214図	「益」の分布……………294	第253図	北島遺跡出土墨書土器 (9) ……………329
第215図	古代幡羅郡の郡郷……………295	第254図	北島遺跡出土墨書土器 (10) ……………330
第216図	「西」の変遷……………296	第255図	北島遺跡出土墨書土器 (11) ……………331
第217図	「西」の分布……………296	第256図	北島遺跡出土墨書土器 (12) ……………332
第218図	「井」の変遷……………297	第257図	北島遺跡出土墨書土器 (13) ……………333
第219図	「少君」の変遷……………298	第258図	北島遺跡出土墨書土器 (14) ……………334

第259図	北島遺跡出土墨書土器 (15) ……………	335	第294図	冢樋 (1) ……………	396
第260図	北島遺跡出土墨書土器 (16) ……………	336	第295図	冢樋 (2) ……………	397
第261図	北島遺跡出土墨書土器 (17) ……………	337	第296図	冢樋 (3) ……………	398
第262図	北島遺跡出土墨書土器 (18) ……………	338	第297図	冢樋 (4) ……………	399
第263図	北島遺跡出土墨書土器 (19) ……………	339	第298図	近世陶磁器 (1) ……………	400
第264図	北島遺跡出土墨書土器 (20) ……………	340	第299図	近世陶磁器 (2) ……………	401
第265図	北島遺跡出土墨書土器 (21) ……………	341	第300図	土管・瓦……………	402
第266図	北島遺跡出土墨書土器 (22) ……………	342	第301図	古銭……………	403
第267図	第42号井戸出土木簡……………	357	第302図	近世の木製品 (1) ……………	405
第268図	木簡記載文字拡大 (1) ……………	358	第303図	近世の木製品 (2) ……………	406
第269図	木簡記載文字拡大 (2) ……………	359	第304図	近世の木製品 (3) ……………	407
第270図	古代の木製品 (1) ……………	361	第305図	木製品の各部名称・計測位置……………	407
第271図	古代の木製品 (2) ……………	362	第306図	護摩札 (1) ……………	409
第272図	木製品の各部名称・計測位置……………	363	第307図	護摩札 (2) ……………	410
第273図	中世の遺構全体図……………	365	第308図	第85号井戸跡出土鹿角……………	416
第274図	北島遺跡全体図と井戸跡……………	366	第309図	獣骨の種類別割合と出土遺構別資料数……………	416
第275図	山吹双鳥鏡出土土壙墓……………	368	第310図	獣骨分布図 (1) ……………	417
第276図	中世遺物の等密分布……………	372	第311図	獣骨分布図 (2) ……………	418
第277図	中世の出土遺物 (1) 中世陶器 (1) ……	373	第312図	獣骨分布図 (3) ……………	419
第278図	中世の出土遺物 (2) 中世陶器 (2) ……	374	第313図	第239号溝獣骨出土状態 ……………	420
第279図	中世の出土遺物 (3) 中世陶器 (3) ……	375	第314図	北島遺跡の竪穴住居跡数の変化……………	427
第280図	中世の出土遺物 (4) 中世陶器 (4) ……	376	第315図	第I期の竪穴住居跡の分布……………	429
第281図	中世の出土遺物 (5) 中世陶器 (5) ……	377	第316図	第II期の竪穴住居跡の分布……………	430
第282図	中世の出土遺物 (6) 中世陶器 (6) ……	378	第317図	第III期の竪穴住居跡の分布……………	434
第283図	中世の出土遺物 (7) 青磁・白磁……………	379	第318図	北島遺跡出土の陶硯……………	435
第284図	中世の出土遺物 (8) かわらけ皿……………	380	第319図	人名墨書土器のグループ……………	435
第285図	中世の出土遺物 (9) 板碑……………	381	第320図	第IV期の竪穴住居跡の分布……………	438
第286図	木製品の各部名称・計測位置……………	385	第321図	第V期の竪穴住居跡の分布……………	439
第287図	中世の木製品 (1) ……………	386	第322図	埼玉県内の主な井戸枠の出土した遺跡……………	441
第288図	中世の木製品 (2) ……………	387	第323図	埼玉県内の井戸構造の変遷模式図……………	442
第289図	中世の木製品 (3) ……………	388	第324図	立地と水溜の規模……………	443
第290図	中世の木製品 (4) ……………	389	第325図	立地と開口部の規模……………	443
第291図	中世の木製品 (5) ……………	390	第326図	北島遺跡の井戸枠に用いられた転用材……………	445
第292図	近世遺構全体図……………	393	第327図	木器分析試料 (1) ……………	461
第293図	迅速図と1/10000都市計画図と 北島遺跡の調査区……………	394	第328図	木器分析試料 (2) ……………	462
			第329図	木器分析試料 (3) ……………	463

図版目次

- 図版1 道路跡・河川跡
図版2 河川跡・集石遺構
図版3 集石遺構・土器集中出土地点
図版4 土器集中出土地点出土状況
図版5 井戸跡出土遺物（1）
図版6 井戸跡出土遺物（2）
図版7 井戸跡出土遺物（3）
図版8 井戸跡出土遺物（4）・木札・双鳥鏡・骨
出土状態
図版9 冢樋跡及び遺物出土状態
図版10 冢樋跡の構造（1）
図版11 冢樋跡の構造（2）・出土遺物
図版12 竪穴住居跡出土土器（1）
図版13 竪穴住居跡出土土器（2）
図版14 竪穴住居跡出土土器（3）
図版15 竪穴住居跡出土土器（4）
図版16 竪穴住居跡出土土器（5）
図版17 竪穴住居跡出土土器（6）
図版18 竪穴住居跡出土土器（7）
図版19 竪穴住居跡出土土器（8）
図版20 竪穴住居跡出土土器（9）
図版21 竪穴住居跡出土土器（10）
図版22 竪穴住居跡出土土器（11）
図版23 竪穴住居跡出土土器（12）
図版24 竪穴住居跡出土土器（13）・掘立柱建物跡
出土土器・井戸跡出土土器（1）
図版25 井戸跡出土土器（2）
図版26 井戸跡出土土器（3）
図版27 井戸跡出土土器（4）
図版28 井戸跡出土土器（5）・土壙出土土器（1）
図版29 土壙出土土器（2）
図版30 土壙出土土器（3）
図版31 土壙出土土器（4）
図版32 土壙出土土器（5）
図版33 土壙出土土器（6）
図版34 土壙出土土器（7）
図版35 土壙出土土器（8）
図版36 土壙出土土器（9）・溝跡出土土器（1）
図版37 溝跡出土土器（2）
図版38 溝跡出土土器（3）
図版39 溝跡出土土器（4）
図版40 溝跡出土土器（5）
図版41 溝跡出土土器（6）
図版42 溝跡出土土器（7）
図版43 溝跡出土土器（8）
図版44 溝跡出土土器（9）
図版45 溝跡出土土器（10）
図版46 溝跡出土土器（11）
図版47 溝跡出土土器（12）
図版48 溝跡出土土器（13）・小穴出土土器（1）
図版49 小穴出土土器（2）
図版50 小穴出土土器（3）
図版51 小穴出土土器（4）
図版52 小穴出土土器（5）・地鎮跡出土土器・河
川跡出土土器（1）
図版53 河川跡出土土器（2）・土器集中出土地点
出土土器（1）
図版54 土器集中出土地点出土土器（2）
図版55 土器集中出土地点出土土器（3）
図版56 土器集中出土地点出土土器（4）
図版57 土器集中出土地点出土土器（5）
図版58 土器集中出土地点出土土器（6）
図版59 土器集中出土地点出土土器（7）
図版60 土器集中出土地点出土土器（8）
図版61 土器集中出土地点出土土器（9）
図版62 土器集中出土地点出土土器（10）
図版63 土器集中出土地点出土土器（11）
図版64 土器集中出土地点出土土器（12）・遺物堆
積層出土土器（1）
図版65 遺物堆積層出土土器（2）

- 図版66 遺物堆積層出土土器(3)・墨書土器(1)
- 図版67 墨書土器(2)
- 図版68 墨書土器(3)
- 図版69 墨書土器(4)
- 図版70 墨書土器(5)
- 図版71 墨書土器(6)
- 図版72 墨書土器(7)
- 図版73 墨書土器(8)
- 図版74 墨書土器(9)
- 図版75 墨書土器(10)
- 図版76 墨書土器(11)
- 図版77 墨書土器(12)
- 図版78 墨書土器(13)
- 図版79 墨書土器(14)
- 図版80 墨書土器(15)・井戸粹材(1)
- 図版81 井戸粹材(2)
- 図版82 井戸粹材(3)
- 図版83 井戸粹材(4)
- 図版84 井戸粹材(5)
- 図版85 井戸粹材(6)
- 図版86 井戸粹材(7)
- 図版87 井戸粹材(8)
- 図版88 井戸粹材(9)
- 図版89 井戸粹材(10)
- 図版90 井戸粹材(11)・土錘(1)
- 図版91 土錘(2)・玉類・灰釉陶器(1)
- 図版92 灰釉陶器(2)
- 図版93 灰釉陶器(3)
- 図版94 灰釉陶器(4)
- 図版95 灰釉陶器(5)
- 図版96 紡錘車
- 図版97 漆付着土器・瓦(1)
- 図版98 瓦(2)
- 図版99 砥石(1)
- 図版100 砥石(2)
- 図版101 砥石(3)
- 図版102 青磁・白磁、中世陶器(1)
- 図版103 中世陶器(2)
- 図版104 中世陶器(3)
- 図版105 中世陶器(4)・かわらけ(1)
- 図版106 かわらけ(2)・板碑・土管
- 図版107 かわらけ(3)・摺鉢
- 図版108 近世陶器
- 図版109 近世瓦・古銭
- 図版110 中近世木器(1)
- 図版111 中近世木器(2)
- 図版112 中近世木器(3)
- 図版113 中近世木器(4)
- 図版114 中近世木器(5)
- 図版115 中近世木器(6)・鉄製品(1)
- 図版116 鉄製品(2)
- 図版117 鉄製品(3)・銅製品
- 図版118 中世第1号墓出土遺物・獣骨(1)
- 図版119 獣骨(2)
- 図版120 獣骨(3)
- 図版121 獣骨(4)
- 図版122 獣骨(5)
- 図版123 獣骨(6)
- 図版124 自然科学分析資料
- 図版125 第106号土壙出土山吹双鳥鏡 X線透過写真

I 発掘調査の概要

1. 発掘調査に至る経過

埼玉県は、「環境優先・生活重視」、「埼玉の新しいくにづくり」を基本理念として、豊かな彩の国づくりを推進するため、種々の施策を講じている。各種大型のスポーツ大会の開催やスポーツ施設の整備を進めてきたのは、本県におけるスポーツの振興を図り、時代を担う人づくりを目標とした施策である。

2004年に開催される第59回国民体育大会、第4回全国身体障害者スポーツ大会に向け、そのメイン会場となる熊谷スポーツ文化公園の拡張整備事業も、その一環として計画されたものである。

熊谷スポーツ文化公園の拡張整備事業に先立ち、公園課長から平成9年7月18日付け公園第277号で、埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて、文化財保護課長あて紹介があった。それに対して文化財保護課は、平成9年12月2日～5日に遺跡範囲確認のための試掘調査を実施し、その結果、埋蔵文化財の所在が明確になったことから、平成9年12月22日付け教文第1254号で、概ね次のような回答をした。

1 埋蔵文化財の所在

名称	種別	時代	所在地
天神遺跡 (59-101)	集落跡・ 古墳・墓	弥生・古墳・奈良・ 平安・中世・近世	熊谷市大字上 川上
北島遺跡 (59-058)	集落跡・ 墓	弥生・古墳・奈良・ 平安・中世	熊谷市大字今 井
田谷遺跡 (59-071)	集落跡	古墳・奈良・平安	熊谷市大字上 中条
天神東遺跡 (59-078)	集落跡	古墳・奈良・平安・ 中世・近世	熊谷市大字上 川上

2 取扱い

上記の埋蔵文化財包蔵地は現状保存することが望ましいが、事業計画上やむを得ず現状変更する場合は、事前に文化財保護法第57条の3の規定に基づき発掘通知を提出し、記録保存のための発掘調査を実施してください。なお、発掘調査の実施については当課と別途協議してください。

さらに、公園外周道路については、平成11年9月2日付け公園第355号で照会があり、平成11年9月16・17日に遺跡範囲確認調査を行い、平成11年9月

22日付け教文第622号で次のとおり回答した。

1 埋蔵文化財の所在

名称	種別	時代	所在地
赤城遺跡 (59-100)	集落跡	古墳・奈良・平 安	熊谷市大字今 井
北島遺跡 (59-058)	集落跡・ 墓	弥生・古墳・奈良・ 平安・室町	熊谷市大字上 中条
田谷遺跡 (59-071)	集落跡	古墳・奈良・平 安	熊谷市大字上 中条

2 取扱い

文化財保護課は、公園課や北部公園建設事務所と協議を重ねて工事と埋蔵文化財保護との調整を図り、できるだけ盛土による現状保存の措置を講じた。しかし、工事の計画変更が不可能であるメイン陸上競技場、調節池、屋内運動場、外周道路などについては、止むを得ず記録保存の発掘調査を実施することとし、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団に発掘調査を依頼した。

調査は平成10年7月～平成12年12月まで2年5ヶ月にわたって行われた。

財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団から文化財保護法57条第1項にもとづき、埼玉県教育委員会教育長あてに埋蔵文化財発掘調査届が、また埼玉県知事から57条の3にもとづく発掘通知が提出された。それに対する指示通知は以下のとおりである。

発掘調査届：平成10年7月27日付け教文第2-77号

平成10年10月5日付け教文第2-120号

平成11年1月21日付け教文第2-178号

平成11年4月16日付け教文第2-5号

平成12年1月24日付け教文第2-129号

平成12年1月24日付け教文第2-130号

平成12年1月24日付け教文第2-131号

平成12年4月19日付け教文第2-3号

発掘通知：平成10年7月28日付け教文第3-278号

平成10年7月28日付け教文第3-279号

(文化財保護課)

2、発掘調査・報告書作成の経過

発掘調査

北島遺跡19地点の発掘調査は、第12次調査を平成11年4月8日から平成12年3月24日、および第15次調査を平成12年4月8日から平成12年12月28日まで行った。

調査面積は、第12次調査36,000㎡、第15次調査37,050㎡の計73,050㎡である。

発掘調査の経過については、詳細を第278集『北島遺跡V』に記したので参照していただきたい。

整理・報告書刊行

整理報告事業は、平成12年度から開始し、平成16年度まで継続予定である。本書にかかわる第19地点古代から近世の遺構と遺物については、平成12年4月から平成16年3月まで行った。

平成12年度は、整理事業の基礎作業を行い、平成13年度には、第19地点の古代の主な遺構と遺物について整理を行い、当事業団第278集『北島遺跡V』として刊行した。つづく平成14・15年度は、第278集であつかわなかった古代から近世の遺構と遺物について整理作業を行い、平成16年3月にこれらをまとめて本書とした。

平成12・13年度に行った整理・報告書作成の経過については、第278集に記したのでそちらを参照していただきたい。ここでは、本書にかかわる平成14・15年度の整理事業について記す。

平成14年4月 土器集中出土地点の遺物について、洗浄・注記を開始する。また第278集に掲載できなかった遺構の図面整理を開始する。

5月 引き続き土器集中出土地点の洗浄・注記を行う。注記の終了した遺物については、種別・産地・器種・その他の特徴で分類を行い、同時に報告書に挿図として掲載すべき遺物の抽出を行う。また挿図として使用する遺物の実測も開始した。

6月 土器集中遺物出土地点、及び遺物堆積層の

遺物の洗浄・注記を継続して行う。遺物の分類、挿図遺物の選択、実測についても継続する。遺構図の版組を行う。

7月 遺物堆積層の遺物の洗浄・注記を継続して行う。遺物堆積層についても同様の手法で遺物の分類、挿図遺物の選択、実測を行った。遺構図の版組を継続する。

8月 遺物堆積層・その他の土器類について洗浄・注記を行う。遺物堆積層の遺物の分類、挿図遺物の選択を終了し、土器集中遺物出土地点の分類データを表計算ソフトに入力する。挿図掲載遺物の実測を引き続き行う。遺物の復元を開始する。以後、平成15年9月まで復元作業を継続した。

9月 井戸枳材の洗浄を行う。また掲載遺物の抽出を行う。掲載する土器類の実測を継続する。土器集中遺物出土地点・遺物堆積層の分類データを表計算ソフトに入力する。遺構図の版組を継続する。

10月 井戸枳材の実測を開始する。土器類の実測を継続する。分類データの入力を継続する。版組の済んだ遺構図から電子トレースを開始する。

11月 井戸枳・土器類の実測、分類データの入力を継続する。遺物のトレースを開始する。

12月 井戸枳・土器類の実測を継続する。分類データを元に出土遺物の遺物の等密分布図を作製する。デジタルカメラで墨書土器の撮影を開始する。

平成15年1月 中世遺物の実測を開始する。井戸枳の実測、墨書土器の撮影を継続する。

2月 中世の遺物の実測を継続する。井戸枳の実測、墨書土器の撮影、遺物のトレースを継続する。画像データに基づいて墨書土器の実測を行う。

3月 近世の遺物の実測を継続する。井戸枳・墨書土器の実測を継続する。遺物のトレースを継続する。出土遺物の等密分布図のトレースを開始する。

4月 土器以外の遺物の実測を行う。井戸枳の実測、墨書土器の実測、遺物のトレース、出土遺物の

等密分布図のトレースを継続する。

5月 墨書土器の電子トレースを開始する。墨書土器の分布図を作製する。井戸枠の実測、墨書土器の実測、遺物のトレースは継続する。

6月 井戸枠・墨書土器の実測、遺物のトレースを継続する。墨書土器の時期別分布図を作製する。

7月 木器以外の実測作業を終了し、各トレースを継続する。井戸枠の版組とトレースを開始する。

8月 遺構図のトレースを終了する。井戸枠のトレースを継続する。古代の土器のトレースを終了し、仮版組を開始する。井戸枠の実測が終了し、版組を行う。木器の実測を開始する。

9月 木器の実測、土器類の着色、井戸枠のトレースを継続する。遺物の仮版組と併行して、遺物の記述を行う。

10月 木器の実測、土器類の着色、井戸枠のト

レースを継続する。墨書土器の原稿執筆を行う。

11月 遺構写真の整理を行い、遺物写真の撮影を行う。井戸枠の撮影に手間取る。井戸枠・木器のトレースを継続する。遺物堆積層、土器集中出土地点の原稿執筆を行う。

12月 遺物写真の焼き増しを行い、写真図版のレイアウトを行う。全遺物のトレースを終了し、仮版に併せて版組し、割付と台割を作成する。版下・原稿を入稿する。

平成16年1月 初稿を行う。報告書の挿図番号に併せて遺物と本文・表のチェックを行う。

2月 全ての遺物に収蔵カードを入れ、本文に併せて実測図に挿図番号を付ける。二校を行う。

3月 全ての遺物・遺物実測図・遺構実測図・写真・電子データの収納作業を終了する。三校を経て報告書の納品となる。

第1表 北島遺跡調査概要

地点名	面積	竪穴 住居跡	掘立 柱建物跡	井戸跡	土 壙	溝	柵 列	道路跡	水田跡	その 他	文献
単位	m ²	軒	棟	井	基	条	列	条	○		i
第1地点	5800	21	9	5	24	13					i
第2地点	1300	9	13	2	13	24					i
第3地点	2900	54	1	9	34	65					i
第4地点	1800	45	7	3	17	17					i
第5地点	1600	37	2	2	0	25					i
第6地点	1000	29	6	5	38	0				墓壙(1)	i
第7地点	2200	4	15	1	18	20					i
第8地点	300	3	2	0	4	2					i
第9地点	900	4	1	1	7	35					ii
第10地点	10000	2	8	0	15	35				火葬墓(2)	ii
第11地点	150	0	0	0	7	15					ii
第12地点	1250	21	2	2	114	30					iii
第13地点	1400	0	3	1	19	31					iii
第14地点	19100	72	43	15	78	102	4				iv
第15地点	4200	34	9	0	28	29		1			iv
第16地点	8480	11	15	20	48	119	2				iv
第19地点	10000	192	77	95	497	442		2	○	地鎮跡(1)	v
文献											
i	『北島遺跡』	1989	(助)埼玉県埋蔵文化財調査事業団	第81集							
ii	『北島遺跡(II)』	1989	(助)埼玉県埋蔵文化財調査事業団	第88集							
iii	『北島遺跡(III)』	1991	(助)埼玉県埋蔵文化財調査事業団	第103集							
iv	『北島遺跡(IV)』	1998	(助)埼玉県埋蔵文化財調査事業団	第195集							
v	『北島遺跡(V)』	2002	(助)埼玉県埋蔵文化財調査事業団	第260集							

3 発掘調査、整理・報告書刊行の組織

主体者 財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

(1) 発掘調査 (平成11~12年度)

理事長 (平成11) 荒井 桂
 理事長 (平成12) 中野 健一
 副理事長 飯塚 誠一郎
 常務理事兼管理部長 広木 卓
 管理部
 副部長兼経理課長 (平成11) 関野 栄一
 副部長 (平成12) 関野 栄一
 主任 江田 和美
 主任 福田 昭美
 主任 腰塚 雄二
 主任 菊池 久
 庶務課長 (平成12) 金子 隆
 主席 (庶務担当) (平成12) 阿部 正浩
 主任 長滝 美智子
 主任 査 (平成11) 田中 裕二
 主席 (施設担当) (平成12) 野中 廣幸
 調査部
 調査部長 (平成11) 増田 逸朗
 調査部長 (平成12) 高橋 一夫
 副部長 (平成11) 水村 孝行
 副部長 (平成12) 石岡 憲雄
 主席調査員 (平成11) 今井 宏
 主席調査員 小野 美代子
 統括調査員 (平成11) 利根川 章彦
 統括調査員 (平成11) 若松 良一
 統括調査員 (平成11) 細田 勝
 統括調査員 (平成11) 富田 和夫
 統括調査員 (平成12) 宮井 英一
 統括調査員 (平成12) 赤熊 浩一
 統括調査員 鈴木 孝之
 統括調査員 (平成11) 石井 伸明
 主任調査員 (平成11) 黒坂 禎二
 主任調査員 吉田 稔

主任調査員 (平成12) 大谷 徹
 主任調査員 (平成11) 村田 章人
 主任調査員 (平成11) 田中 広明
 主任調査員 (平成12) 君島 勝秀
 主任調査員 (平成12) 山本 靖
 主任調査員 福田 聖
 主任調査員 (平成11) 岩田 明広
 主任調査員 (平成11) 渡辺 清志

(2) 整理作業 (平成14・15年度)

理事長 桐川 卓雄
 副理事長 飯塚 誠一郎
 常務理事兼管理部長 (平成14) 大館 健
 常務理事兼管理部長 (平成15) 中村 英樹
 管理部
 副部長 (平成15) 村田 健二
 管理幹 (平成14) 持田 紀男
 主席 (平成15) 田中 由夫
 主任 江田 和美
 主任 長滝 美智子
 主任 福田 昭美
 主任 腰塚 雄二
 主任 菊池 久
 調査部
 調査部長 (平成14) 高橋 一夫
 調査部長 (平成15) 宮崎 朝雄
 調査部副部長 坂野 和信
 主席調査員 (資料整理担当) 磯崎 一
 主席調査員 (平成15) 金子 直行
 統括調査員 富田 和夫
 統括調査員 吉田 稔
 統括調査員 大谷 徹
 主任調査員 田中 広明
 主任調査員 山本 靖

Ⅱ 遺跡の立地と環境

北島遺跡は、埼玉県熊谷市大字上川上323他に位置する。新幹線・高崎線・秩父鉄道のターミナル駅のある熊谷市は、埼玉県内の基幹道路である国道17号線が市の中央部を通り、文字通り、県北の政治経済を支える中核的都市である。

この国道17号線の北は、県内有数の穀倉地帯が広がり、商品作物の栽培や、養豚・乳牛などの畜産が盛んである。近年では、都市化の波が広がり、分譲住宅があちこちにみられるようになってきた。

このような環境の中、埼玉県は、県北部にスポーツ・文化の中核的公園施設を熊谷市に誘致し、昭和60年以降、その整備を進めてきた。

北島遺跡は、この熊谷スポーツ文化公園の周辺に広がる県内最大規模の遺跡である。南北1km、東西1.5kmに及ぶこの遺跡には、弥生時代から近世に至るさまざまな遺構・遺物が埋蔵されている。

ところで北島遺跡を含む熊谷市は、秩父山地に源のある荒川が形成した扇状地に立地する。この荒川

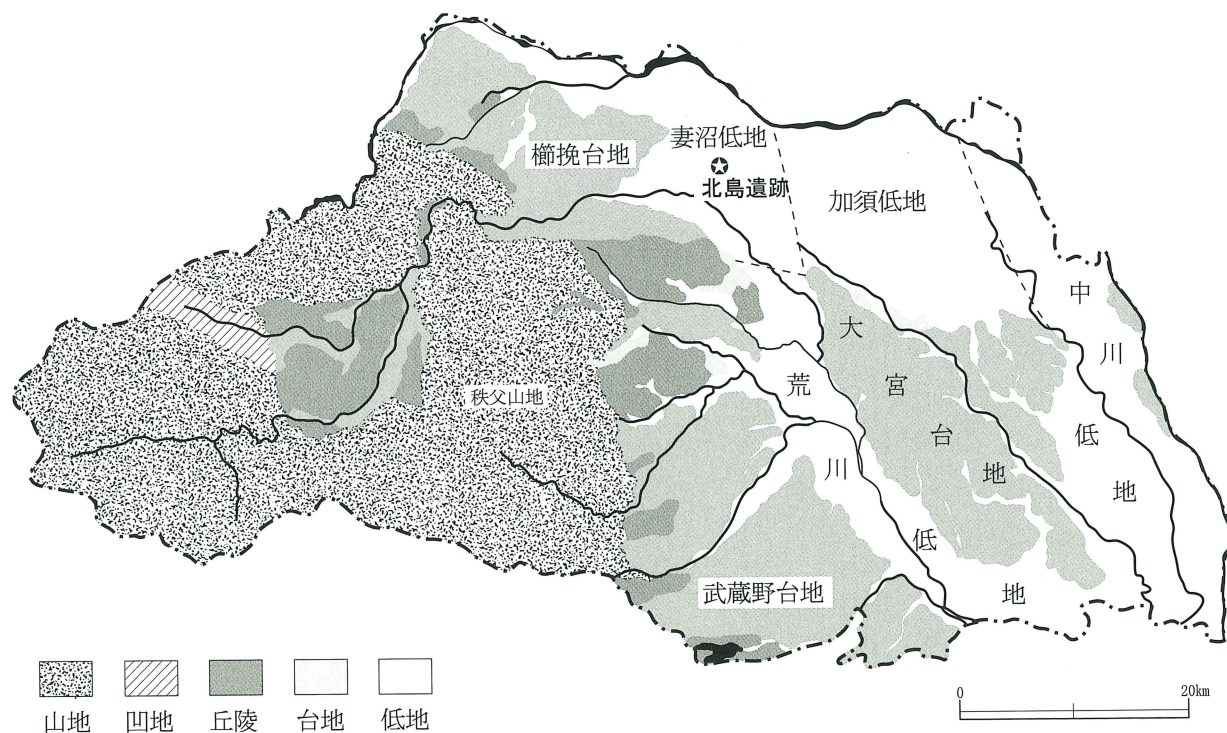
がもたらした肥沃な土砂は、東西に長く伸びる自然堤防を形成し、その一つに北島遺跡は営まれた。また荒川扇状地の扇端部には、多くの湧水点があり、穀倉地帯を潤した小河川の源ともなっている。

しかし北島遺跡周辺は、水田経営の好適地でありながら、荒川や利根川の度重なる洪水にさらされることがしばしばあり、遺跡内にも、洪水による堆積層を確認することができる。

現在では、北島遺跡の周辺は平坦な地形となっているが、かつては沼沢や三日月湖、あるいは湿地の広がる起伏に富んだ地形であった。

さて、北島遺跡は、これまで異なる調査原因で15次21地点に及ぶ発掘調査を（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施してきた。またその結果は、8冊の発掘調査報告書にまとめている。

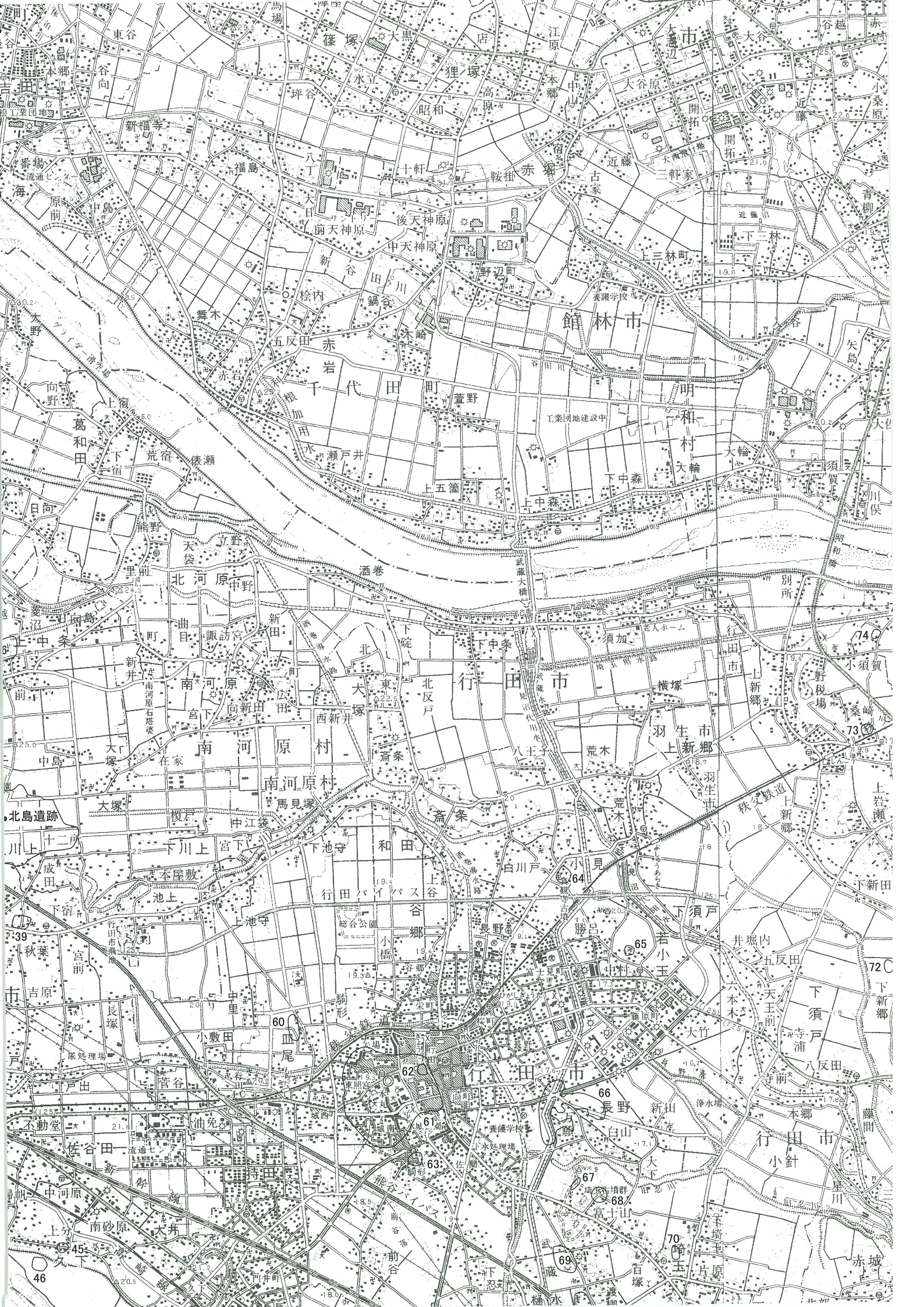
今回、本書では、第19地点の古代以降の遺構・遺物について報告する。すでに古代の立地と環境については、第278集『北島遺跡Ⅴ』で記述しており、



第1図 埼玉県の地形区分



第2図 北島遺跡周辺遺跡の分布 (中世)



東谷 篠塚 大黒 店 江原 大谷 谷越 赤

谷向 狸塚 高 中山 大谷原 開拓 開拓 近藤 小栗原

新福寺 坪谷 水立 昭和 宿 赤堀 近藤 三軒家 開拓 近藤

海 原前 中島 福島 八丁 十軒 鞍掛 赤堀 古家 上三林町 矢島

前 野 大日 野辺町 後天神原 中天神原 野辺町 上三林町 矢島

舞木 新谷 田川 鍋谷 赤堀 千代田 菅野 明和 村 大輪

五反田 赤岩 千代田 菅野 明和 村 大輪 須賀 須賀

高和田 下宿 荒宿 後瀬 酒巻 武蔵大橋 須賀 須賀

日向 立野 北河原 中野 酒巻 武蔵大橋 須賀 須賀

北河原 中野 酒巻 武蔵大橋 須賀 須賀

北河原 中野 酒巻 武蔵大橋 須賀 須賀

北河原 中野 酒巻 武蔵大橋 須賀 須賀

北河原 中野 酒巻 武蔵大橋 須賀 須賀

北河原 中野 酒巻 武蔵大橋 須賀 須賀

北河原 中野 酒巻 武蔵大橋 須賀 須賀

北河原 中野 酒巻 武蔵大橋 須賀 須賀

北河原 中野 酒巻 武蔵大橋 須賀 須賀

北河原 中野 酒巻 武蔵大橋 須賀 須賀

北河原 中野 酒巻 武蔵大橋 須賀 須賀

北河原 中野 酒巻 武蔵大橋 須賀 須賀

北河原 中野 酒巻 武蔵大橋 須賀 須賀

北河原 中野 酒巻 武蔵大橋 須賀 須賀

北河原 中野 酒巻 武蔵大橋 須賀 須賀

北河原 中野 酒巻 武蔵大橋 須賀 須賀

北河原 中野 酒巻 武蔵大橋 須賀 須賀

北河原 中野 酒巻 武蔵大橋 須賀 須賀

北河原 中野 酒巻 武蔵大橋 須賀 須賀

北河原 中野 酒巻 武蔵大橋 須賀 須賀

北河原 中野 酒巻 武蔵大橋 須賀 須賀

北河原 中野 酒巻 武蔵大橋 須賀 須賀

北河原 中野 酒巻 武蔵大橋 須賀 須賀

北河原 中野 酒巻 武蔵大橋 須賀 須賀

北河原 中野 酒巻 武蔵大橋 須賀 須賀

ここでは重複をさけ、中世以降の北島遺跡について、その立地と環境を述べておきたい。

天仁元（1108）年、上信国境の浅間山が噴火し、上野・武蔵国には、多量の火山灰が降り注いだ。いわゆる浅間山B軽石層の形成である。この火山灰は、多くの水田を覆ったが、なかなか除去されず、耕地として復興したのは、空白の12世紀をはさみ、13世紀以降のこととなる。

ようやく平安時代末期から鎌倉時代になると、『平家物語』や『吾妻鏡』などに登場する武蔵武士の館跡と伝承される遺跡や寺院跡・集落などが、北島遺跡の周囲に散在するようになる。

熊谷市内には、西方遺跡・西別府館跡・別府城跡・別府氏館跡・玉井陣屋跡・奈良氏館跡・黒沢館跡・樋の上遺跡・若松遺跡・兵部裏屋敷・社裏遺跡・社裏北遺跡・社裏南遺跡・熊谷氏館跡・箱田氏館跡・成田氏館跡・河上氏館跡・中条氏館跡・光屋敷遺跡・久下氏館跡・市田氏館跡などの中世遺跡がある。

なかでも中条氏館跡や樋の上遺跡・黒沢館跡・三ヶ尻遺跡・社裏遺跡・社裏北遺跡・社裏南遺跡などは、発掘調査が行われ多くの情報が集積されている。中条氏館跡は、中条氏ゆかりの常光院周辺である。

常光院は、長承元（1132）年に出羽国守に任じられ、武蔵國中条に下向した常光が、中条氏を名乗ったのにかかわり、常光後裔の家長（1165～1236）の代には、成立していたと言われる。

家長は、石橋山の合戦以降、頼朝・頼家・実朝・頼経に仕えた武蔵武士である。彼は、また従五位下出羽国守や幕府の評定衆にも任じられ、御成敗式目の起草にもかかわったとされる。

中条氏館跡は、これまで常光院東遺跡、権現山遺跡などが発掘調査され、13世紀から14世紀の土師質土器皿や板碑等が出土した。なお常光は、当初は光屋敷に居住したという。

また黒沢館跡では、土塁・堀を台形に巡らした館跡が確認され、14世紀から15世紀の陶磁器や板碑が出土した。

発掘調査はされていないが、別府氏の居館である別府城跡は、方形の敷地に土塁や空堀を良く残す。さらに北島遺跡の南には、成田氏の居館とされる成田氏館跡と、累代の墓が建てられた龍淵寺がある。

龍淵寺は、応永18（1411）年、成田左京亮家時 のとき、皿尾村の阿弥陀堂にいた和庵清順を招き建立したとされる。その後、永禄5（1563）年に失火し

1 東城	16伝幡羅太郎館	31別府城	46久下氏館	61忍城
2 西城城	17新田裏遺跡	32別府氏城	47村岡館	62行田氏館
3 実盛館	18増田四郎重富館	33玉井陣屋	48樋之上遺跡	63忍三郎館
4 堀の内	19原遺跡	34奈良氏館	49黒沢館	64麻積氏館
5 大河内金兵衛陣屋	20宮ヶ谷堀の内	35光屋敷	50若松遺跡	65鞘戸耕地館
6 聖天院館	21根岸遺跡	36中条氏館	51社裏北遺跡	66神明遺跡
7 長井氏館	22庁鼻和城	37北島遺跡	52社裏遺跡	67石田堤
8 高城城	23秋元氏館	38河上氏館	53社裏南遺跡	68鎌田氏館
9 荏原氏館	24No. 200遺跡	39成田氏館	54明戸堀の内	69石田陣屋
10堀内	25城下遺跡	40肥塚館	55坂下堀の内	70百塚通遺跡
11蓮沼氏館	26東方城跡	41箱田氏館	56三本堀の内	71内郷遺跡
12新開氏館	27No. 203遺跡	42熊谷氏館	57上杉館	72漆原館
13皿沼城	28幡羅遺跡	43兵部裏屋敷	58平山館	73桑崎堀の内
14深谷城	29西方遺跡	44御蔵場	59成沢館	74葛浜氏館
15八日市城	30西別府館	45市田氏館	60皿尾城	75寄居

て、本堂以下が焼け落ちた。しかし成田肥前守泰季が、翌年復興したという。

天正19(1592)年には、徳川家康が、遊獵のときに龍淵寺を訪ねた。家康は、住僧呑雪との個人的なかわりから、龍淵寺が、武蔵国太田庄成田のうち百石を所領とする朱印状をさずけた。

また北島遺跡19地点の冢樋から出土した護摩札には、「醫王薬師」の墨書があり、この醫王薬師は、西500mほどにある上川上村の醫王寺とも考えられる。醫王寺は、『新編武蔵風土記稿』によると、「新義真言宗、横見郡御所息障院末、川上山新錫院と号す、中興僧勢典延宝三(1676)年寂、本尊薬師」とあり、薬師堂があるとされる。

この他、樋の上遺跡は金浄寺跡、若松遺跡は般若寺跡と言われ、火葬墓や土壙群が確認されている。さらに三ヶ尻遺跡・社裏遺跡・社裏北遺跡・社裏南遺跡・西方遺跡では、土壙墓群が確認され、墓域が広がっていたことが明らかとなった。

熊谷市の西、深谷市では、東方城跡・庁鼻和城跡・幡羅太郎館跡・新田裏遺跡・増田四郎重富館・原遺跡・宮ヶ谷戸堀の内遺跡・根岸遺跡・城下遺跡などがみられる。

とくに深谷上杉氏は、当初、庁鼻和城跡を居城としたが、後に房憲のとき、古河公方の勢力との緊張関係から深谷城に移った。第2図にはみられないが、人見館跡や秋本氏館跡・押切遺跡などが、深谷上杉氏の家臣の居館として存在する。

一方、東に目を転じ行田市には、忍城を初め、皿尾城跡・行田氏館跡・忍三郎館跡・麻績氏館跡・靱戸耕地館跡・神明遺跡・石田堤・鎌田氏館跡・石田陣屋跡・百塚通遺跡・内郷遺跡・漆原館跡・桑崎堀の内遺跡・葛原氏館跡・寄居遺跡などの中世遺跡がある。

とくに忍城は、15世紀後半から16世紀末まで成田氏の居城であった。忍城は、「忍の浮城」と呼ばれるように河川・沼沢に囲まれた城である。天正18(1590)年、石田三成の水攻めは、あまりにも有名である。この時に築堤された石田堤は、今も行田市から吹上町にかけて残る。

この他、妻沼町には、東城・西城・斎藤別当実盛館跡・大河内金兵衛陣屋・聖天院館跡・長井氏館跡・高城城跡・荏原氏館跡などがある。なお武蔵国埼玉郡の大半が、中世には、太田庄の庄域となっていた。

Ⅲ 遺跡の概要

北島遺跡は、平成14年度末までに16地点（62,380 m²）について、各種の開発行為に伴う発掘調査、及び報告が行われてきた。本巻第1編（当事業団第278集）で、これまでの概要を記したのでそちらを参照していただきたい。ここでは、本報告にかかわる点のみ記すこととしたい。

北島遺跡は、熊谷市上川上の熊谷スポーツ文化公園の大半を占める。敷地の広大な熊谷スポーツ文化公園には、北島遺跡の他、天神東遺跡や田谷遺跡・天神遺跡などが含まれる。

今回の公園整備計画で田谷遺跡も含まれることから、記録保存の対照となる地点について発掘調査を行った。なお田谷遺跡は、第Ⅳ巻であつかう。

本編であつかう遺構・遺物は、古代では、道路跡・河川跡・集石遺構・土器集中出土地点などの遺構、井戸枠・木製品・墨書土器・木簡などである。

中世の遺構には、掘立柱建物跡・井戸跡・溝跡、などの他に山吹双鳥鏡を出土した土壌があった。また出土した遺物は、中世陶器、青磁・白磁などの貿易陶磁器、カワラケ、硯、板碑、木製品などがある。

近世の遺構は、溝・坎樋跡などがあり、陶磁器・土管・瓦・古銭・金属器・木製品などが出土した。

なお北島遺跡では、これまでの調査で竪穴住居跡538軒、掘立柱建物跡213棟、井戸161井、土壌961基、溝跡1004条を確認したこととなる。

第Ⅰ巻第1編でも述べたように、北島遺跡第19地点では、平安時代に営まれた二重の区画溝（築地）で囲まれた方形の居宅を確認した。区画内では、緑釉陶器・灰釉陶器を比較的豊富に消費していたことが分かった。

区画内には、五間四面屋が築かれ、東には、四脚門を確認した。大形の四面屋は、第2地点でも確認されている。また調査区の南には、幅6mの東西道路が通っていた。

この区画施設に先行する奈良時代には、倉庫と考えられる総柱建物と居住施設の三間屋を中心とした集落が築かれていた。

集落跡は、調査区全体の西側に片寄り、弥生時代から古墳時代前期にかけての用排水路を挟んで東側には、6世紀から7世紀にかけての群集墳の一部が広がっていた。この古墳群は、中条古墳群にあたり、その南端にあたる。

奈良時代には、蒸籠組みをした大形の井戸が、2基築かれた。井戸跡の概要は、第1編で記したが、本書では、井戸枠材について詳述した。またこの井戸から習書木簡が出土した。

この木簡は、「長」や「是」、あるいは「有」といった文字を一生懸命に練習していた様子を窺うことができる史料である。

遺跡を東西に分断する中央低地帯には、古墳時代後期から奈良時代にかけて、大量の土器が集積（廃棄）された。とくに奈良時代には、墨書土器が多く、「綱」「土万」「第成」などの文字が書かれていた。

また「横見郡」や「西秦」などの地名、「後家」「南家」などの家号も確認できた。低地や河川から土器が大量に出土する事例は、これまでも第7・14地点でみられたが、今回ほど大量の例はなかった。

中世になると、やはり西側台地に掘立柱建物や井戸跡がみられる。とくに竹を立てて壁面とした井戸枠は、この地域の特徴的な工法である。

近世に遺跡全体は、水田となっていた。第19地点では、この水田を潤した用水路を確認することができた。調査区西端では、用水路の水量を調節した坎樋の跡を確認することができた。

坎樋からは、近世の陶磁器や木製品・天保通寶などが出土し、近世末期の農村の姿が分かる貴重な資料となった。また護摩札が出土し、坎樋にかかわる祭祀の様子を窺うことができた。

IV 遺構と遺物

(1) 古代



第3図 道路跡・河川跡他全体図

8. 道路跡

調査区の南辺で確認した並行して走る直線的な溝跡は、道路跡である。第273集では、単に溝跡として報告したが、道路跡の側溝といえる溝跡が含まれていた。そこで便宜的に組み合わせを推定し、第1～4号道路跡として以下に報告する。

また、南河川跡の肩部にも道路跡を一条確認し、第5号道路跡とした。なお、溝の規模や出土遺物の詳細は、第273集を参照していただきたい。

第1号道路跡

調査区の南辺中央から調査区東辺に向かって確認できた。北側は第342号溝、南側は第387号溝である。溝の心の間は、9.0mである。道路跡の走行方向は、N-68°-Eである。

路面上に波板状圧痕や硬化面などは、確認できなかった。これは遺構確認面が、古墳時代前期の堅穴住居跡と同一面であったためである。第2・3・4号道路跡よりも新しい。近世の道路跡であろう。

明治10年の迅速図と調査区を合成した293図によると、この迅速図に現れた上川上村から大塚村へ向かう道路と一致する。

第2号道路跡

調査区の南端、西南部から南辺に向かって確認できた。南河川跡と並行して走る。北側側溝は、第330・331・403号溝、南側の側溝は、第397・408号溝である。他の溝、とくに第3号溝によって大きく削られ、側溝の全形を知ることができない。溝の心間距離は、10.5～11.5mである。道路跡の走行方向は、N-66°-Wである。

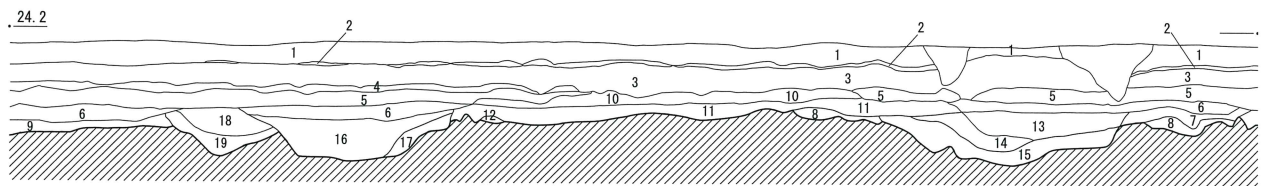
路面上に波板状の圧痕を確認できなかった。第1・3・4号道路跡よりも古い。

第3号道路跡

同じく調査区の南端、西南部から南辺に向かって確認できた。南河川跡と並行して走る。北側の側溝は、第319-1・329・386号溝、南側の側溝は、第326・397・411号溝である。南側の側溝は、第4号道路跡の南側の側溝によって削られるが、北側の側溝は、途切れ途切れとなり、土壌が連続しているように見える。

直線的に東西に延びる道路である。溝の心間距離は13.2m、路面幅は、12.0mである。道路跡の走行方向は、N-71°-Wである。

路面上に波板状の圧痕や硬化面は、確認できな



調査区南側の標準土層断面

- | | |
|---------|--------------------------|
| 1 耕作土 | 浅間山A軽石多く含む |
| 2 茶褐色土 | 水田床土 酸化鉄の凝縮した層 浅間山A軽石を含む |
| 3 暗灰色土 | 浅間山B軽石多く含む粘質土 中世～近世の水田 |
| 4 灰褐色土 | 浅間山B軽石推積層 |
| 5 暗茶褐色土 | 茶色粒子 マンガン粒子含む |
| 6 暗褐色土 | 白色粒子 炭化物粒子含む |
| 7 暗褐色土 | 炭化物層 しま状に斑紋あり |
| 8 暗褐色土 | 黄白色粘土ブロック混じり |
| 9 灰色土 | 炭化物粒子やや多い粘質土 |

第4号道路跡

- | | |
|---------|--|
| 10 暗褐色土 | 暗褐色土混じりの砂質土 非常に硬く締まる
土器片多く含む |
| 11 明褐色土 | 明褐色粘土と酸化鉄を多く含む 非常に硬く
締まる砂質土 土器片多く含む |
| 12 黒色土 | 炭化物多い |
- ※最低1回は、掻き上げて道路として使用したと考えた

第316号溝（道路北側側溝）

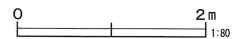
- | | |
|---------|-----------|
| 13 灰色土 | 粘質土 |
| 14 明灰色土 | 白色粘土多い粘質土 |
| 15 暗褐色土 | 炭化物多い |

第325号溝（道路南側側溝）

- | | |
|---------|--------------|
| 16 灰色土 | 白色粘土含む |
| 17 明灰色土 | 白色粘土 炭化物やや多い |

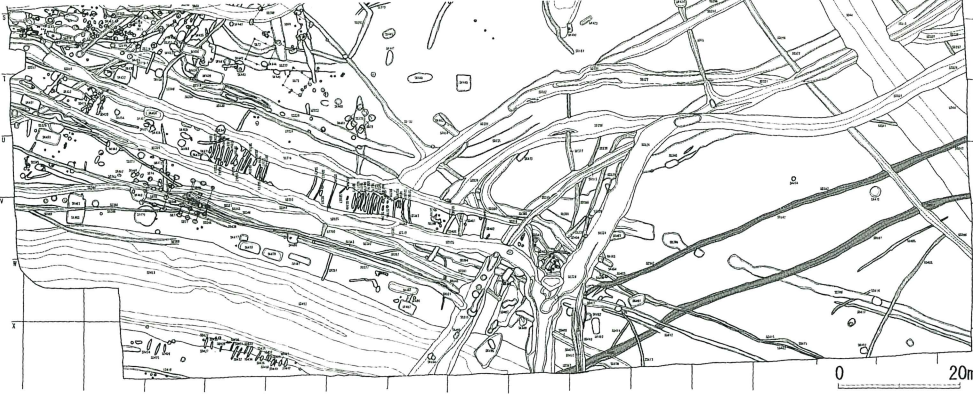
第326号溝

- | | |
|---------|-----|
| 18 灰色土 | 粘質土 |
| 19 明灰色土 | 粘質土 |

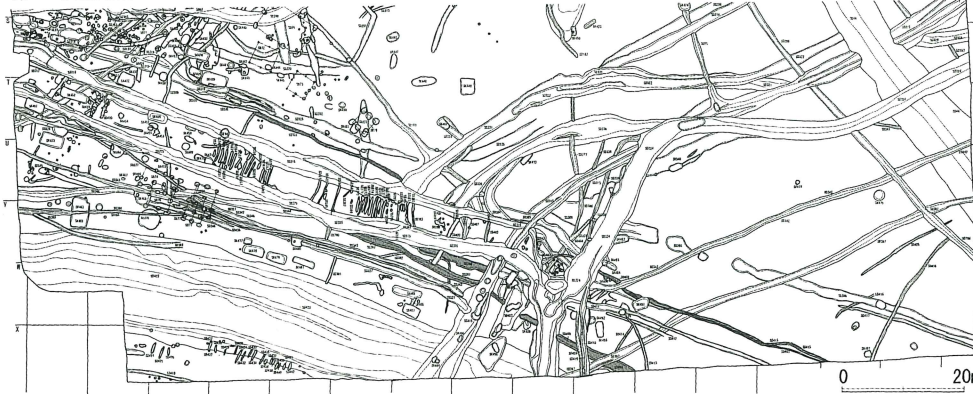


第4図 道路跡土層断面

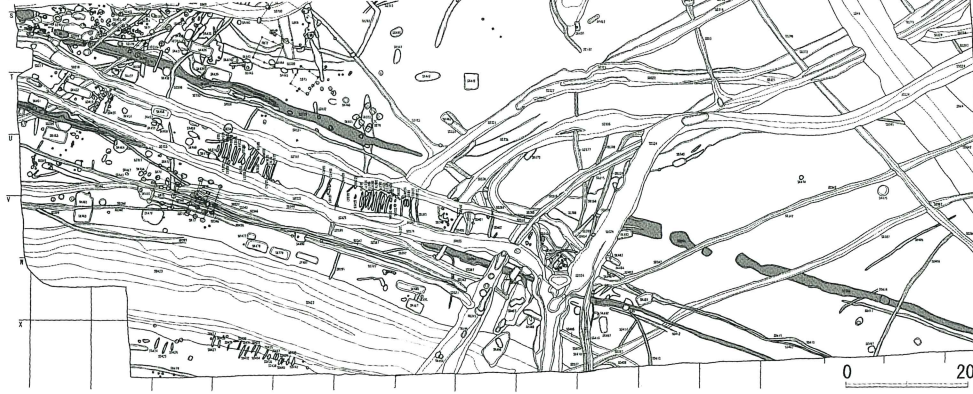
第1号道路跡



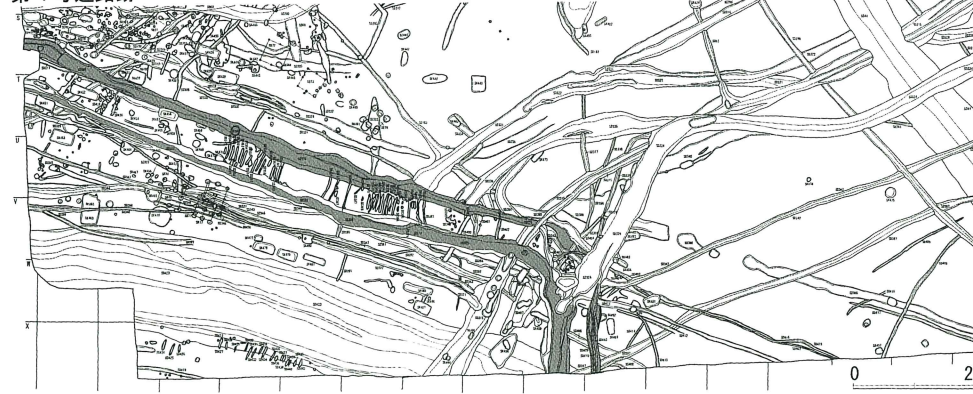
第2号道路跡



第3号道路跡



第4号道路跡



側溝
路盤
道路跡
側溝

河川跡

第5図 道路跡模式図

った。第1・4号道路跡よりも古く、第2号道路跡よりも新しい。

第4号道路跡

同じく調査区の南端、西南部から南辺中央に確認した。南河川跡と並行して走り、調査区の中央で南へ曲がる。南河川跡とのアクセス、橋脚などは確認できなかつた。側溝の両肩が崩れ、当初より幅広となったと考えたい。そのため路面上に見られた波板状圧痕の両端は、削られていた。

北側の側溝は、第316・410号溝、南側の側溝は、第325号溝である。調査区内では、道路跡のほぼ全形を知ることができるが、近世の河川跡によって南中央付近が破壊されている。側溝の心心間の距離は6.0m、路面幅は、4.0mである。道路跡の走行方向は、N-70°-Wである。

路面上に波板状の圧痕を確認した。平行する細かい溝状の遺構である。覆土に小石や土師器・須恵器の小片を含む。第419・422・347~402号溝として記録した遺構である。ただし硬化面は確認できなかった。第1号道路跡よりも古く、第2・3・4号道路跡よりも新しい。

以上から道路跡は、第2→3→4→1号道路跡の順に構築されたといえる。とくに第2・3号道路跡は、道路幅12mであることは、古代の駅路に匹敵し、また第4号道路跡も幅6mとすると、いわゆる「傳路（郡傳の路）」に相当する可能性がある。

ちなみに武蔵国は、宝亀2（771）年以前、東山道に属し、東山道は、上野国新田駅家から「五箇駅」をへて武蔵国府に入っていた。新田駅家から武蔵国府へ向かうには、北島遺跡の至近を通った可能性も高い。

しかし北島遺跡で確認された道路跡は、東西道路跡であり、宝亀2年以前のいわゆる東山道武蔵路のルートは、南北道路が想定されることから、東山道武蔵路と直接かかわらない道路跡であろう。

では北島遺跡で確認した道路跡は、どのような道

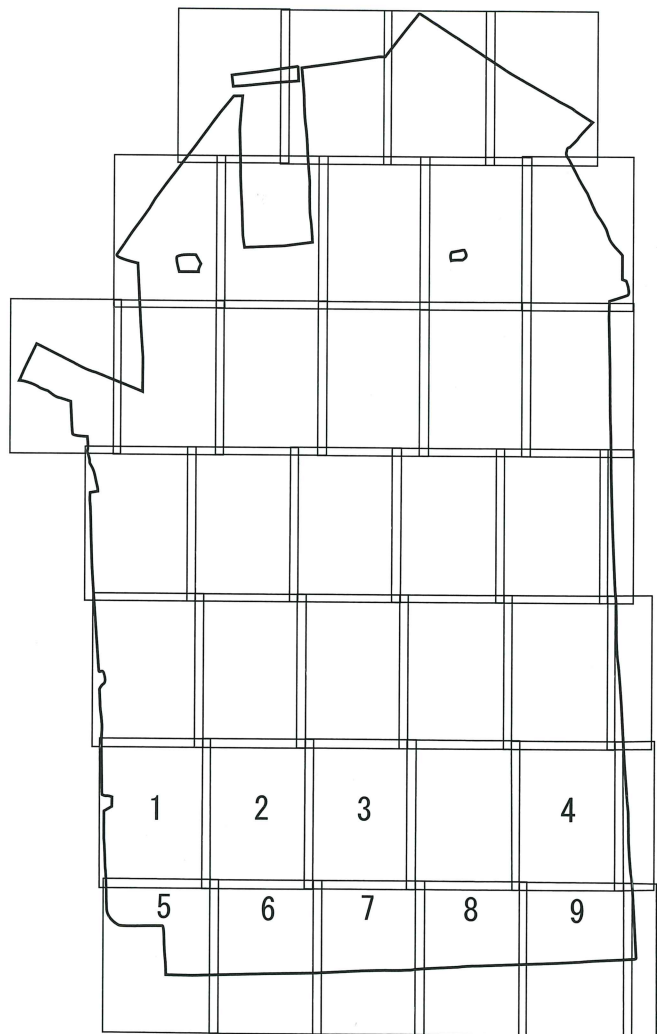
路跡だろうか。その可能性としては、①郡家間の連絡路であるいわゆる「郡傳」（傳路）、②駅路が、北島遺跡付近で屈曲しているため、③道路の跡ではなく、平行した用排水の溝であるなどを考えられる。

第2・3号道路跡については、このように問題も残るが、第4号道路跡については、幅6mということからいわゆる傳路の可能性を残しておきたい。

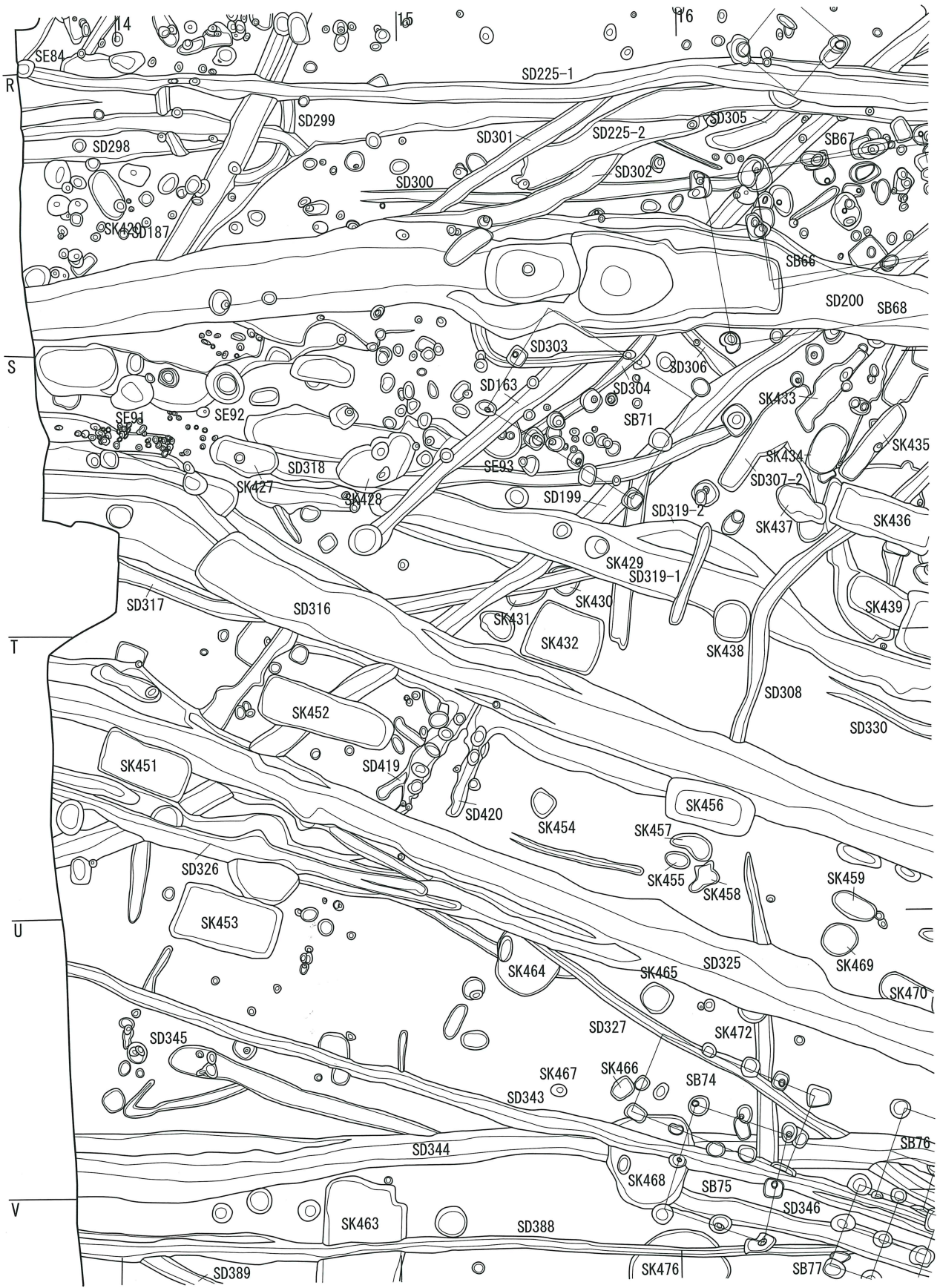
第5号道路跡

この他、南河川跡の南肩部に河川跡と直行した小溝を複数条確認した。第4号道路跡の波板状圧痕と共通し、道路状の遺構と考えた。側溝を確認することはできず、当初から無かったと考えた。

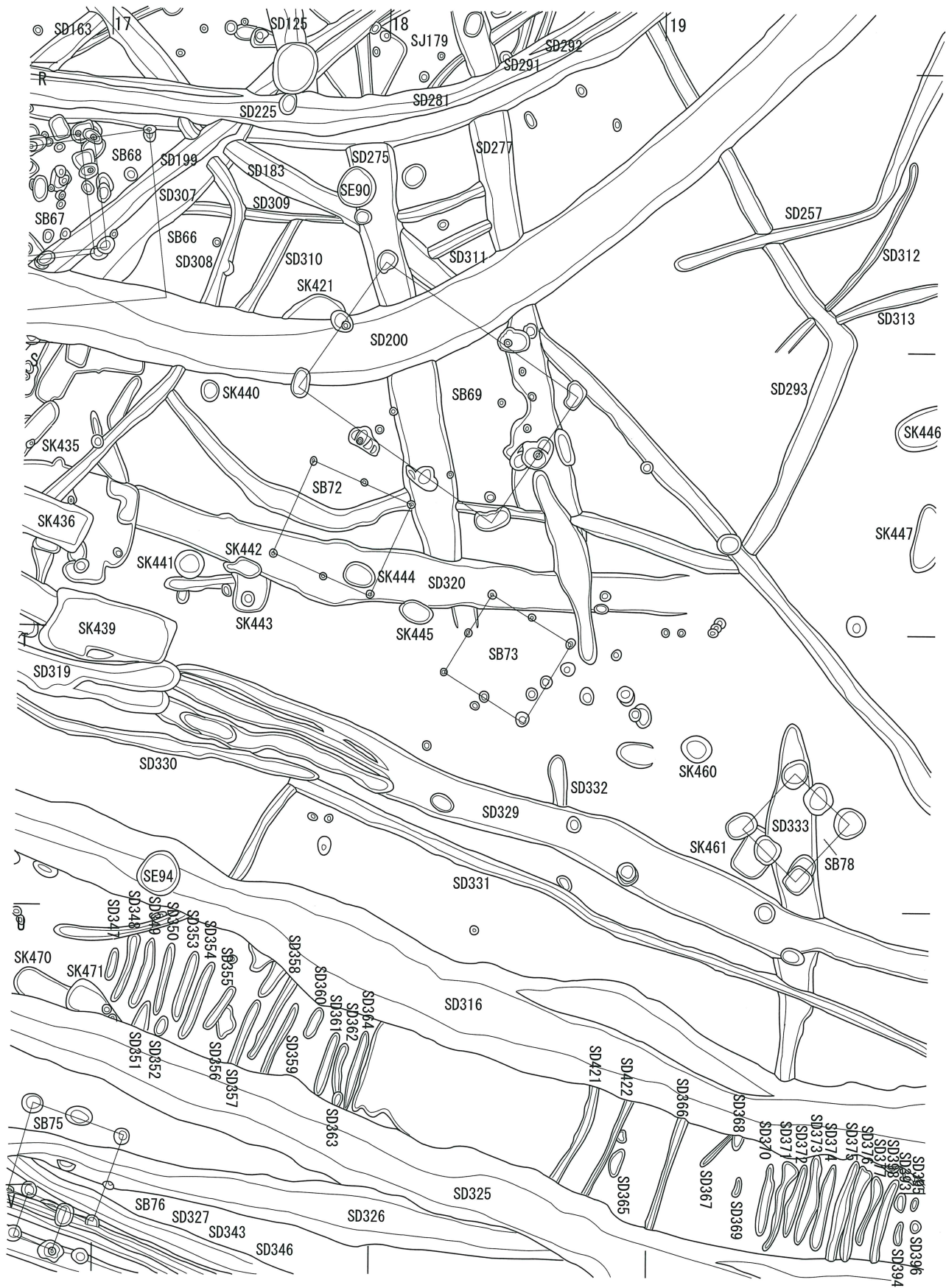
波板状の小溝は、第424~442号溝である。幅0.2~0.3m、長さ0.5~2.3mである。出土遺物は全く



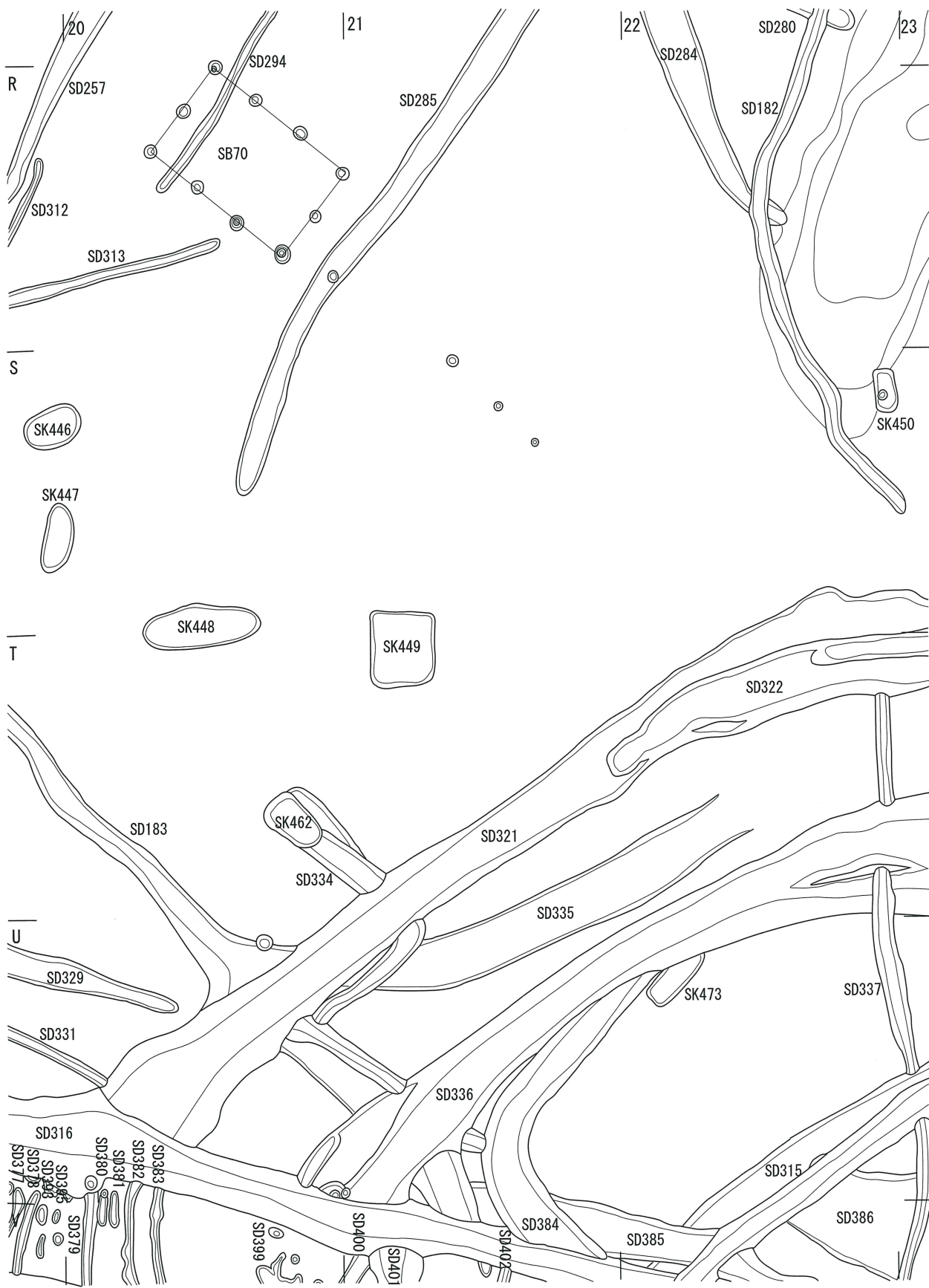
第6図 道路跡全体区割図



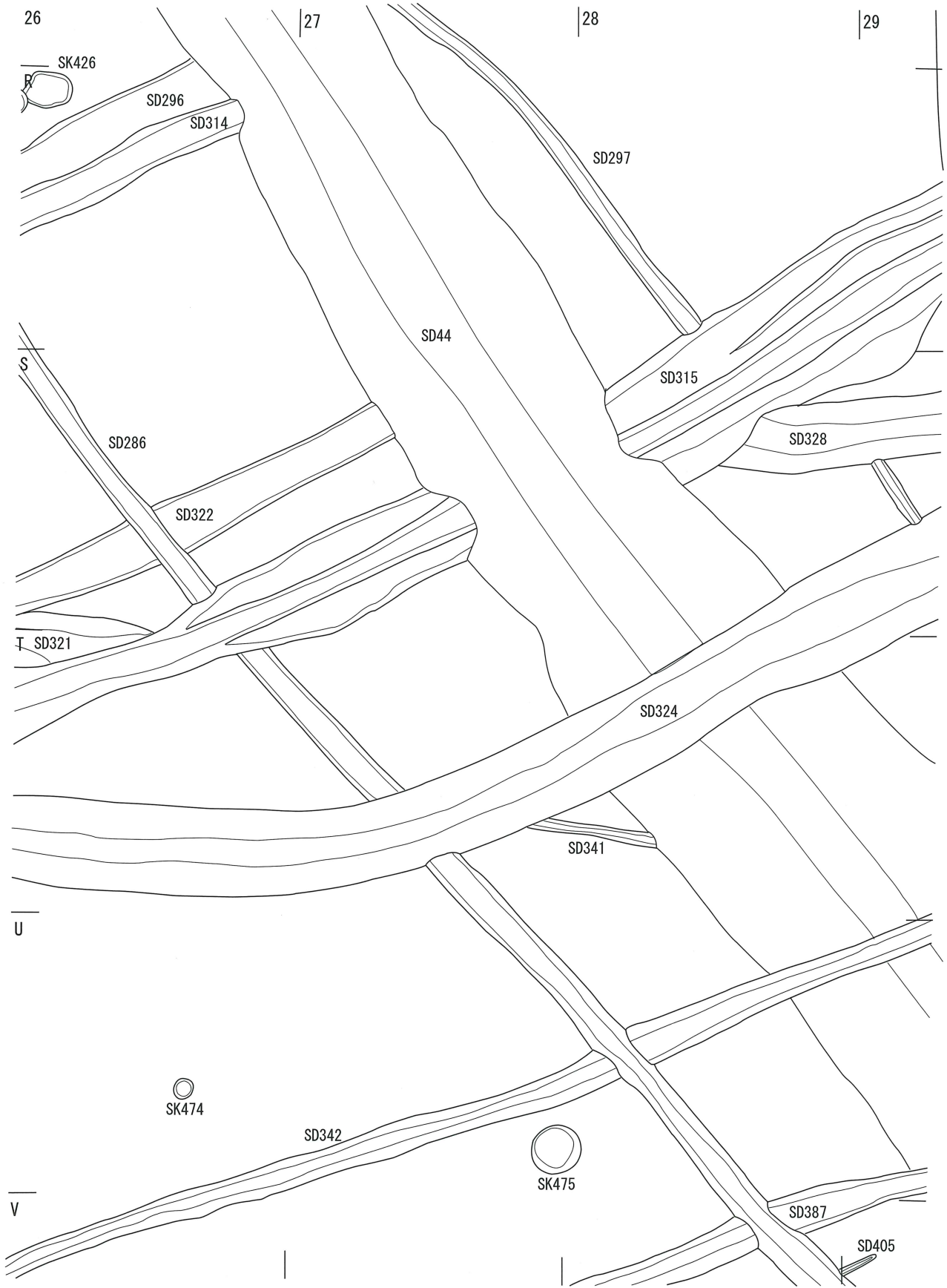
第7图 道路迹全体图(1)



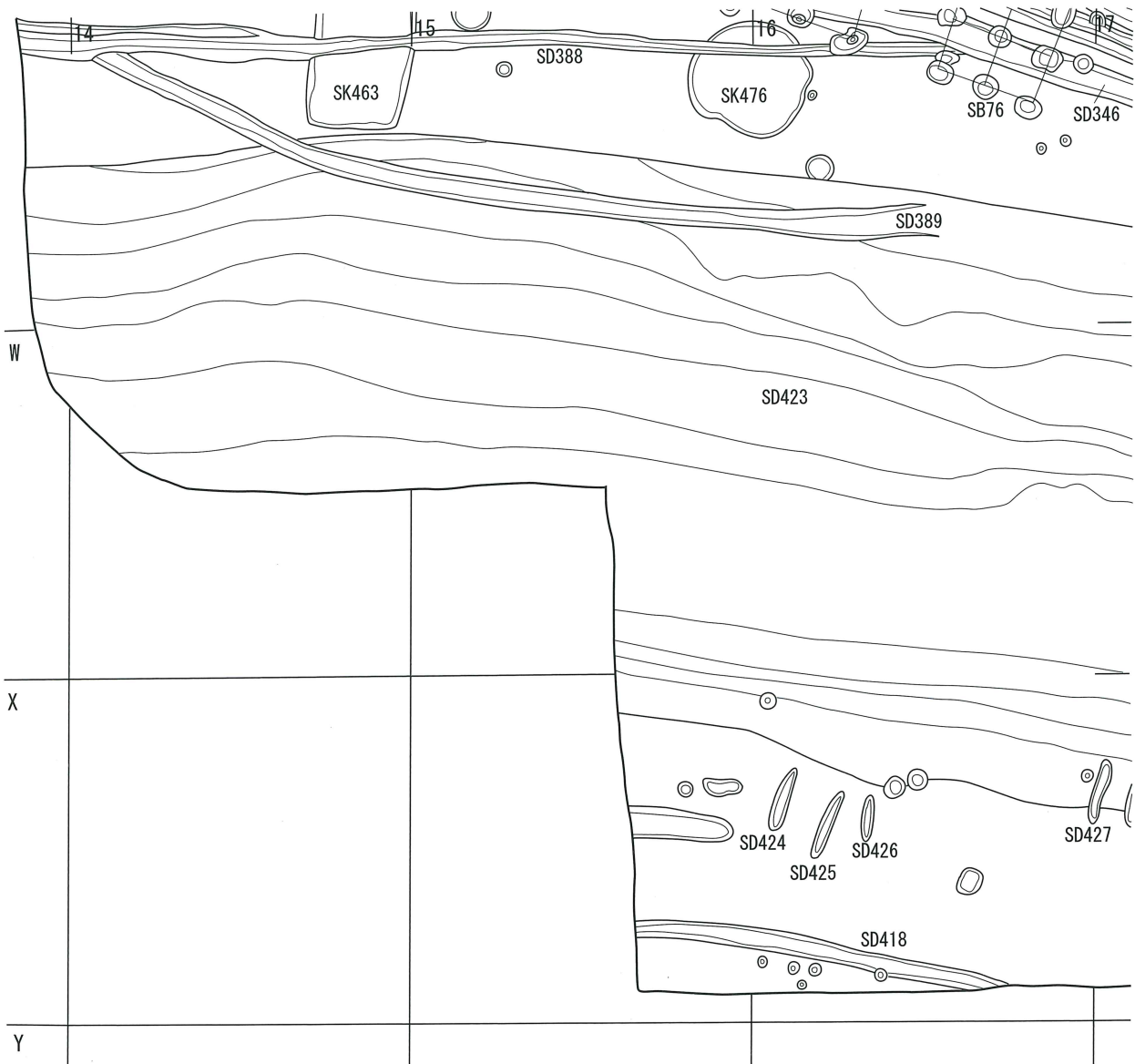
第8图 道路迹全体图(2)



第9图 道路迹全体图(3)



第10图 道路迹全体图(4)



第11図 道路跡全体図(5)

ない。土層断面の観察では明らかにできなかったが、古墳時代前期から古代の道路跡であろう。

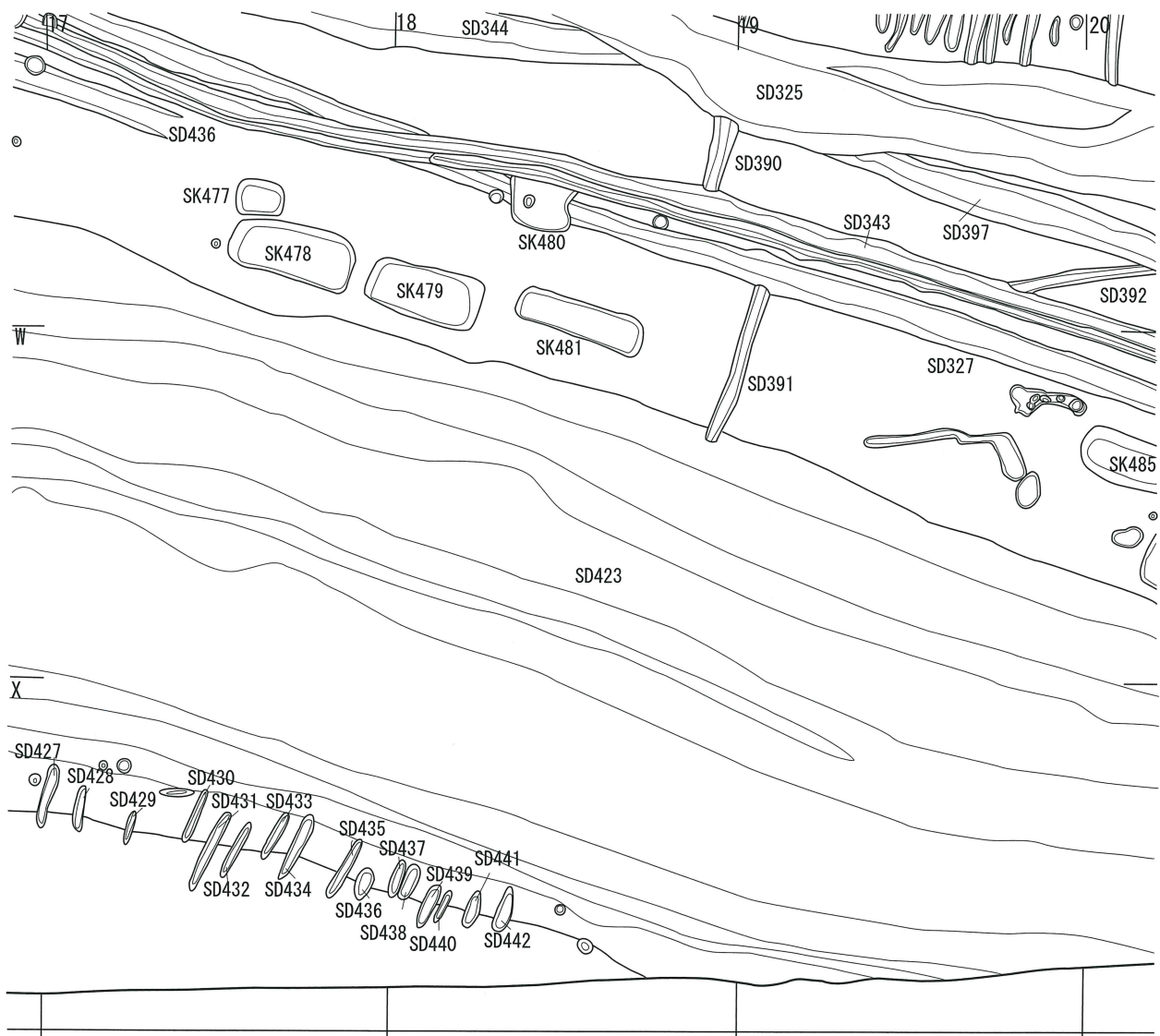
9. 河川跡

これまで北島遺跡では、古代の河川跡を第7地点で確認したが、第19地点でも二条の河川跡を確認できた。一条は、調査区の中央を北から南へ延びる河川跡であり、「中央河川跡」と呼称する。もう一条は、調査区の南端に確認した東西に延びる河川跡で「南河川跡」と呼称する。

中央河川跡

中央河川跡は、表土掘削の後、浅間山B軽石層の除去作業を行った。作業を行ったのは、第19地点の調査区北半を除いた長方形の部分である。天仁元(1108)年に降下したとされる浅間山B軽石層下には、第16図のような地形が現れた。網をかけた部分は、浅間山B軽石の堆積層を確認した範囲である。

中央河川跡の西側は、炭化物や焼土を含む黒色土層であり、この堆積層中には、大量の土器が含まれていた。またこの堆積層の下には、古代の夥しい遺構が存在した。第16図では、10cm刻みの等高線で



第12図 道路跡全体図(6)

地形を表現したが、調査区の北端中央部から南東隅に向かっては、緩やかな窪地が続いていた。

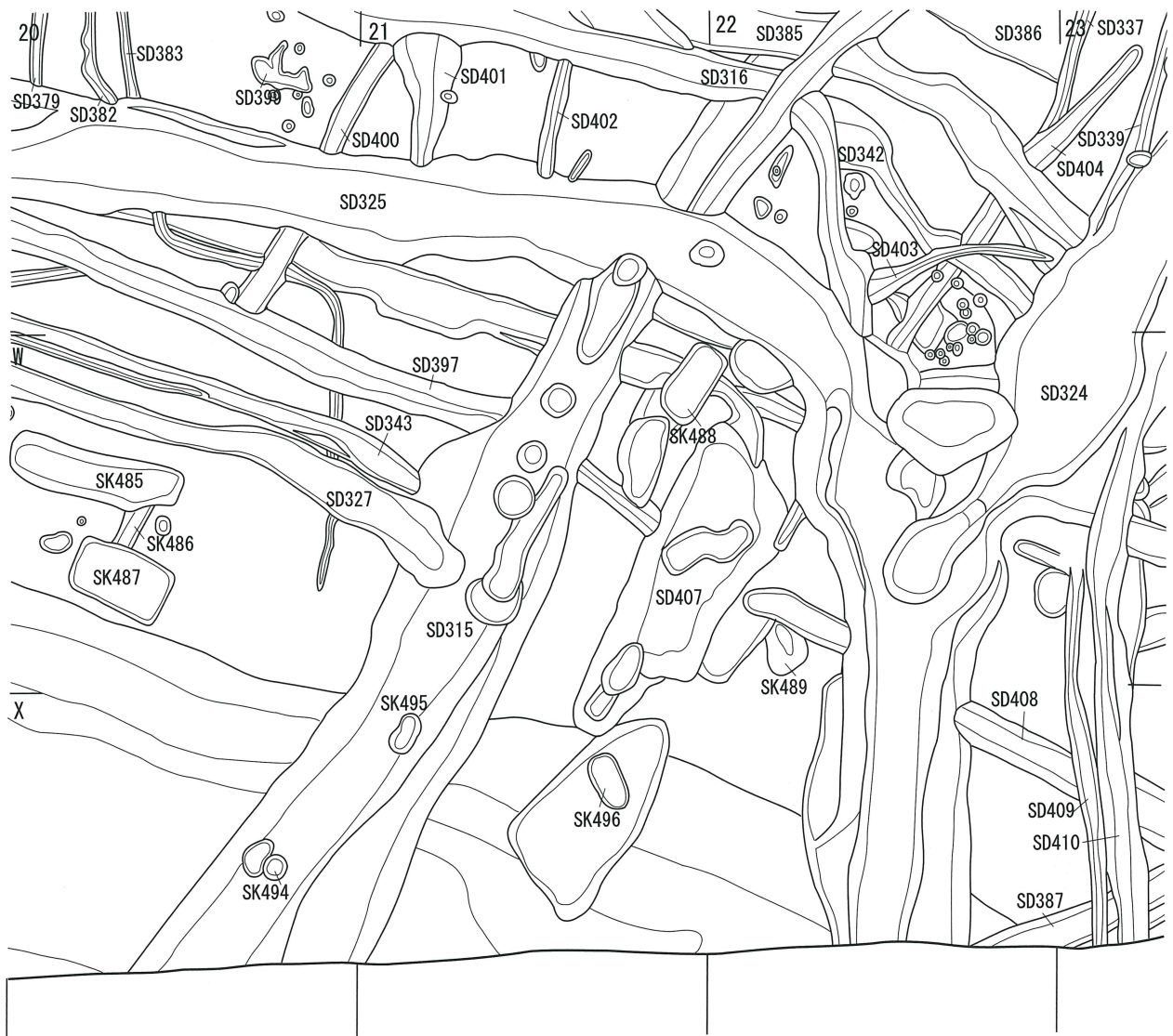
この窪地に向かい、平行または直行して灰白色の粘土を主体とした幅200mm前後、高さ20～50mmの高まりを確認することができた。

畦畔と考えたい遺構であるが、この遺構は、B 軽石の降下した範囲全体に広がることはなかった。この遺構は、窪地内に三箇所確認したに過ぎなかった。ここでは、浅間山 B 軽石の降下直前までに河川が埋没し、緩い傾斜の谷状地形に畦畔を作り、水田化したと考えておきたい。

ところで、この中央河川跡が水田化される以前は、

以下の通りである。まず弥生時代が開鑿された水路が、古墳時代後期初頭まで改修を繰り返し利用されていた。しかしその後、水路内に土砂の堆積が進み、6世紀第IV四半期以降、調査区の中央付近に土器集中出土地点が形成される。

また中央河川跡の南部には、樹枝状に伸びた二箇所窪地を見ることができる。この窪地の底から第18図20が出土しており、7世紀後半に樹枝状に開析されたと判断した。この窪地は、南から北に向かう窪地であることから、7世紀後半に南河川跡等の氾濫によって、北に向かって開析された痕跡と理解したい。



第13図 道路跡全体図（7）

この開析谷は、西側を「西支谷」、南側を「南支谷」と呼ぶ。西支谷の北から南斜面にかけては、拳大の石を集積した遺構が散在していた。中に緑釉陶器の稜塊や土師器の破片が見られた。これらが9世紀から10世紀にかけての遺物であることから、10世紀前半までは、開析谷として窪みが存在していたことが、明らかである。

また土器集中出土地点も6世紀第IV四半期から10世紀前半までの遺物を確認することができた。この段階に中央河川跡が、西支谷や南支谷から北へ向かう窪地として続いていたことが明らかである。

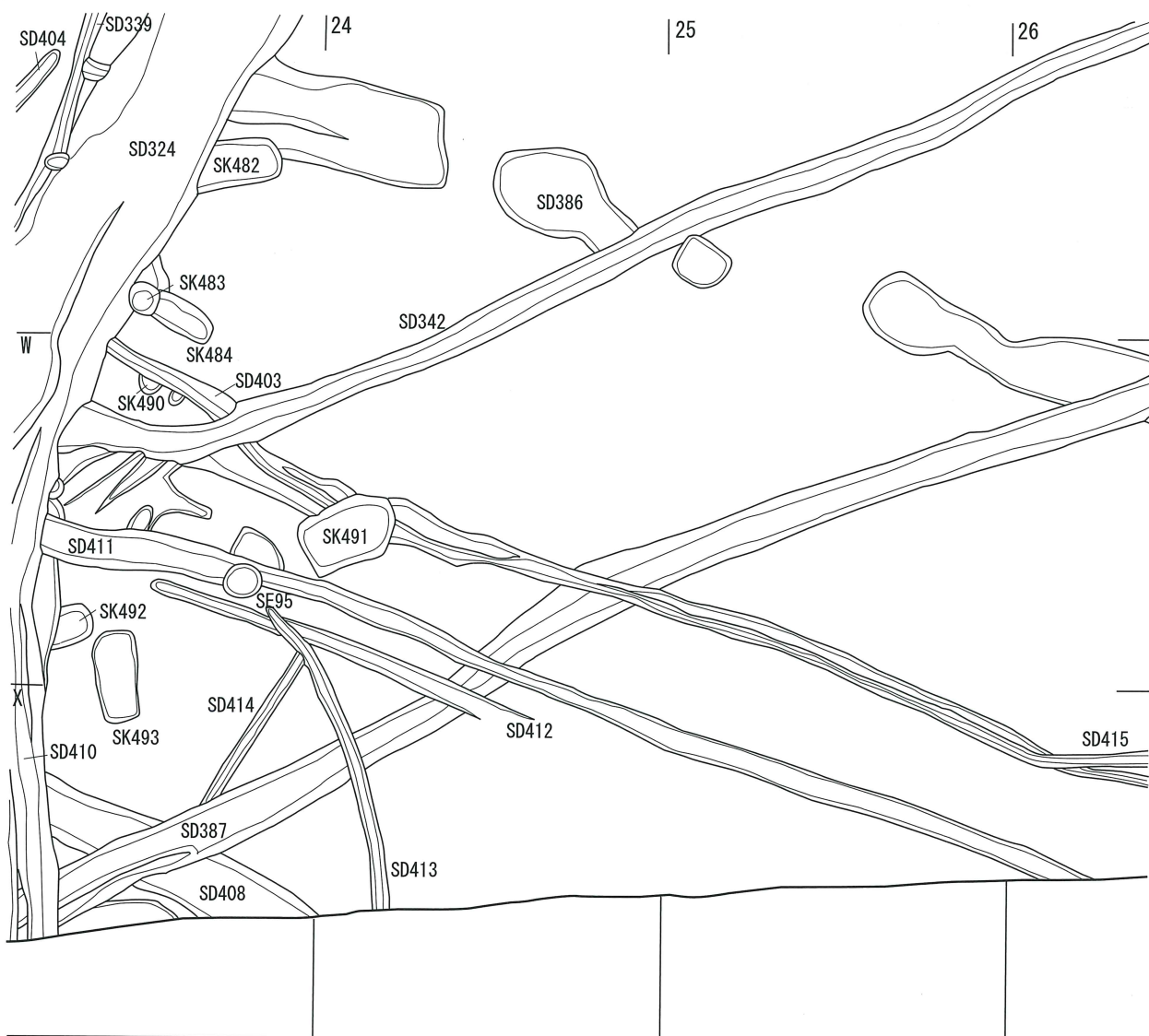
なお中央河川跡が、水路としての機能を終息する

古墳時代後期初頭前後には、東台地で古墳群の形成が始まり、土器集中出土地点の形成とともに古墳群の形成は、終焉を迎えるようである。

そして浅間山B軽石降下直前になると、埋没した河川跡は、土器集中出土地点のやや北側付近を最高点として、北側と南側へ緩やかな傾斜をもつ地形となり、水田化していったのである。

その後、中央河川跡は、浅間山B軽石の降下以降も南北に続く窪地として存在し、第55号溝が近世に掘削されるまでには、完全に埋没したと考えたい。

また浅間山B軽石降下以降、完全埋没までの間には、第17図に○で示した位置に木杭が打たれてい



第14図 道路跡全体図(8)

た。杭は、深さ0.3~0.5m打ち込まれていたが、上部は、朽ちて確認することはできなかった。18本の杭を確認した。時期は限定できないが、中世から近世初頭と考えておきたい。この杭は、西側台地と東側台地を結ぶ橋の橋脚か、河川内に仕掛けられた網を繋ぐ杭であったかもしれない。

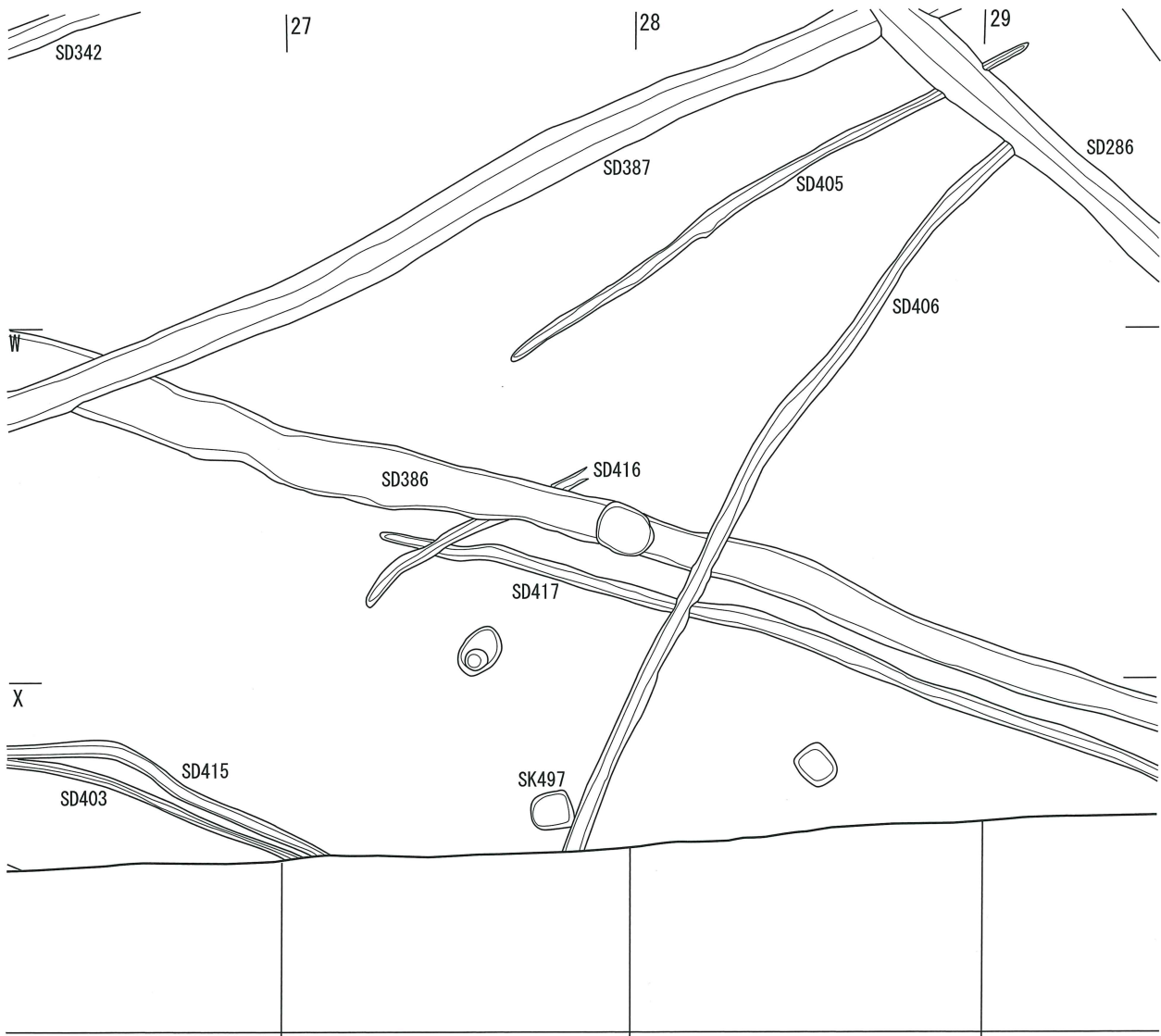
中央河川跡から出土した遺物は、土器集中区や集石遺構を除くと、以下に述べる遺物である。

第18図1~25は、土師器の坏である。1~4は、埴形の坏である。5~9は、坏蓋模倣坏である。11は、比企型坏である。12~15は、坏身模倣坏である。16~23は、有段口縁坏である。24・25は、内弯口縁

坏である。

1~3は、屈曲の見られない土師器の坏で、1の底部は平底、2・3は、丸底である。1は、底部の最下部をヘラケズリしており、ユビオサエの跡が二段にわたって残る。2・3は、口縁部近くまでをヘラケズリしている。3は、内外面赤彩を施しているが、内面中央部の赤彩を欠いている。

4は、埴形の器形となる坏である。口縁部と底部の境に浅い沈線状の窪みがあり、坏蓋模倣坏状となる。底部を欠損するが、丸底となっていたのであろう。1~4は、5世紀後半の土器である。2は、ローム台地の粘土を原土として用いており、他は、利



第15図 道路跡全体図(9)

根川水系の粘土を原土として用いている。

5・7・8は、口縁部が長く直立する坏蓋模倣坏である。口唇端部は、水平または外反する器形であり、比較的器高が高い。7は、内外面に黒色処理を施している。利根川水系の粘土を原土として用いている。

6は、須恵器の坏蓋である。天井部は細かく手持ちヘラ削りされており、口縁部は直立する。産地不詳。5～8は、5世紀末～6世紀前半の土器である。

9は、口縁部が短く外反するが、器高が比較的深い器形の土器である。利根川水系の原土が用いられている。6世紀前半。

11は、内外面を赤彩した比企型坏である。外面は、残存部まで赤彩が行われている。口縁部が小さく外反する。7世紀前半の土器である。比企・入間の粘土が用いられている。

12～15は、坏身模倣坏である。12は、直立する口縁で口縁部と底部の境は明瞭である。5世紀末～6世紀初頭の土器である。13は、口縁部と体部の境がやや不明瞭であるが、器高の深い土器である。底部は細かく削られる。6世紀前半の土器である。12・13は、ローム台地の粘土を原土としている。

14は、内側に強く屈曲する坏身模倣坏であり、底部に細かくヘラケズリを行う。15も同様な坏身模倣



第16図 浅間山B 軽石層堆積範囲と除去後の地形

坏だが、口縁部が内傾しつつ立ち上がる。利根川水系の原土が用いられている。

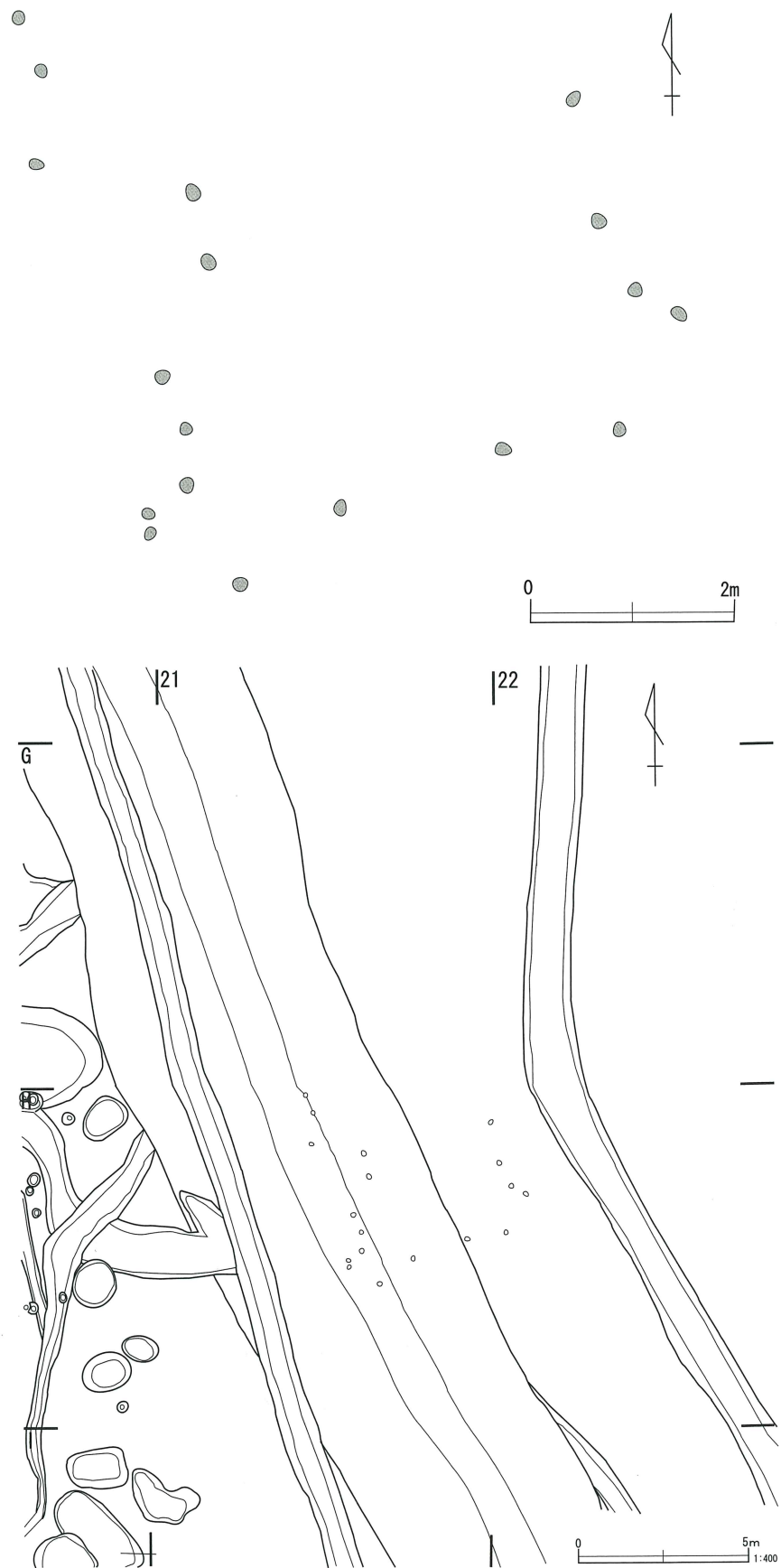
10・16～21は、口縁部が、外反しつつ立ち上がる有段口縁坏B類である。22・23は、小さな底部から大きく外反する有段口縁坏C類である。10・19・20・23には、黒色処理は見られないが、他は黒色処理が施されている。18・21は、口縁部を三段に作る。全て利根川水系の粘土を原土としている。

24・25は、器壁の薄い内弯口縁の坏である。24は利根川水系、25はローム台地の粘土を原土としている。

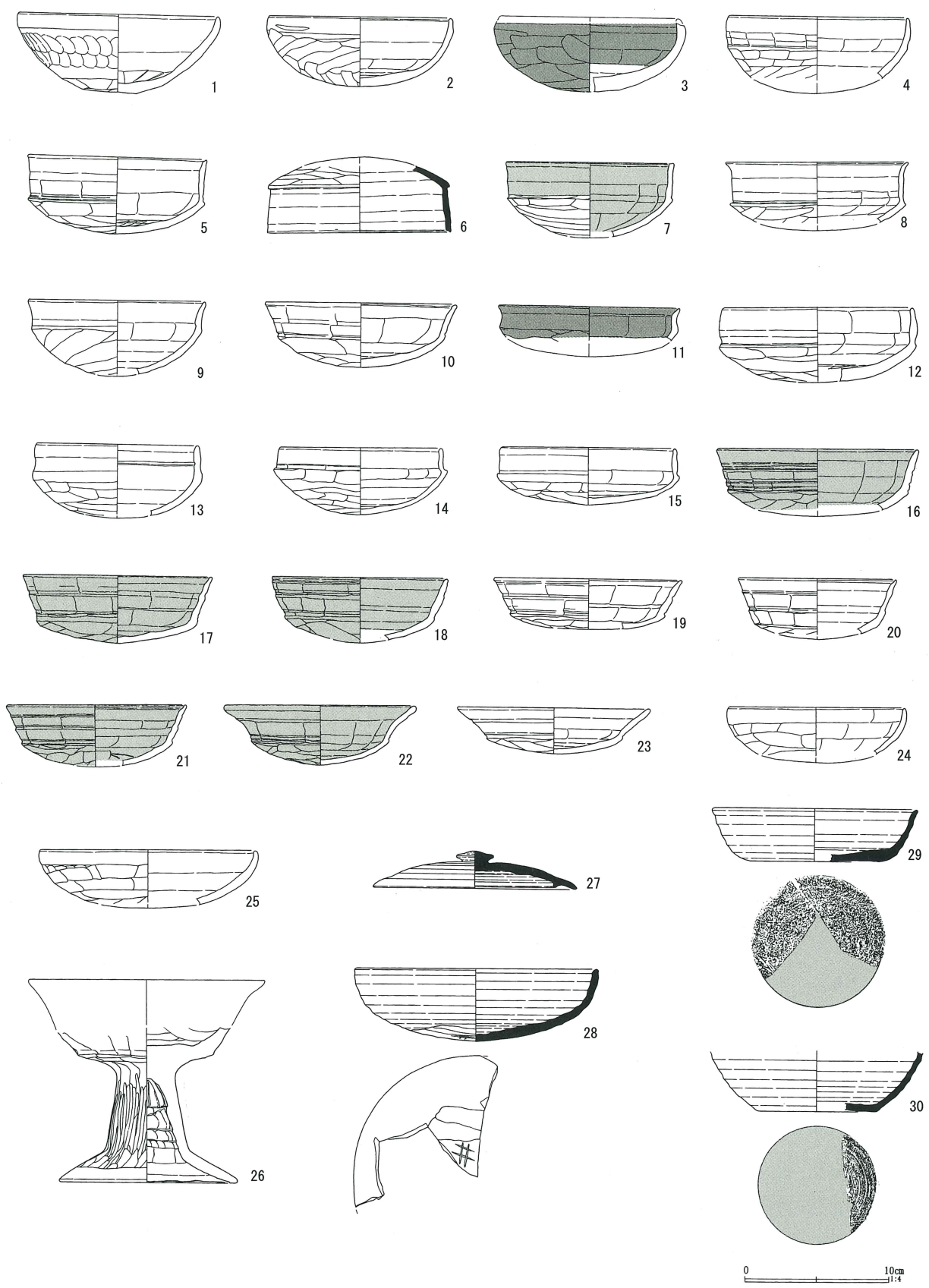
26は、土師器の高坏である。口縁部を欠損する高坏である。脚部の外面には、刻み状のヘラケズリが、連続して刻まれている。5世紀後半の土器である。利根川水系の原土が用いられている。

第18図27～第19図18は、須恵器の食器である。27は、須恵器の蓋である。カエリの付いた蓋で、カエリは口縁部よりも出ない。ボタン状のつまみが見られる。天井部には、ボタン状のつまみが付く。末野窯跡群の製品である。

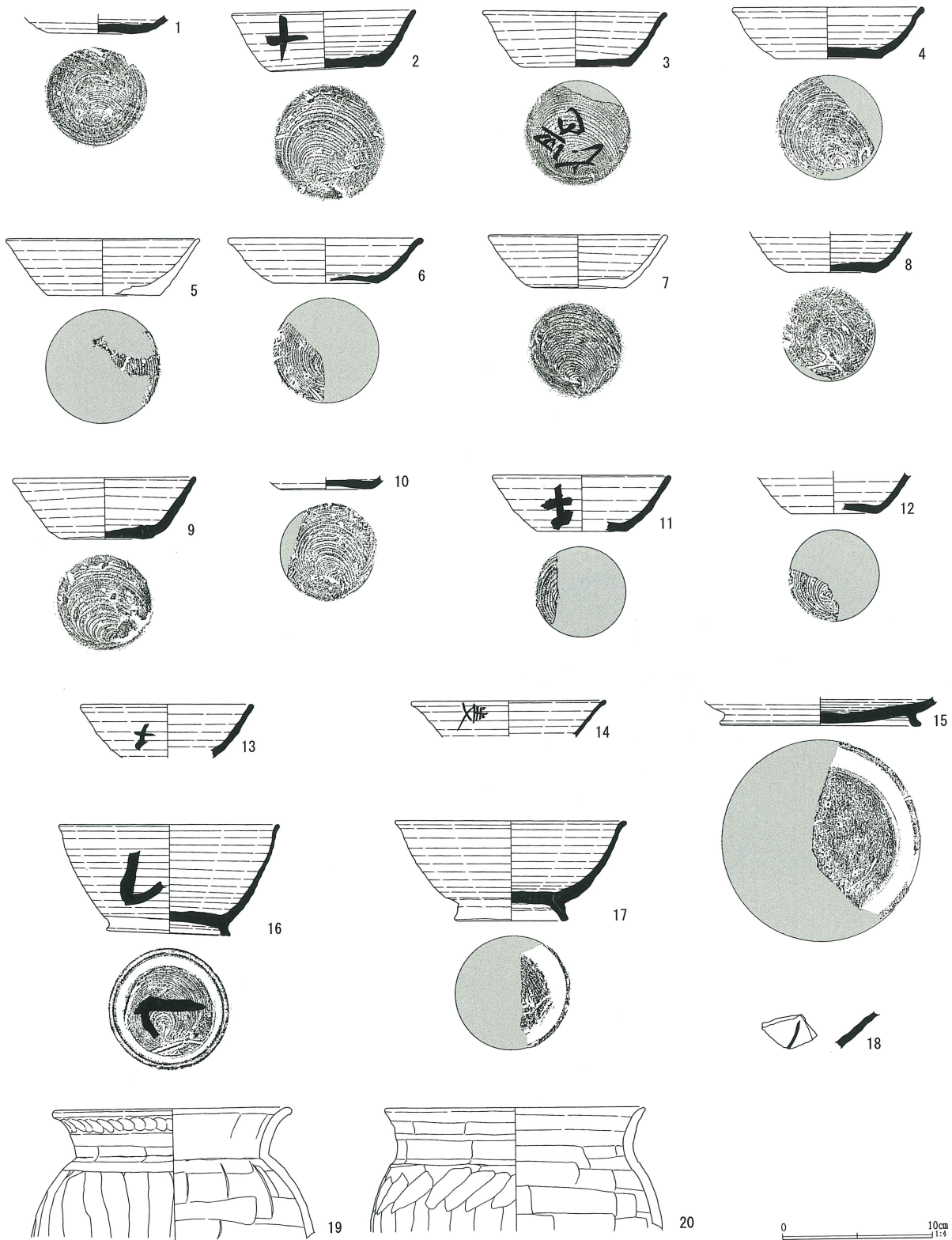
28は、丸底の大形の坏である。27よりも大形の蓋が伴うのであろう。底部中央に「井(いげた)」の窠書が残る。底



第17図 河川跡出土の杭



第18图 河川跡出土土器(1)

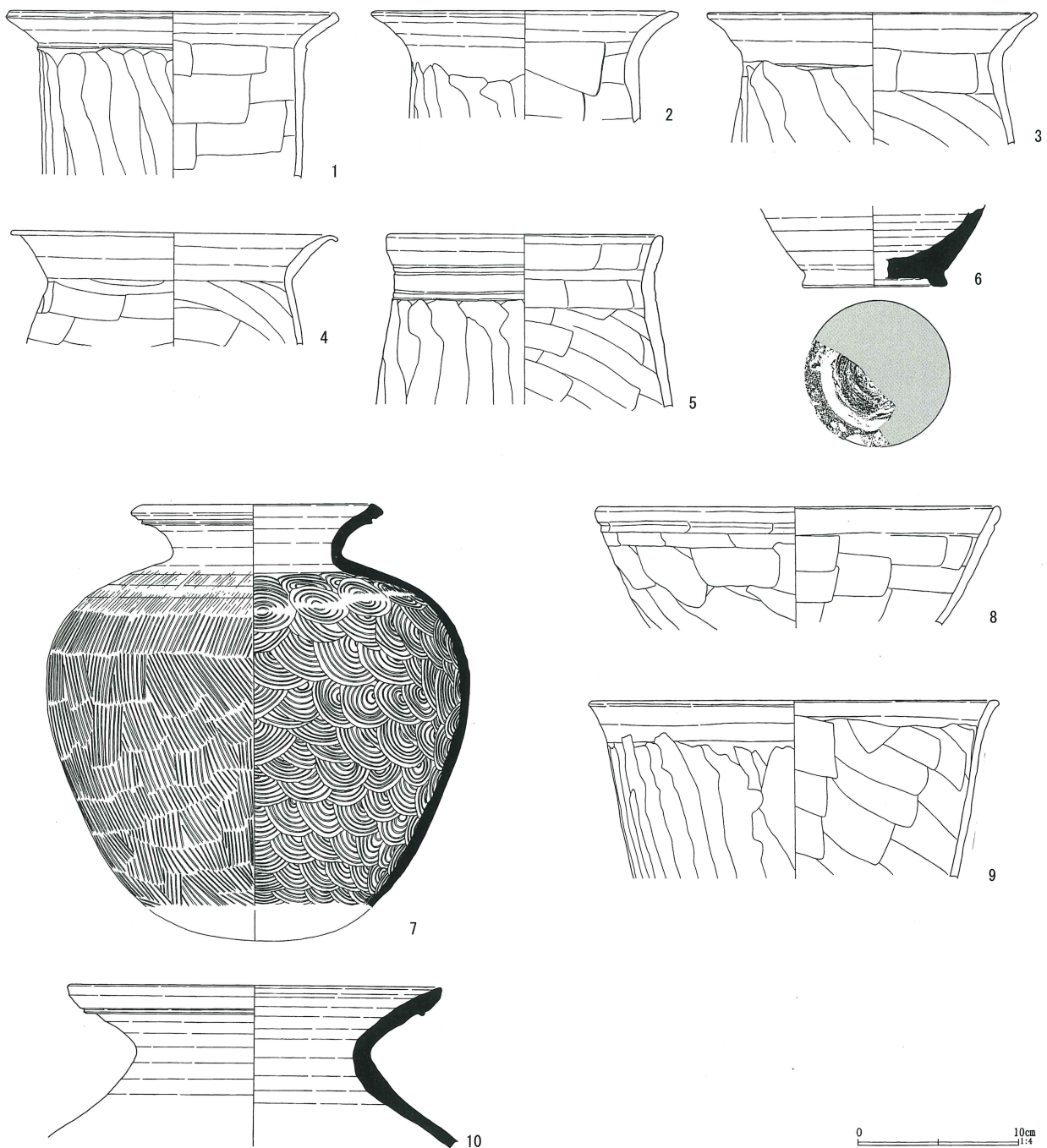


第19図 河川跡出土土器（2）

部外面は、手持ちのヘラケズリが施されている。末野窯跡群の製品である。

29～第19図14は、坏である。29は、底部を回転へ

ラケズリとしている。器高は低い。30は、壘形となるかもしれない。第19図1は、底部周辺を回転ヘラケズリした坏である。2～12は、底部糸切り未調整



第20図 河川跡出土土器（3）

の土器である。5・7は、酸化炎焼成であるが、他は還元炎焼成である。29・2・5～9は、末野窯跡群の製品である。他は南比企窯跡群の製品である。

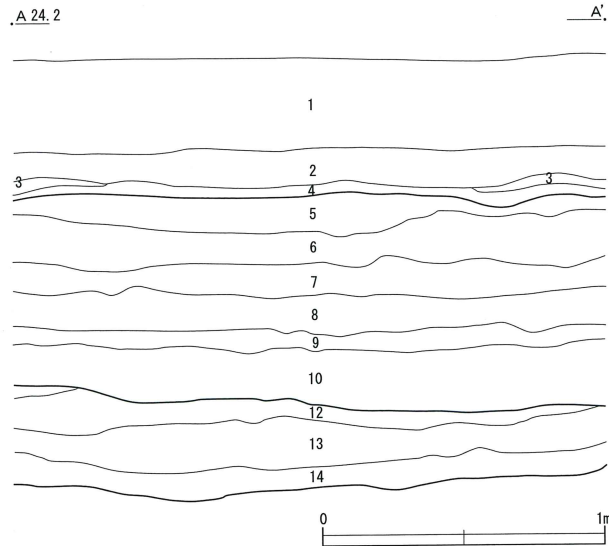
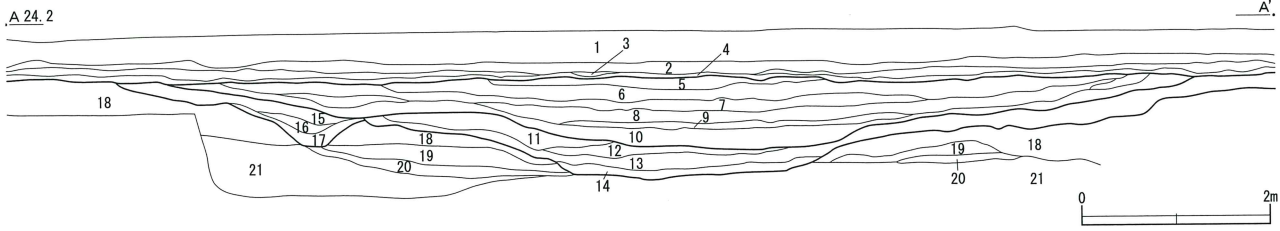
4には、底部外面に「卍（三十）」のヘラ書きがある。11・13の外面には、「千」、14の外面には、「美」の墨書が見られる。

15は、高台付盤である。底部はヘラケズリが施さ

れ、出尻気味に作られる。低い台形状の高台が巡る。末野窯跡群の製品である。

16・17は、高台付碗である。16の高台は、広く「M」字状となる。底部は上げ底となる。17は、高台が「ハ」の字状に外へ強く踏ん張る。末野窯跡群の製品である。

18は、皿の破片である。一部に墨書が見られるが、



- 南河川跡**
- 1 褐灰色土 上部に浅間山A軽石を含む
 - 2 黒褐色土 浅間山B軽石を全体に含む 上部に褐灰色土ブロックを含む
 - 3 褐灰色土 粘土のマンガン粒を多く含む
 - 4 褐灰色土 粘土の赤褐色の鉄分を斑ら状に含む
- 古代**
- 5 褐灰色土 赤褐色の管状斑紋を含む
 - 6 黒褐色土 火山灰のブロックを含む
 - 7 褐灰色土 下層の灰白色土を含む
 - 8 黒色土 灰白色による縞状の堆積層
 - 9 褐灰色土 白色のブロックを含む 有機物
 - 10 褐灰色土 灰色・黒色の縞状の層を含む
- 古墳前期**
- 11 褐灰色土 黒色の縞状の土・砂を多く含む
 - 12 褐灰色土 縞状の土は少なく均等 全体に砂・有機物を含む 色調で分層
 - 13 褐灰色土 縞状の土は少なく均等 全体に砂・有機物を含む 色調で分層
 - 14 褐灰色土 縞状の土は少なく均等 全体に砂・有機物を含む 色調で分層
 - 18 褐灰色土 粘土の砂を少量含む
 - 19 灰色土 砂層
 - 20 灰色土 砂層
 - 21 褐灰色土 砂を18よりやや多く含む
- 古墳時代前期溝跡**
- 15 黒灰色土 黄灰色粘土多い
 - 16 黒灰色土 黄灰色粘土少ない シルト質層 有機質多い
 - 17 黒灰色土 黄灰色粘土を点々と含む 砂質 (1~2cm)

第21図 河川跡土層断面

判読できない。南比企窯跡群の製品である。

第19図19～第20図5は、土師器の甕である。19は、口縁部が強く屈曲する長胴甕である。20は、肩部に斜めのヘラケズリが施されている。第20図1・2は、胴部が縦にまっすぐ伸びる甕である。3・4は、肩部のやや張る甕で、口縁部が直線的に伸びる。5は、口縁部が厚く二段となり、胴部は下膨れとなる。全て利根川水系の原土が用いられている。

第20図6は、長胴甕の底部から胴部の破片である。高台は台形状となり、器肉は厚い。東金子窯跡群の製品である。

第20図7・10は、須恵器の壺である。7の胴部内面には、当て具痕跡が明瞭に残り、青海波文となっている。また外面にも平行叩きの痕跡がよく残る。湖西窯跡群の製品である。10は、下膨れとなる壺である。残存部はロクロ目が明瞭である。南比企窯跡

群の製品である。

第20図8・9は、土師器の甑である。8は、鉢形となる甑である。口縁部外面は、沈線状に窪む。9は、バケツ形となる大形の甑である。ともに利根川水系の原土が用いられている。

南河川跡

南河川跡は、調査区の南西隅に確認した。西から東へ向かって流れる河川の跡である。この河川跡は、発掘調査の開始直後に掘削した地点で確認した。それは、調査区の周囲に幅10mの巨大な排水溝をまず巡らしたことで明らかになった。河川跡の上部には、中近世の堆積層が厚く形成され、その最下部に浅間山B軽石層が、20～50mmほど堆積していた。

そこでまず、浅間山B軽石層までの堆積層を除去した。ここで現れたのが、鉄分やマンガンを含ん

第2表 河川跡出土土器(1)

挿図番号	図の番号	出土位置	種別	器種	口径	底径	器高	残存率	色調	産地	備考
第18図	1	中央河川跡 M23列	土師器	坏	138	36	54	40	橙	利根川	
第18図	2	中央河川跡 M23列	土師器	坏	128	130	48	75	浅黄	利根川	
第18図	3	中央河川跡 M23列	土師器	坏	124	—	—	40	赤	利根川	赤彩
第18図	4	大溝内の堰 G21	土師器	坏	128	—	—	10	浅黄	利根川	
第18図	5	中央河川跡 M23列	土師器	坏蓋模倣坏	124	123	53	80	橙	利根川	
第18図	6	中央河川跡	須恵器	坏蓋	127	126	—	15	緑灰	利根川	
第18図	7	中央河川跡	土師器	坏蓋模倣坏	116	115	—	40	赤橙	利根川	黒色処理
第18図	8	中央河川跡	土師器	坏蓋模倣坏	137	122	—	35	橙	利根川	
第18図	9	中央河川跡 M23列	土師器	坏蓋模倣坏	122	118	—	40	にぶい橙	利根川	
第18図	10	中央河川跡	土師器	有段口縁坏	131	111	44	95	橙	利根川	
第18図	11	中央河川跡 C19	土師器	比企型坏	125	124	—	10	赤	比企入間	赤彩
第18図	12	中央河川跡 M23列	土師器	坏身模倣坏	130	131	—	40	淡橙	ローム土	
第18図	13	大溝内の堰 G21	土師器	坏身模倣坏	110	118	—	30	にぶい黄橙	ローム土	
第18図	14	中央河川跡	土師器	坏身模倣坏	112	121	41	100	橙	利根川	内面漆付着
第18図	15	中央河川跡	土師器	坏身模倣坏	120	121	40	75	浅黄	利根川	
第18図	16	中央河川跡 D19・20	土師器	有段口縁坏	138	126	—	10	灰褐	利根川	
第18図	17	中央河川跡	土師器	有段口縁坏	130	110	47	40	黒褐	利根川	
第18図	18	中央河川跡 C19	土師器	有段口縁坏	120	104	—	40	褐灰	利根川	
第18図	19	中央河川跡 D19・20	土師器	有段口縁坏	130	90	—	20	明墓褐	利根川	
第18図	20	中央河川跡	土師器	有段口縁坏	108	95	—	15	にぶい橙	利根川	
第18図	21	中央河川跡	土師器	有段口縁坏	124	105	—	25	褐	利根川	
第18図	22	中央河川跡	土師器	有段口縁坏	130	95	41	20	にぶい褐	利根川	
第18図	23	中央河川跡 C18	土師器	有段口縁坏	134	94	31	50	橙	利根川	
第18図	24	中央河川跡	土師器	内弯口縁坏	122	—	—	15	橙	利根川	
第18図	25	中央河川跡 C18・19	土師器	内弯口縁坏	150	—	—	30	にぶい橙	利根川	
第18図	26	中央河川跡 D19	土師器	高坏	—	123	—	60	にぶい黄橙	利根川	
第18図	27	中央河川跡 C19	須恵器	蓋	142	—	26	20	明オリブ灰	末野	
第18図	28	中央河川跡 C19	須恵器	坏	166	—	50	25	灰	末野	刻書「井」
第18図	29	中央河川跡 C19	須恵器	坏	140	90	37	50	灰	末野	
第18図	30	中央河川跡 C19	須恵器	埴	—	82	—	30	灰	南比企	
第19図	1	中央河川跡 D19	須恵器	坏	—	67	—	30	暗青灰	南比企	底部周辺ヘラ
第19図	2	中央河川跡 D19	須恵器	坏	121	75	48	90	灰オリブ	末野	墨書「+」
第19図	3	中央河川跡 C19	須恵器	坏	122	72	47	75	暗オリブ	南比企	墨書「綱」
第19図	4	中央河川跡 C19	須恵器	坏	126	70	34	20	緑灰	南比企	糸切のみ ヘラ書き
第19図	5	中央河川跡 D19	須恵器	坏	128	76	38	80	灰黄	末野	酸化炎
第19図	6	中央河川跡 C19	須恵器	坏	130	70	30	25	緑灰	末野	糸切のみ
第19図	7	中央河川跡 D19	須恵器	坏	118	62	35	100	淡黄	末野	糸切のみ
第19図	8	中央河川跡	須恵器	坏	—	60	—	40	灰白	末野	
第19図	9	中央河川跡 D19	須恵器	坏	120	62	41	100	灰	末野	
第19図	10	中央河川跡	須恵器	坏	—	64	—	15	オリブ黒	南比企	
第19図	11	中央河川跡 C19	須恵器	坏	116	60	37	10	灰	南比企	墨書「千」
第19図	12	中央河川跡	須恵器	坏	—	60	—	10	灰	南比企	
第19図	13	中央河川跡 C19	須恵器	坏	114	—	—	5	灰	南比企	墨書「千」
第19図	14	中央河川跡 C19	須恵器	坏	130	—	—	5	灰	末野	墨書「美」
第19図	15	中央河川跡 C19	須恵器	高台付盤	—	134	—	20	灰白	末野	
第19図	16	中央河川跡 D19	須恵器	高台付埴	146	83	71	70	オリブ黒	末野	墨書「レ」
第19図	17	中央河川跡 C19	須恵器	高台付埴	154	76	66	30	暗青灰	末野	
第19図	18	中央河川跡 C19	須恵器	皿	—	—	—	5	灰	南比企	墨書「□」

第3表 河川跡出土土器（2）

挿図番号	図の番号	出土位置	種別	器種	口径	底径	器高	残存率	色調	産地	備考
第19図	19	中央河川跡 C19	土師器	甕	156	—	—	10	にぶい黄	利根川	
第19図	20	中央河川跡 C19	土師器	甕	171	—	—	10	オリーブ黄	利根川	
第20図	1	中央河川跡 C18	土師器	甕	202	—	—	25	灰黄	利根川	
第20図	2	中央河川跡 G12	土師器	甕	184	—	—	10	明黄褐	利根川	
第20図	3	中央河川跡 C18	土師器	甕	202	—	—	10	淡黄	利根川	
第20図	4	中央河川跡 G12	土師器	甕	197	—	—	5	にぶい黄橙	利根川	
第20図	5	中央河川跡 C19	土師器	甕	168	—	—	15	灰黄	利根川	
第20図	6	中央河川跡 C19	須恵器	瓶	—	90	—	10	明オリーブ灰	東金子	
第20図	7	中央河川跡 C19	須恵器	壺	142	—	—	20	青灰	湖西	
第20図	8	中央河川跡 C19	土師器	甗	248	—	—	10	浅黄	利根川	
第20図	9	中央河川跡 C19	土師器	甗	252	—	—	15	浅黄	利根川	
第20図	10	中央河川跡 C19	須恵器	壺	232	—	—	10	暗青灰	南比企	

だ黒色粘土の層の上面であった。土層断面(第21図)の観察によって、この面を平安時代末期の水田耕作面と考えた。しかし明確な畦畔や水路等は、確認できず、水田として確実に機能していたと断定できなかった。

なお、浅間山B軽石層は、ほぼ水平に堆積し、天仁元(1108)年までにこの南河川跡は、完全に埋没してしまったようである。詳細は、古墳時代前期編・弥生時代編に譲るが、古墳時代前期には、南河川跡の南辺に隣接し、河川跡と平行しながら古墳時代前期の溝が、掘削された。

この溝は、南河川跡から取水した用水路跡と考えることができるが、この溝の埋没後、緩い河川跡となり、幅16.6m、深さ1.2mの規模となった。

古墳時代前期から平安時代にかけては、急速な堆積は進まなかったらしく、粘土層が均一に堆積する

状態を確認することができた(第21図)。また前述のように河川跡の北側に近接して、東西に伸びる道路跡を確認したが、古墳時代後期から平安時代末期にかけての遺物が、南河川跡から出土することは全くなかった。

このことは河川跡が、淀んだ状態や三日月湖になっていたのではなく、流水が絶えずあったためと判断した。

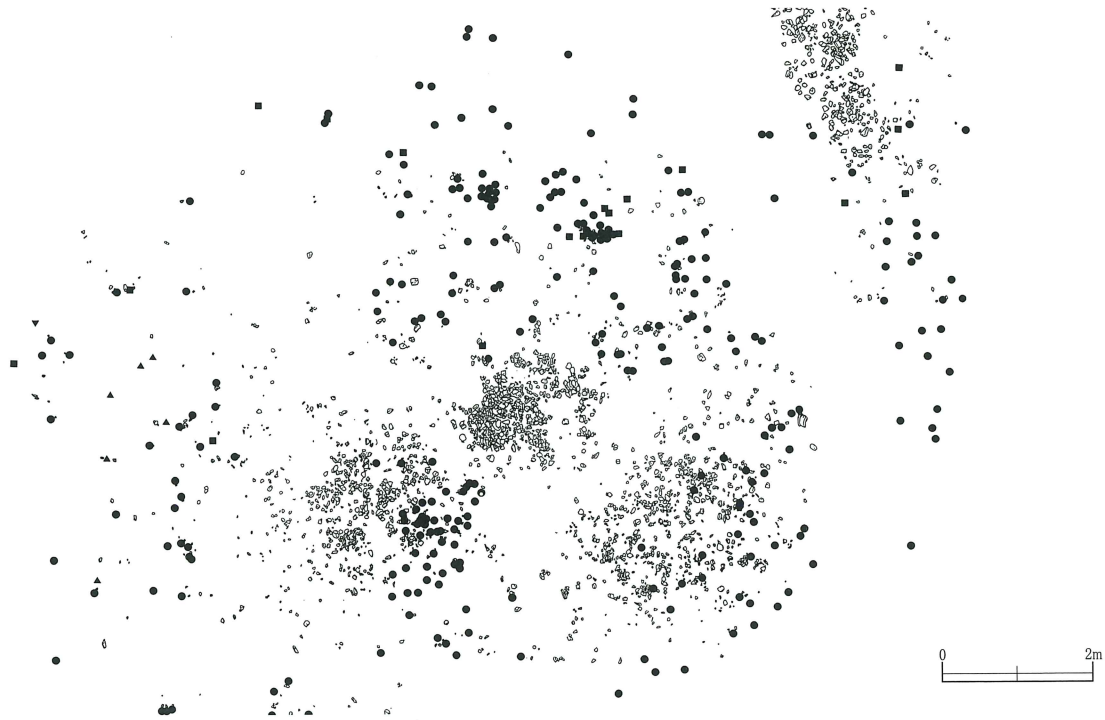
第21図は、南河川跡の土層断面図を示した。ここでは、古墳時代前期の堆積以降について、土層説明を行っている。なお発掘調査前の現地表は、1層上面よりさらに1m上である。また古墳時代前期以前、弥生時代相当の堆積層については、完掘できなかった。

古代の堆積層中から出土遺物はない。

10. 集石遺構



第22図 集石遺構全体図



第23図 集石遺構詳細(1)

調査区の中央やや南よりに、拳大の河原石(転石・壊石)を径1m、高さ0.1mほどに積み上げた遺構を六箇所確認した。集石遺構と呼称したこの遺構は、中央河川跡から南に延びる「南支谷」の平坦部、及び斜面に沿って形成された遺構である。

集石遺構の中には、土器片・獣骨が混じって集積されていた。土器片は、土師器・須恵器の食器・煮沸具を問わず、小片となった破片が混入した状態であった。獣骨は、牛及び馬の歯を確認できた。第22～24図の●は土器片、○は獣骨である。なお、石材や土器片・骨片に被熱痕跡はない。

第1号集石遺構

最も東より、南支谷の落ち際に形成された集石遺構である。西側を第55号溝に破壊される。径2.2mの範囲に石材が広がる。

第2～4号集石遺構

中央に形成された三箇所の集石遺構である。第2号集石遺構は、最も石材の集石密度が高く、第3・4号集石遺構は、やや集石密度が低い。

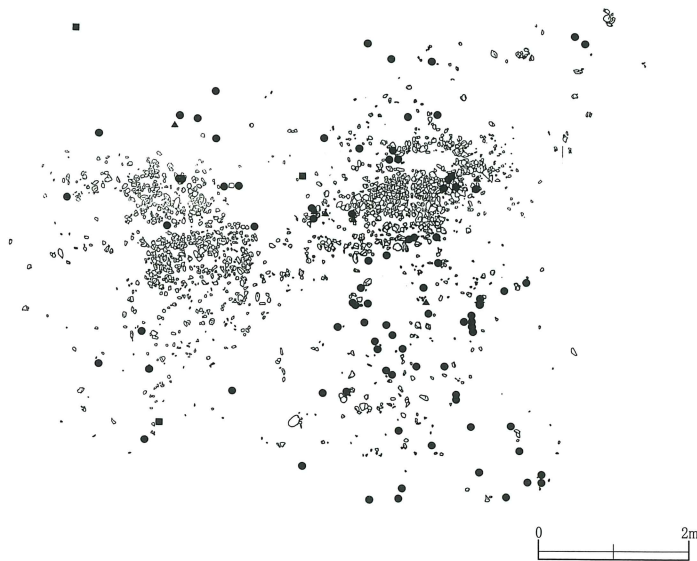
第1号集石遺構と第2～4号集石遺構の間には、近世の第55号溝が、集石遺構を破壊して通っているので、両者が分断されたように見えるが、実際は、一連の集石遺構と考えて間違いはない。第2号集石遺構は、径1.6m、第3号集石遺構は、径2.0m、第4号集石遺構は、径1.8mである。

第5・6号集石遺構

最南部に確認した集石遺構である。東西に並び密集度は、第2号集石遺構と同様に高い。第5号集石遺構は、径2.4m、第6号集石遺構は、径2.1mである。

第2～4号集石遺構と第5・6号集石遺構の間には、緑釉陶器の稜塊が、地山直上に置かれた後、土圧で破碎された状態で出土した。正位の状態で上向きに置かれていた。猿投窯跡群の製品で黒笹90号窯式の稜塊である。第166図52に掲載した。

この緑釉陶器稜塊の出土状態から集石遺構は、祭祀的な遺構と判断した。この他に集石遺構から第25図の遺物が出土した。次に性格不詳の土塊状の遺構(SX)から出土した遺物とともに概略を記す。



第24図 集石遺構詳細(2)

第25図1～5・7・9は、SX1から出土した土器である。1は、酸化炎焼成の須恵器の埴である。金雲母の細粒が含まれる。2は、須恵器の坏である。南比企窯跡群の製品である。3は、須恵器の皿である。末野窯跡群の製品である。

4・5は、灰釉陶器の皿である。4は、浜北窯跡群の折戸53号窯式、5は、東濃地方の光ヶ丘1号窯式の皿である。7は、緑釉緑彩陶器の埴である。緑

色の花文が、口縁部に描かれている。猿投窯跡群の黒笹90号窯式の埴である。9は、土師器の甕である。口縁部がやや崩れた「コ」の字状口縁となる。利根川水系の原土が用いられている。

6・8・10は、SX3から出土した土器である。6は、須恵器の坏で南比企窯跡群の製品である。8は、東海地方で生産された高台付の皿と考えた。10は、南比企窯跡群で生産された須恵器の甕である。

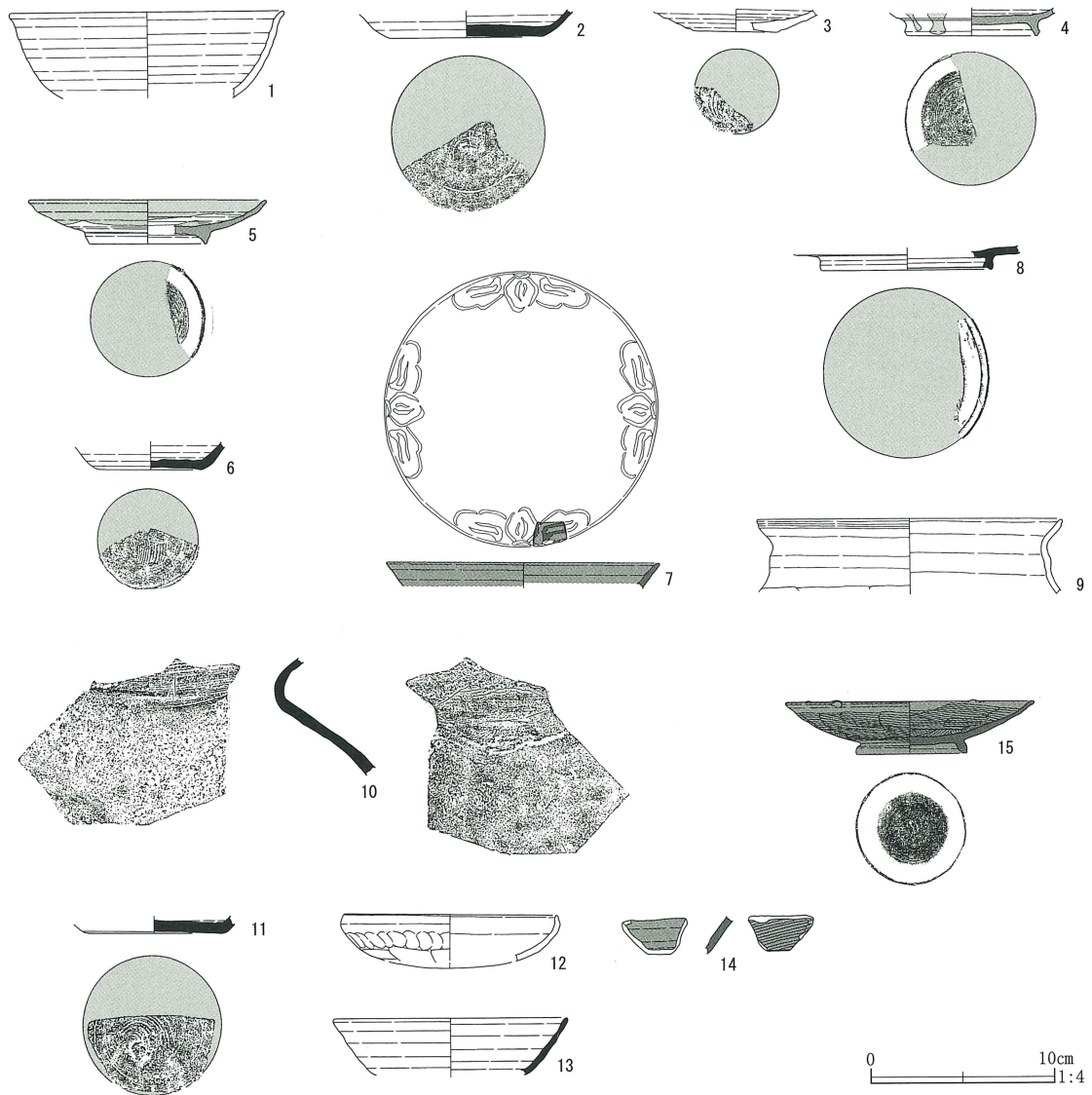
11～14は、集石遺構から出土した土器である。11・13は、

南比企窯跡群で生産された須恵器の坏である。12は、内弯口縁の土師器の坏である。14は、緑釉陶器の埴である。口縁部の内面に花文の一部が残る。

なお15は、第91号溝から出土した緑釉陶器の皿である。高台の端部に三箇所、大形のトチンがあたった痕跡が残る。内外面を横方向に磨いた後、薄く緑釉が掛けられている。素地が黒ずんだ色調のため、全体の仕上がりは黒味がかっている。口縁部に四箇

第4表 集積遺構他出土遺物

挿図番号	図の番号	種別	器種	口径	底径	器高	残存率	色調	産地	備考
第25図	1	須恵器	埴	160	—	—	5	淡橙	下総	酸化炎
第25図	2	須恵器	坏	—	90	—	5	灰	南比企	
第25図	3	須恵器	皿	—	50	—	10	浅黄	末野	
第25図	4	灰釉陶器	高台付皿	—	78	—	5	灰白	浜北	
第25図	5	灰釉陶器	高台付皿	138	25	70	20	灰白	東濃	
第25図	6	須恵器	坏	—	60	—	10	灰	南比企	
第25図	7	緑釉陶器	埴	160	—	—	5	緑	猿投	
第25図	8	須恵器	高台付皿	—	100	—	5	灰	東海	
第25図	9	土師器	甕	178	—	—	5	赤灰	利根川	
第25図	10	須恵器	甕	—	—	—	10	灰	南比企	
第25図	11	須恵器	坏	—	80	—	15	灰	南比企	
第25図	12	土師器	坏	126	—	—	10	橙	利根川	
第25図	13	須恵器	坏	136	—	—	10	灰	南比企	
第25図	14	緑釉陶器	埴	—	—	—	5	緑	猿投	花文あり
第25図	15	緑釉陶器	高台付皿	145	65	31	80	緑	尾北	輪花付皿

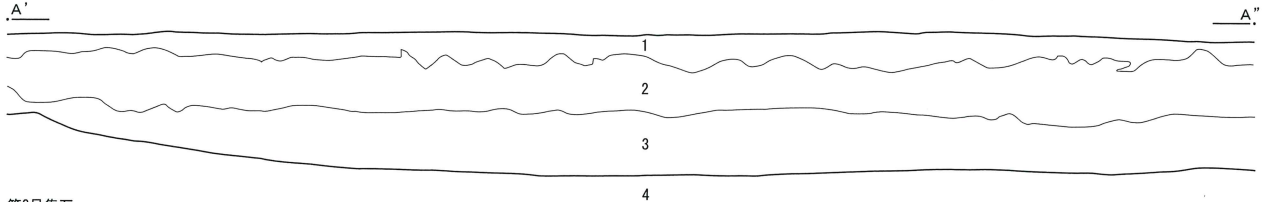
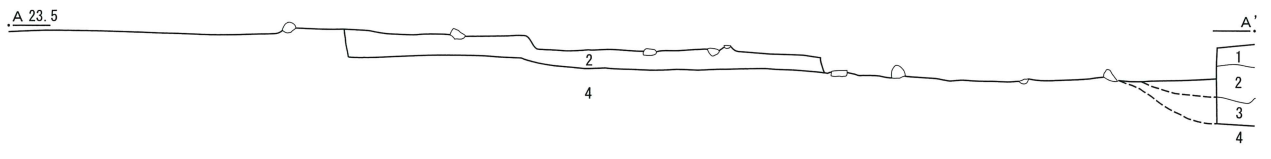


第25図 集石遺構他出土遺物

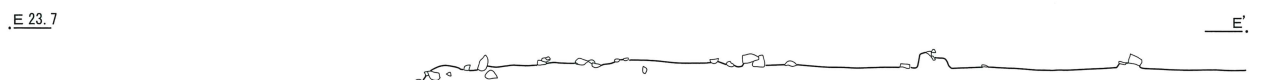
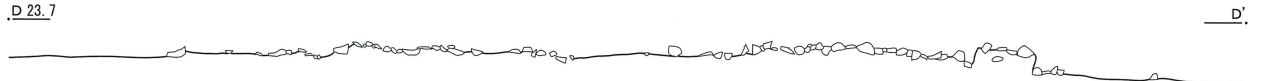
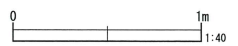
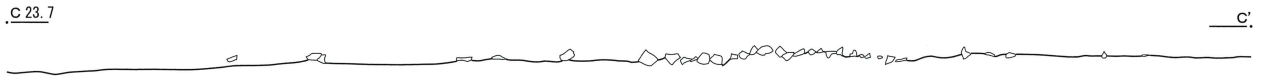
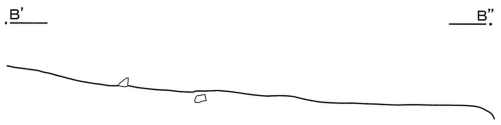
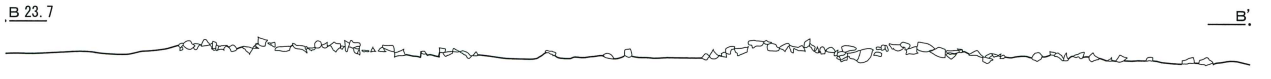
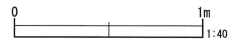
所の輪花がみられる。尾北窯跡群の黒笹90号窯式の製品である。

なお、集石遺構から出土した骨片や獣歯は、(4) 自然遺物の項で述べることにした。

以上から集石遺構は、中央河川跡「南支谷」に面して奈良時代から平安時代前期にかけて形成された祭祀の遺構と考えておきたい。



- 第2号集石
- 1 黒色土 浅間山B軽石含む(上部に多量 下部は混入程度)
 - 2 黒灰色土 粘質土 土器小片少量混入 炭化物少量混入(5mm前後)
 - 3 暗灰色土 粘質土 炭化物少量混入(2~3mm) (谷部埋土)
 - 4 黄褐色土 粘質土 (基盤層)



第26図 集石遺構土層断面

11. 土器集中出土地点

北島遺跡第19地点の調査区ほぼ中央には、土師器・須恵器を主体とした遺物の集中箇所が形成された。この土器集中出土地点は、東西10m×南北20mの範囲にわたって、厚さ10~20cmほどの遺物堆積層を形成していた。R15からS15グリッドの範囲である。

遺物堆積層の上部は、黒色の粘土層が覆い、その上に浅間山B軽石層の覆った水田が、広がっていた。この水田は、調査区を横切る低地帯に形成された谷地水田である。土器集中出土地点が形成された6世紀後半から9世紀前半にかけては、緩やかな流れの残る小川状の窪みか、じめじめした湿地になっていたと考えておきたい。

このような環境のもと、西側の低位台地から低地帯に向かう緩い傾斜面には、大量の土器が集められた。低地帯の東側に出土範囲が、広がらないことを考慮すると、遺物の集積は、掘立柱建物や竪穴住居が、多数構築された西側の低位台地側から行われたと判断した。

調査は、まずバックホーで浅間山B軽石層までの覆土を除去した。次に水田の畦畔や水路等の検出を行った後、遺物堆積層直上まで再びバックホーで覆土の除去を行った。遺物の出土を確認した時点で、1m×1mのメッシュを全体に掛けて、グリッドごとに出土遺物を取り上げることとした。

遺物は、土師器・須恵器を中心として、木器や金属器・貝類・桃の種などが出土した。低地帯には、流水によって運ばれた粘土・砂質土が、南から北へ向かって縞模様のように複雑に堆積し、そして遺物土器集中出土地点で緩やかな淀みになっていた。

整理方法は、まず各グリッドごとに土器・木器・金属器・自然遺物を分類した。その後、土器を土師器・須恵器・黒色土器・灰釉陶器等に分類し、ここで古墳時代後期から古代の堆積層中に混入していた古墳時代前期や弥生時代の土器を抽出した。

土師器は、さらに器種ごとに須恵器坏蓋模倣坏、

須恵器坏身模倣坏、有段口縁坏、比企型坏、内弯口縁坏、北島型暗文土器、皿、碗、高坏、甕、甑、壺、特殊器種などに分類した。

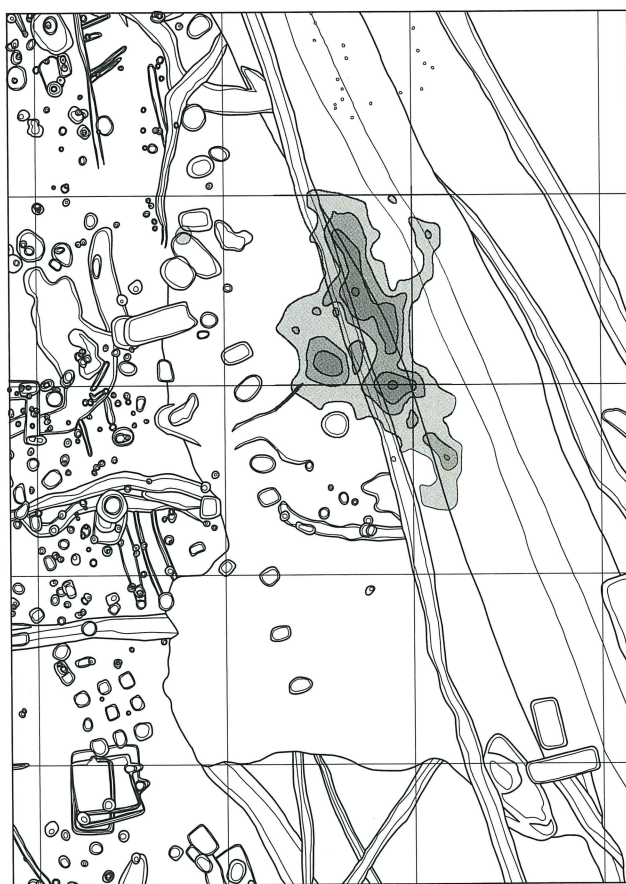
須恵器は、坏蓋・坏身・高坏・甕・壺・特殊器種などに分類した。器種分類の後、土器の胎土や製作技法から生産地の推定を行った。

分類作業後、グリッドごとにそれぞれの総破片の重量を量り、各分類1kgごとの破片数を数え、重量から各分類の破片概数を求めた。なお、出土した遺物の総量は、総重量1144.022kg（約1.1t）である。

以下、遺物の種類別に出土の傾向を述べる。

土師器坏蓋模倣坏

坏蓋模倣坏は、古墳時代後期にみられる合子形の須恵器を模倣した土師器の食器である。元来は、須



第27図 全器種の等密分布

恵器の食器であるが、東海・中部地方の東部以東は、形態を模倣した土師器が作られた。

ロクロは用いられず、口縁部には、断続的なナデの単位が残り、円盤状の土台から底部が作り出され、最終的にこの円盤状の土台をヘラケズリで削ぎ落とし、全体を扁平な丸底に仕上げる。

出現当初の坏蓋模倣坏は、口縁部が直立し、口唇部が「M」字状となり、薄い作りである。口径は、6世紀前半を最大として、7世紀へ向かって小形化が進む。また6世紀後半には、口縁部を外傾化させたり、黒色処理を施す場合もみられる。

なお、群馬・埼玉・東京・神奈川にまたがる地域では、須恵器の坏蓋を模倣した食器が卓越し、栃木・茨城・千葉の地域では、坏身を模倣した食器が卓越する。

また坏蓋模倣坏の口径と変遷の関係は、口径が、140mm以上は、6世紀第Ⅲ四半期、130~140mm前後

は、6世紀第Ⅳ四半期、120~130mm前後は、7世紀第Ⅰ四半期、110~120mm前後は、7世紀第Ⅱ四半期、110mm~100mm前後は、7世紀第Ⅲ四半期、100mm以下は、7世紀第Ⅳ四半期~8世紀第Ⅰ四半期という傾向がある。

土器集中出土地点に集積された坏蓋模倣坏は、6世紀前半の資料に乏しく、6世紀後半以降である。これは、北島遺跡19地点の集落が、7世紀代にピークを迎えるためでもある。坏蓋模倣坏が、7世紀後半から8世紀前半にかけて狭端に減少するのは、坏蓋模倣坏全体の現象である。

土器集中出土地点の坏蓋模倣坏の分布は、等密分布図（第28図）によると、中央河川跡に向かう傾斜面へ帯状に広がっていた。六箇所に高密度の集積箇所が確認でき、等密分布図上に高い山を描く。

分布図に現れたこの山は、坏蓋模倣坏が、満遍なく集積されたためではなく、集積の単位が六つあったことを示していよう。他の土師器坏とともに坏蓋模倣坏が、6世紀後半から7世紀にかけて、土器の集積を進めた結果と考えたい。

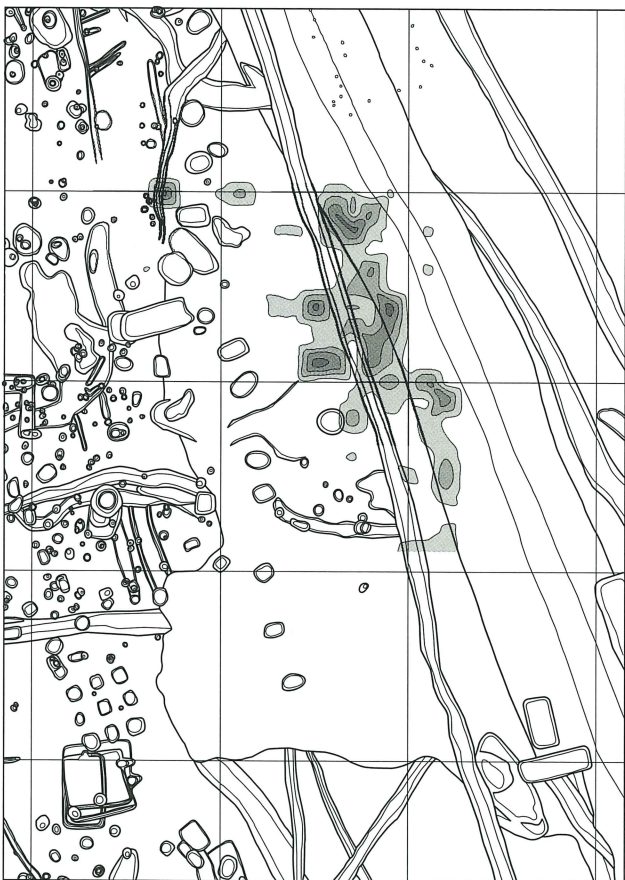
図化できた坏蓋模倣坏は、第29図1~6・8・10・11、第34図14である。

第29図1・2は、深めの塊形に近い坏蓋模倣坏である。両者とも器肉が厚く、2の内外面には、黒色処理が施されている。3と8は、外面のみに黒色処理が施されている。3以降は、全て薄い作りとなっている。とくに6や4などは、極端に薄い。

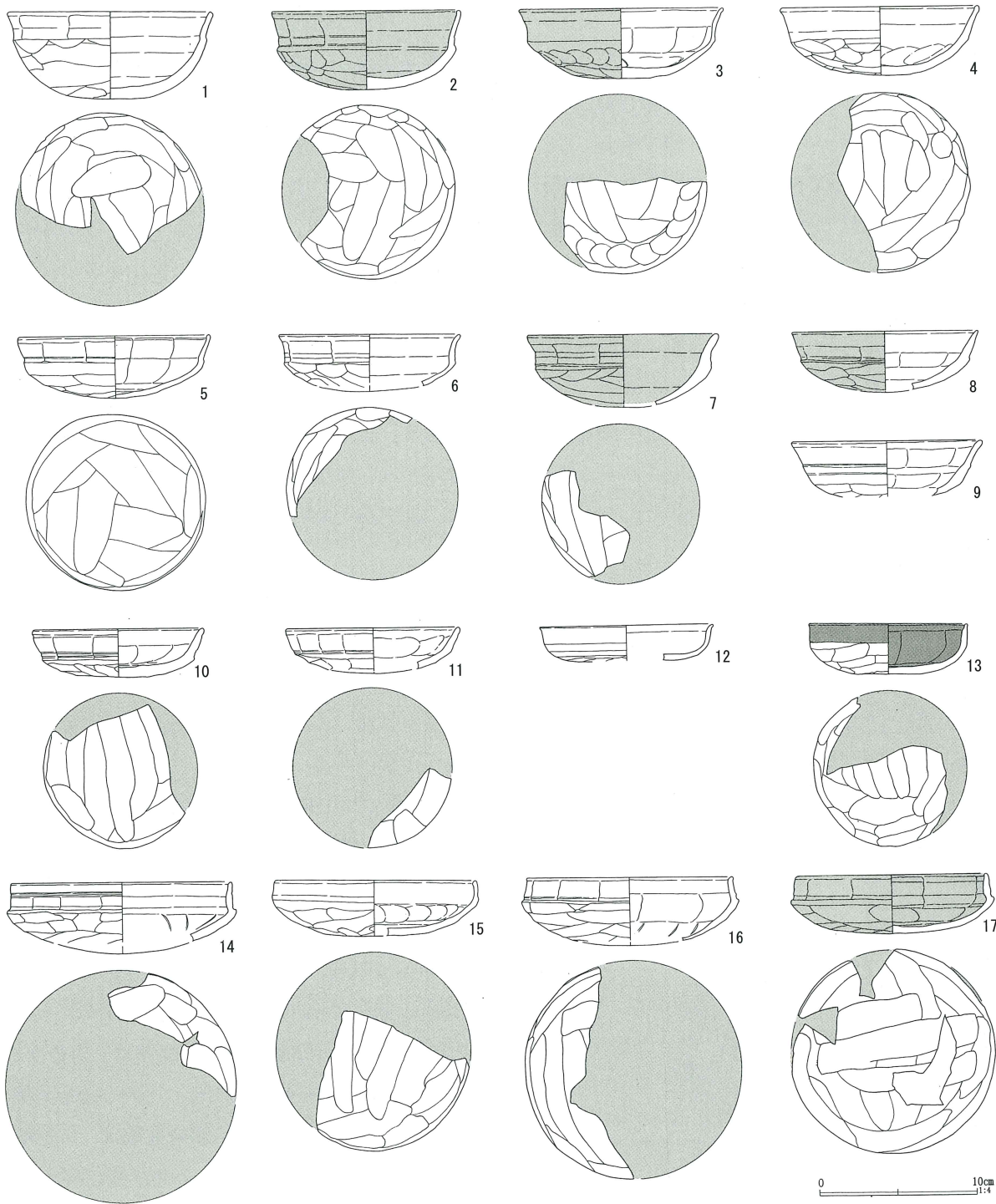
6と第34図14は、ローム台地の粘土を原土として用いているが、他は、利根川の原土を用いている。第29図10と11は、口径110mm前後と小形である。他は、125mm前後である。

土師器坏身模倣坏

坏身模倣坏は、坏蓋模倣坏同様、合子形の須恵器を模倣した食器である。元来は、合子形食器の身である。鋭く内側に屈曲する口縁部が特徴である。底部の作りは、坏蓋模倣坏と同様であり、細かなヘラ



第28図 坏蓋模倣坏の等密分布



第29図 土器集中出土地点の出土遺物（1）

ケズリによって扁平な丸底となる。

変化の方向性も共通し、口径が、6世紀前半を最大として、7世紀へ向かって小形化が進む。ただし7世紀第Ⅲ四半期、須恵器の合子形の坏蓋身が消滅して以降は、食器の組成から消滅していった。なお

口縁部の変化は、坏蓋模倣坏ほど顕著ではない。

また坏身模倣坏の最大径と変遷の関係は、最大径が、140mm以上は、6世紀第Ⅲ四半期、130～140mm前後は、6世紀第Ⅳ四半期、120～130mm前後は、7世紀第Ⅰ四半期、110～120mm前後は、7世紀第Ⅱ四

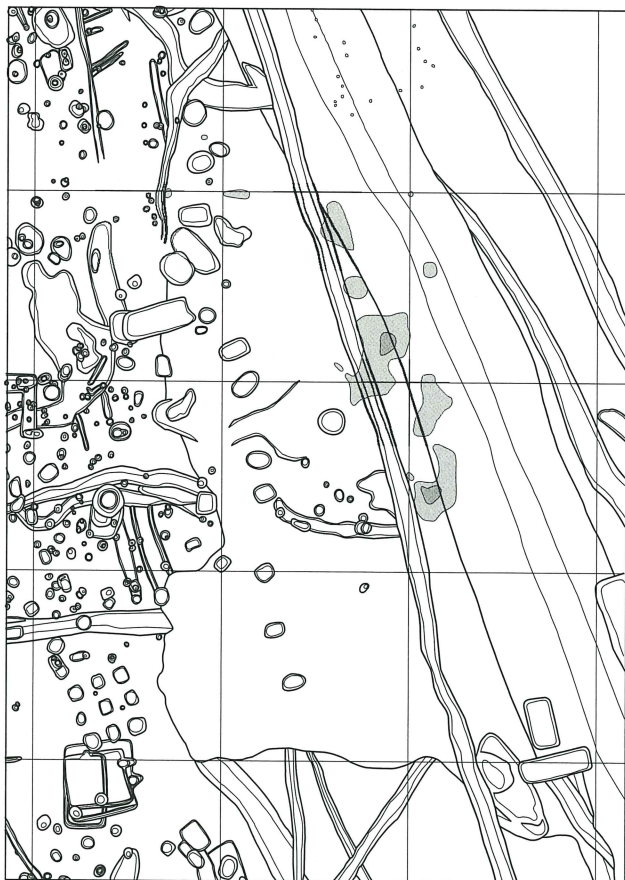
半期、100～110mm前後は、7世紀第Ⅲ四半期という傾向がある。

坏身模倣坏も6世紀前半は乏しく、6世紀後半から7世紀前半が多い。やはり北島遺跡第19地点の集落が、7世紀代にピークを迎えるためである。

土器集中出土地点の坏身模倣坏の分布は、等密分布図によると、やはり中央河川跡に向かう傾斜面へ帯状に広がっていた。ただし坏蓋模倣坏と異なり、四箇所の高密度の集積箇所を確認することができる。とくに坏蓋模倣坏と異なるのは、各集中箇所が、坏蓋模倣坏以上に島状に離れていることである。

つまり遺跡内の土器の集積場所は任意で決定されていたが、集積場所内の集積は、限定されず、概ね四から六箇所にとままりながら、全体として土器集中出土地点を形成していたのである。

図化できた坏身模倣坏は、第29図14～第31図10、



第30図 有段口縁坏の等密分布

第53図8～12である。また第29図14、第53図8～12は、口縁部が有段口縁となる。

黒色処理が、第29図17、第31図1・3～6、第53図8・10・11に施されているが、第53図11は、外面のみ黒色処理が施されている。第31図1・6のみ比企・入間地方の原土が用いられ、他は全て利根川水系の原土である。第29図14は、最大径140mmであるが、15～17は130mm前後、第31図1～5は120mm前後、6～10は110mm以下である。

なお、第29図15は、器肉が薄く口縁部が直立に近いため、8世紀代にみられる碗形の坏である可能性がある。また第31図7～10は、内弯口縁坏か内屈口縁坏かもしれない。さらに第31図4・5のヨコナデは、単位が大変明瞭である。

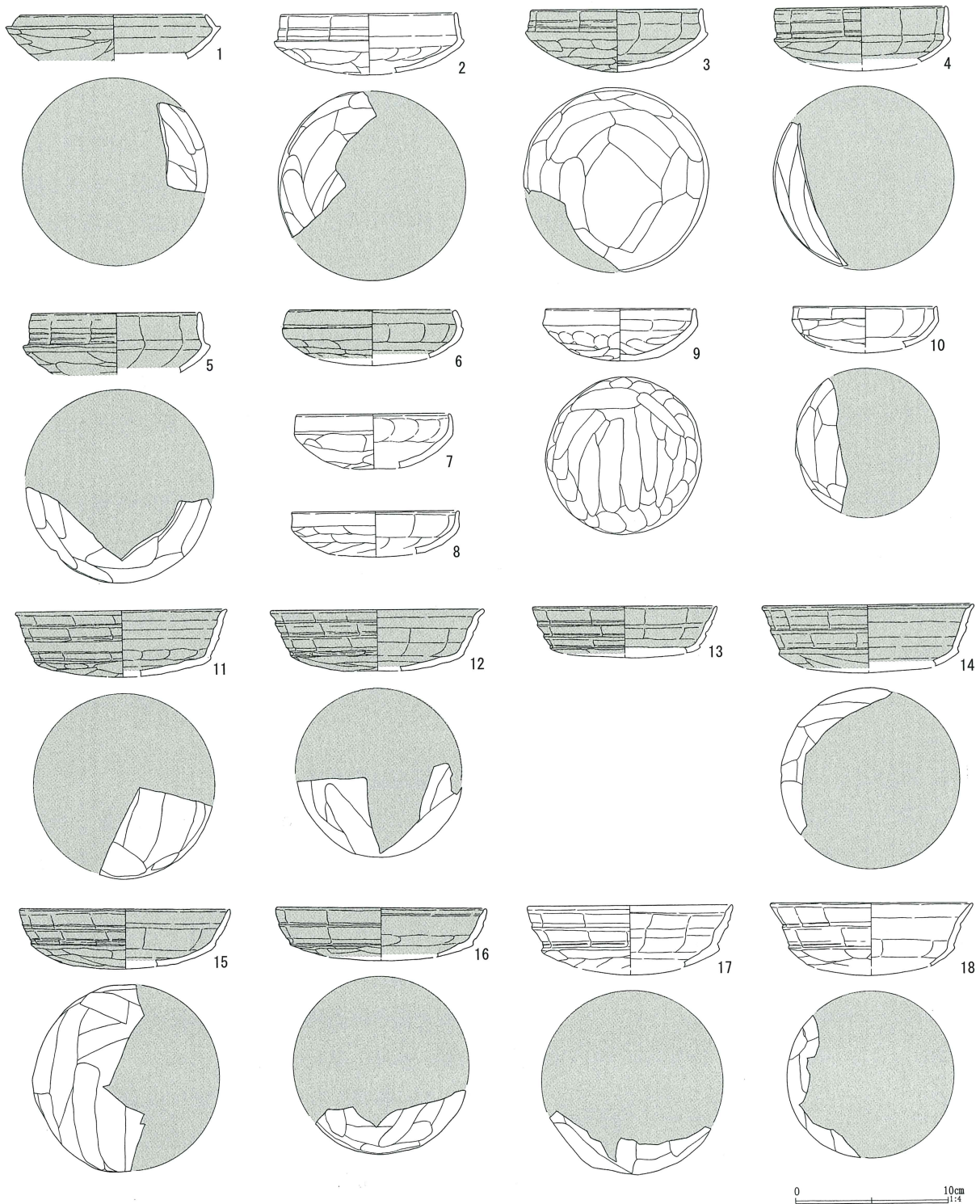
有段口縁坏

有段口縁坏は、口縁部が、二から四段の多段で構成される坏蓋模倣坏の一種である。口縁部が、三段以上のA類、二段のB類、底径が小さく、大きく開くC類がある。

土器集中出土地点から出土した有段口縁坏について、口径、底径の判明する個体を計測した。便宜的に口径を10mmごとに集計すると、口径155mm以上は7点、145～154mmは16点、135～144mmは37点、125～134mmは93点、115～124mmは167点、105～114mmは118点、95～104mmは23点であることがわかった。

有段口縁坏の口径と変遷の関係は、口径が、140mm以上は、6世紀第Ⅲ四半期、130～140mm前後は、6世紀第Ⅳ四半期、120～130mm前後は、7世紀第Ⅰ四半期、110～120mm前後は、7世紀第Ⅱ四半期、110mm～100mm前後は、7世紀第Ⅲ四半期、100mm以下は、7世紀第Ⅳ四半期～8世紀第Ⅰ四半期という傾向である。

土器集中出土地点に集積された有段口縁坏は、成立期の資料（有段口縁坏A類）に乏しく、105～114mmにかけてピークがある。北島遺跡第19地点の集落は、6世紀代よりもむしろ7世紀代に遺構数の増加



第31図 土器集中出土地点の出土遺物（2）

がみられた。集落の活性化とともに有段口縁杯の土器集中出土地点への集積が、活発化したことが窺える。

ところで有段口縁杯は、一般的に黒色処理される

場合が多いが、全ての土器に及ぶわけではない。土器集中出土地点から出土した有段口縁杯は、全体の80パーセントが、黒色処理されていた。第32図に消費量と黒色処理率を累積棒グラフで示した。

6世紀代は、資料数も少ないので一概に云えないが、平均的に80パーセントを前後し、口径が最も小さくなる100mm前後となると、60パーセントまで落ち込み、黒色処理率が低下してくるようである。

有段口縁坏の分布は、等密分布図（第30図）によると、中央窪地に向かう傾斜地に沿って、南北に長く集中していた。しかも集中域は、五箇所の島状に及び、中央と南端の集中度が高い。

おそらく6世紀後半から7世紀にかけては、西側の台地から中央窪地に向かって、土器の集積が進んだためと考えたい。

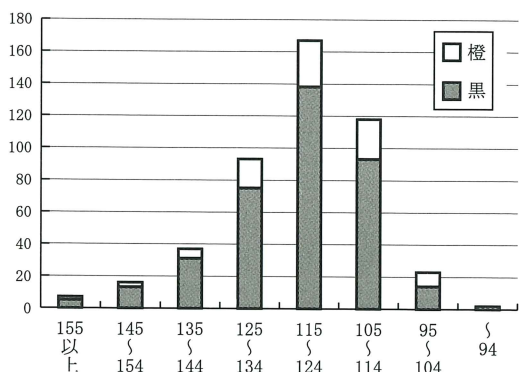
図化できた有段口縁坏は、第29図7・9、第31図11～第34図13、15～第37図11、第53図8～12である。なお、第53図8～12は、口縁部が有段となる坏身模倣坏、第55図3は外反口縁鉢、第55図4～7は、有段口縁の鉢である。

黒色処理が施されたのは、第29図7、第31図11～16、第33図2～5・7～14・16・17、第34図3～8・10～13・15～17・19・21～23、第35図1・2・6・7・11・14～17、19～24、27～29、第37図1～7、9～11、第53図8・10・11、第55図4～7である。

ここに図化した有段口縁坏は、全て利根川水系の原土である。次に個々の土器について記す。

第29図7・9は、口縁部の段が不明瞭であり、一見、坏蓋模倣坏のように見えるが、ヘラケズリが低い位置から始まること、口縁部の突線が、沈線状となることなどから有段口縁坏とした。

第31図11～13、第34図8は、口縁部が三段で構成



第32図 有段口縁坏の黒色処理率

される有段口縁坏である。第31図11・12、第34図8は、口縁部が長い、13は短く、口径が小さい。前者は、有段口縁坏B類、後者は、有段口縁坏A類に含めておきたい。

また第31図14～第37図11は、口縁部が二段で構成される。第37図10・11は、口縁部が大きく開く有段口縁坏C類、ほかは、有段口縁坏B類である。

口径の大きさで並べたが、第31図の11～第33図2までは、口径130mm以上である。第34図4～8までは、口径120mm以上である。第34図9～第35図20までは、口径110mm以上である。第35図21～第37図8までは、口径100mm前後である。多少大きさにばらつきがある。

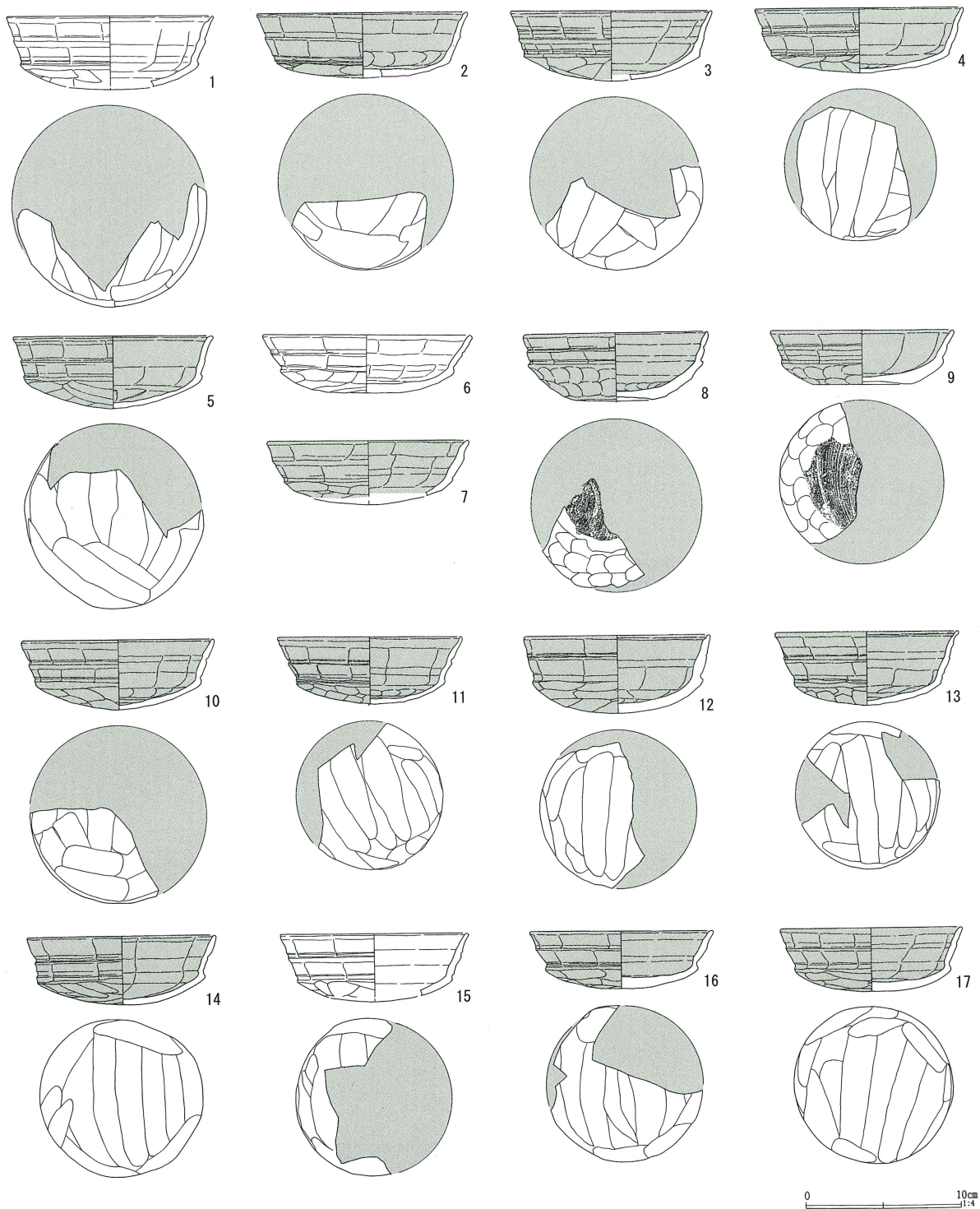
有段口縁坏の中には、口唇部の内側に沈線を引く土器がある。第31図16、第33図1・2・12、第34図1・11、第35図6・8・12である。また第33図8・9の底部には、静止ヘラ切りの痕跡が残り、回転台から土器を切り離れた痕跡と考えたい。なお底部のヘラケズリのうち、図化可能な破片は掲載した。

土師器比企型坏

比企型坏は、器の内外面に赤彩を施した食器である。古墳時代後期の比企・埼玉地域から南部、相模国の一部、東京湾岸、印旛・手賀沼周辺にかけて広く分布する。口縁部が内弯し、口唇部で小さく屈曲する碗及び皿形、口唇部が「S」字状となる碗形、須恵器の坏蓋模倣形、須恵器の坏身模倣形、大形の鉢、高坏、甕などがある。

どの器種でも赤彩は、外面の口縁部やや下まで施し、内面は全面、または中央部を塗り残す場合がある。比較的薄手にそしてシャープに作られる場合が多く、口唇部内面に沈線状の凹部が巡る。

変化の方向性は、坏蓋模倣坏と共通し、6世紀前半を最大として、7世紀へ向かって小形化が進む。8世紀第I四半期まで存在が確認でき、南比企窯跡群で須恵器の生産が活発するとみられなくなり、食器の組成から消滅した。

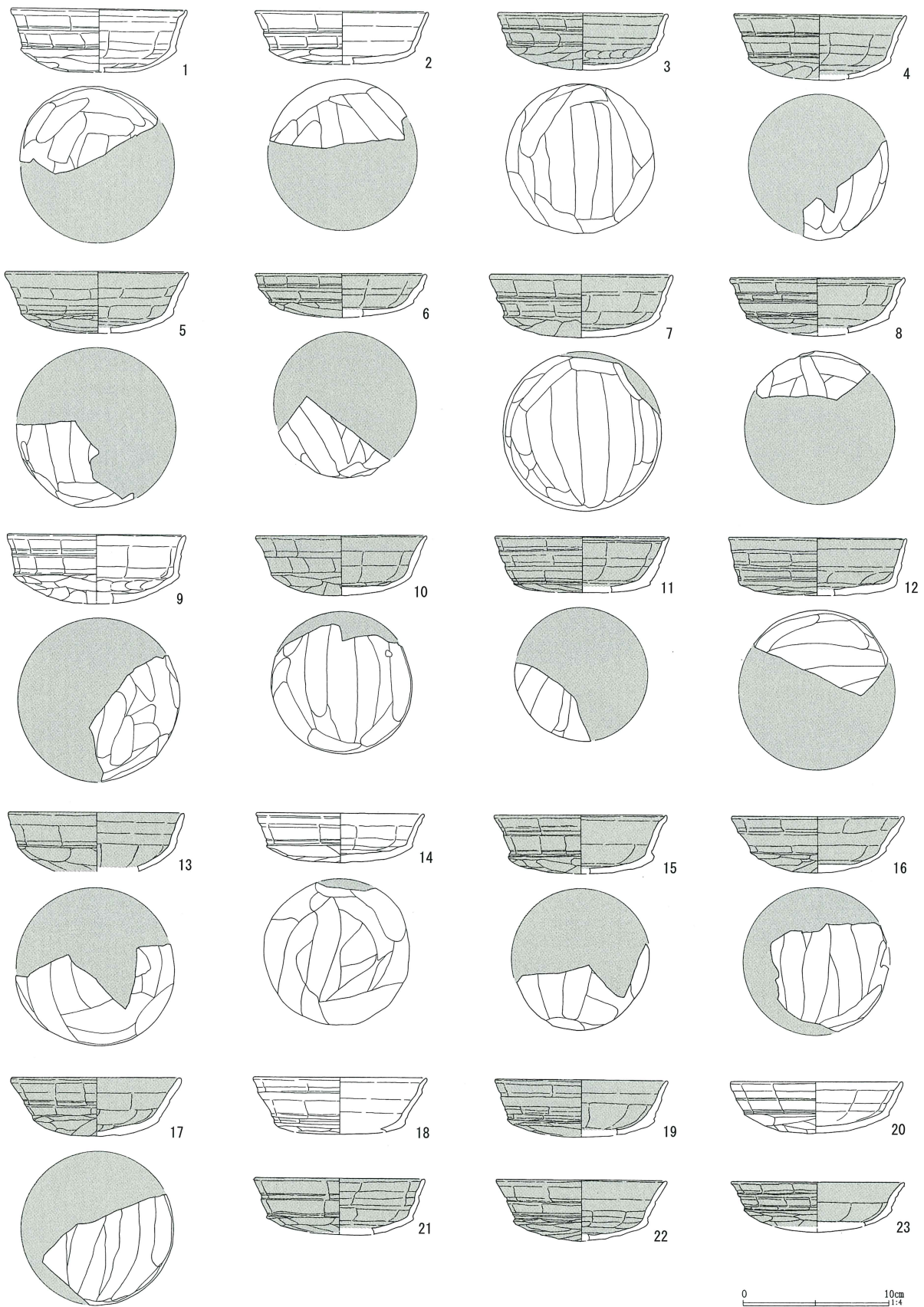


第33図 土器集中出土地点の出土遺物（3）

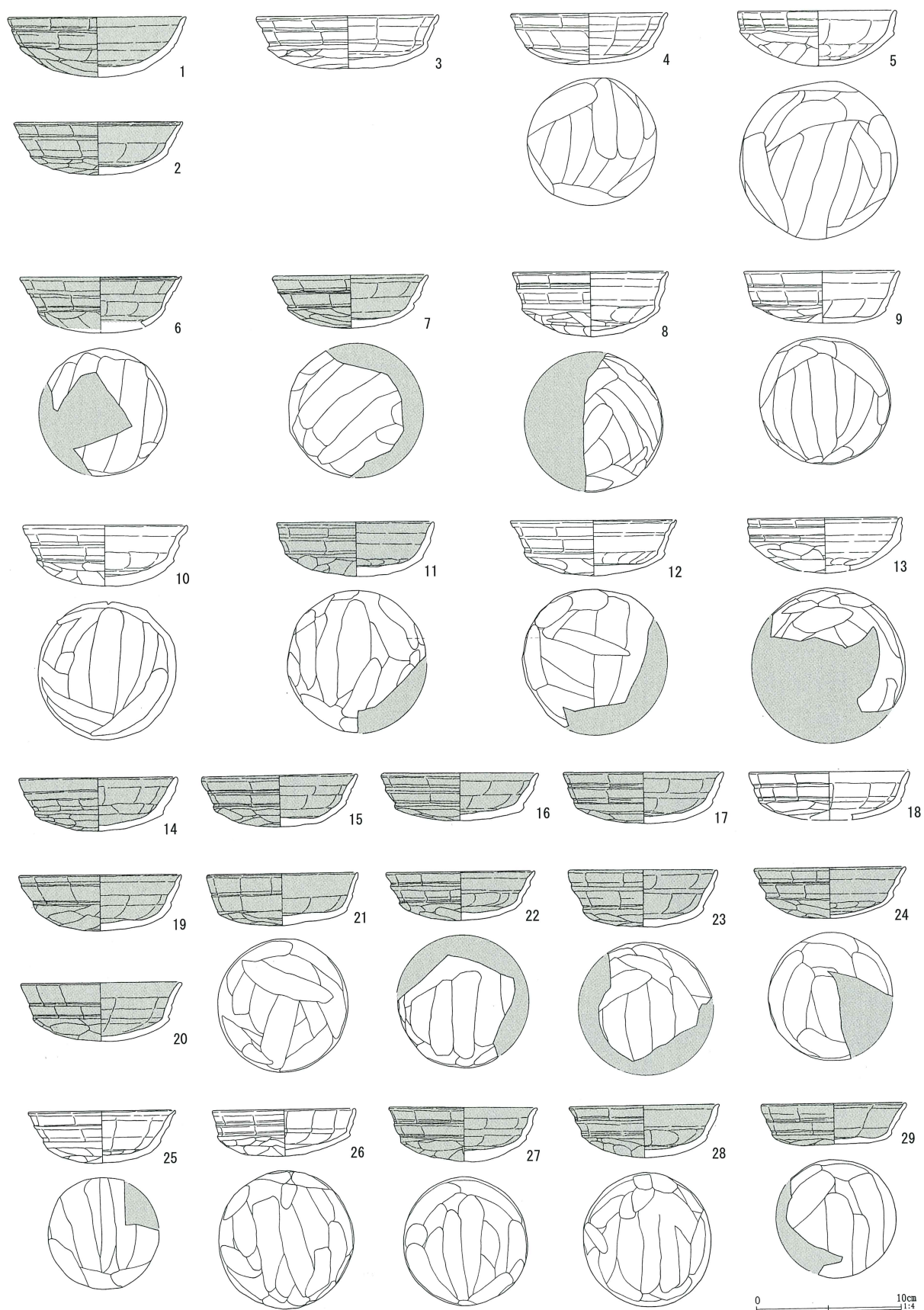
また坏身模倣坏の最大径と変遷の関係は、最大径が、140mm以上は6世紀第Ⅲ四半期、130~140mm前後は6世紀第Ⅳ四半期、120~130mm前後は、7世紀第Ⅰ四半期、110~120mm前後は、7世紀第Ⅱ四半期、

100~110mm前後は、7世紀第Ⅲ四半期、100mm以下は、7世紀第Ⅳ四半期から8世紀第Ⅰ四半期である。

土器集中出土地点から出土した比企型坏は、6世紀前半の資料に乏しい。やはり7世紀前半の資料が



第34図 土器集中出土地点の出土遺物（4）



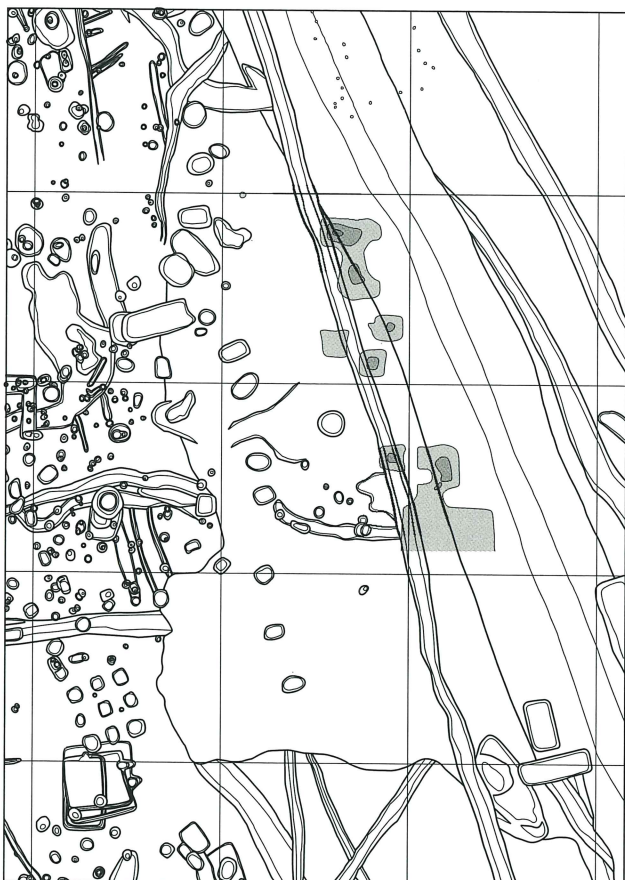
第35図 土器集中出土地点の出土遺物（5）

多い。北島遺跡第19地点の集落が、7世紀に上昇するためである。

土器集中出土地点の比企型坏は、データ数が少ないが、等密分布図（第36図）によると、中央河川跡に向かう傾斜面へ帯状に広がる。五から六箇所集中箇所を確認することができる。この帯状の集積から離れた地点からの出土は少ない。

図化できた比企型坏は、第29図12・13、第37図12～39、第39図2である。第37図12は荒川水系、28は利根川水系、38はローム台地の粘土、他は比企・入間の原土が用いられている。

第37図12は、深めの碗形で口縁部は「S」字状となる。きわめて薄い作りで口唇部に浅い沈線がめぐる。17は、口縁部が短いがやはり「S」字状となる。底部が球形に近い。13は、やはり深めの碗形である。口唇部で内側に小さく屈曲する。あるいは高坏の坏



第36図 比企型坏の等密分布

部か。14は、浅い碗形である。外面の整形の後、ヘラケズリを行う。15も碗形だが、口縁部と底部の間がやや凹む。

第37図16・19～23、25～30、32～39は、坏蓋模倣坏の形態である。口縁部と底部の境は、「Z」字状になり屈曲は強い。水口分類のA類である。

第29図12・13、第37図18・24・31は、底部から口縁部への屈曲が緩く、「S」字状となる器形である。水口分類のB類に相当する。第39図2は、深めの碗形である。坏蓋模倣の口縁部である。

第37図12～39は、概ね大形品から小形品へと並べてある。最大口径は、17の130mmであり、最小口径は、39の89mmである。

土師器内屈口縁坏

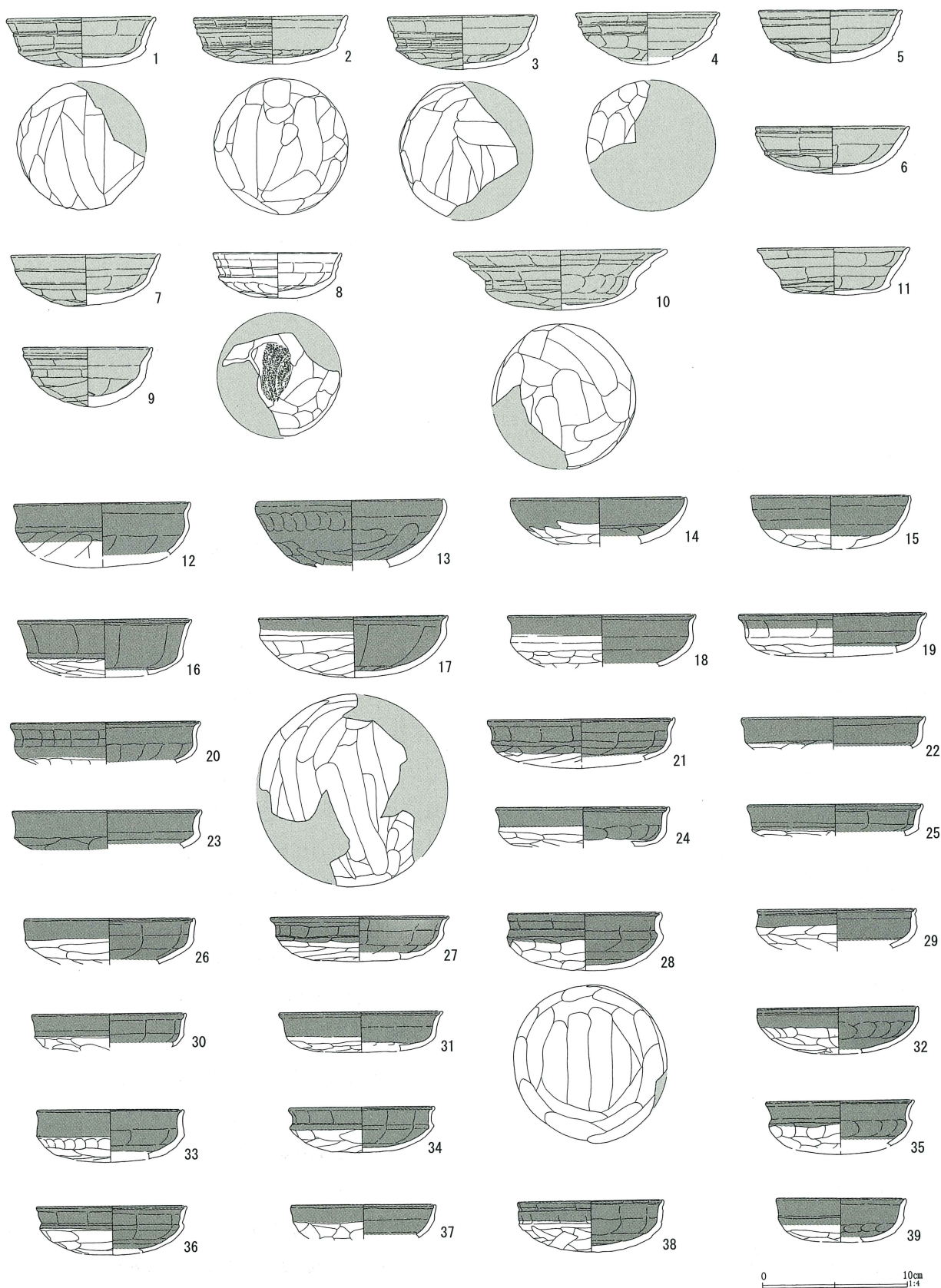
内屈口縁坏は、口縁部が、内側に小さく屈曲し、口唇部が玉状になる土器をさす。底部は、扁平な球形となり、全体的に器高は低い。7世紀後葉以降に登場し、8世紀初頭にかけて関東地方の広い範囲で確認できる。

赤彩や黒色処理を全く施さず、素焼のままである。半球形から次第に器高が低くなり、扁平化した形態に変化する。口径に大形・中形・小形の三段階がある。とくに小形の製品が多く、次いで中形、大形の順で少なくなる。

坏蓋模倣坏・坏身模倣坏・有段口縁坏・比企型坏などと共伴し、これらの終焉期に消費が増加する。土器集中区の等密分布図は、次の内弯口縁坏とともに作成した。

図化できた内屈口縁坏は、第39図3～第41図8である。第39図3～27は小形品、第40図1～12は中形品、13～第41図8は、大形品である。第39図3～10・14・15・22・25、第40図1・2・13・15・16、第41図5・7などは、底部が球形となる点で古相がみられ、第39図13・27・第40図8・11、第41図4・7などは、扁平化が進み新相がみられる。

第39図5・8・27、第40図3・4・6・7・11は、



第37図 土器集中出土地点の出土遺物（6）

ローム台地の粘土を原土として用いているが、他は、全て利根川水系の原土を用いている。

土師器内弯口縁坏

内弯口縁坏は、口縁部が小さく内弯する土器で口唇部が細くなる。底部は丸底だが、全体的に扁平で皿形に近い。8世紀第I四半期から登場し、8世紀第III四半期までみられる。群馬県の平野部から埼玉県の北部にかけて顕著にみられる。なお、この地域の外縁には、須恵器窯が顕著に発達した。

赤彩や黒色処理が全く施されず、素焼のままである。変化の方向性は、やや内側に内弯した形態から口縁が直立し、より扁平化する形態となる。口径に大形・中形・小形の三段階がある。とくに小形の製品が多く、次いで中形、大形の順で少なくなる。

坏蓋模倣坏・坏身模倣坏・有段口縁坏・比企型坏



第38図 内弯口縁坏の等密分布

などの消滅以降登場し、一部、内屈口縁坏と平行する。土器集中出土地点では、出土量が最も多い。

内弯口縁坏は、まず口径の大きさによって90mmから10mm刻みで法量の分類を行い、次に器形・調整技法を加味してa~g類に分類した。

a類 内弯する半球形の器形である。口唇部を小さくヨコナデする。口唇部と体部の境には、沈線や意識的な境目などが無い。口唇部の断面は、三角形となる。

b類 内弯する半球形の器形である。口唇部が内側に折れ、球状の断面となる。口唇部と体部の境まで削られる。

c類 全体の形状は、内弯する半球形の器形だが、口縁部で小さく外反する。口縁部は、10mmほど外反のヨコナデが行われる。

d類 半球形ながら外反する器形である。口縁部は明瞭なヨコナデを行っている。古墳時代の坏蓋模倣坏の形状を残す。

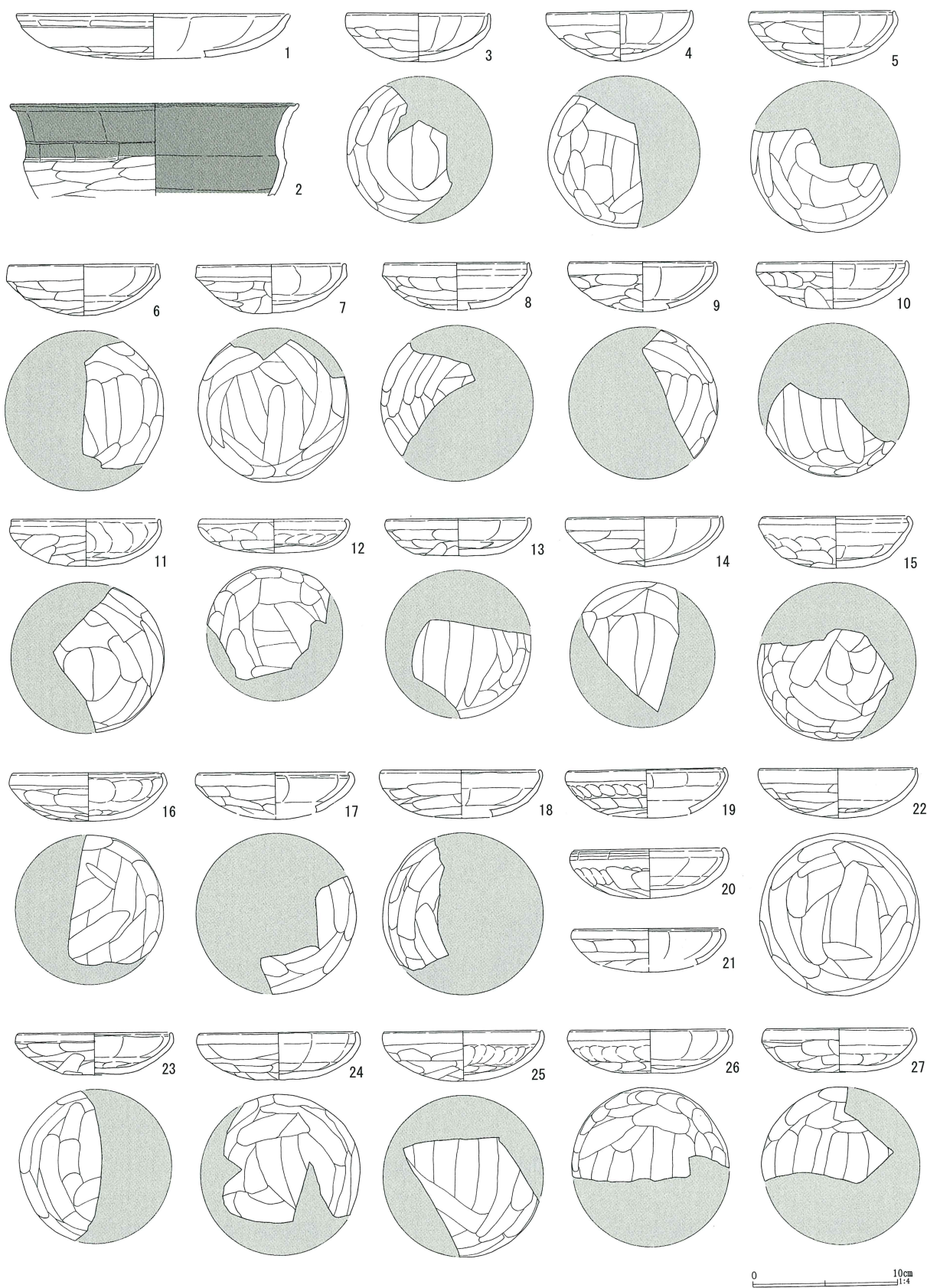
e類 大きく内弯する三日月形の坏である。口唇部は小さくヨコナデされている。

f類 底部は平底である。口縁部の2分の1が、ヨコナデされている。口縁部は内弯し、器肉は薄い。粗くヘラケズリが施されている。

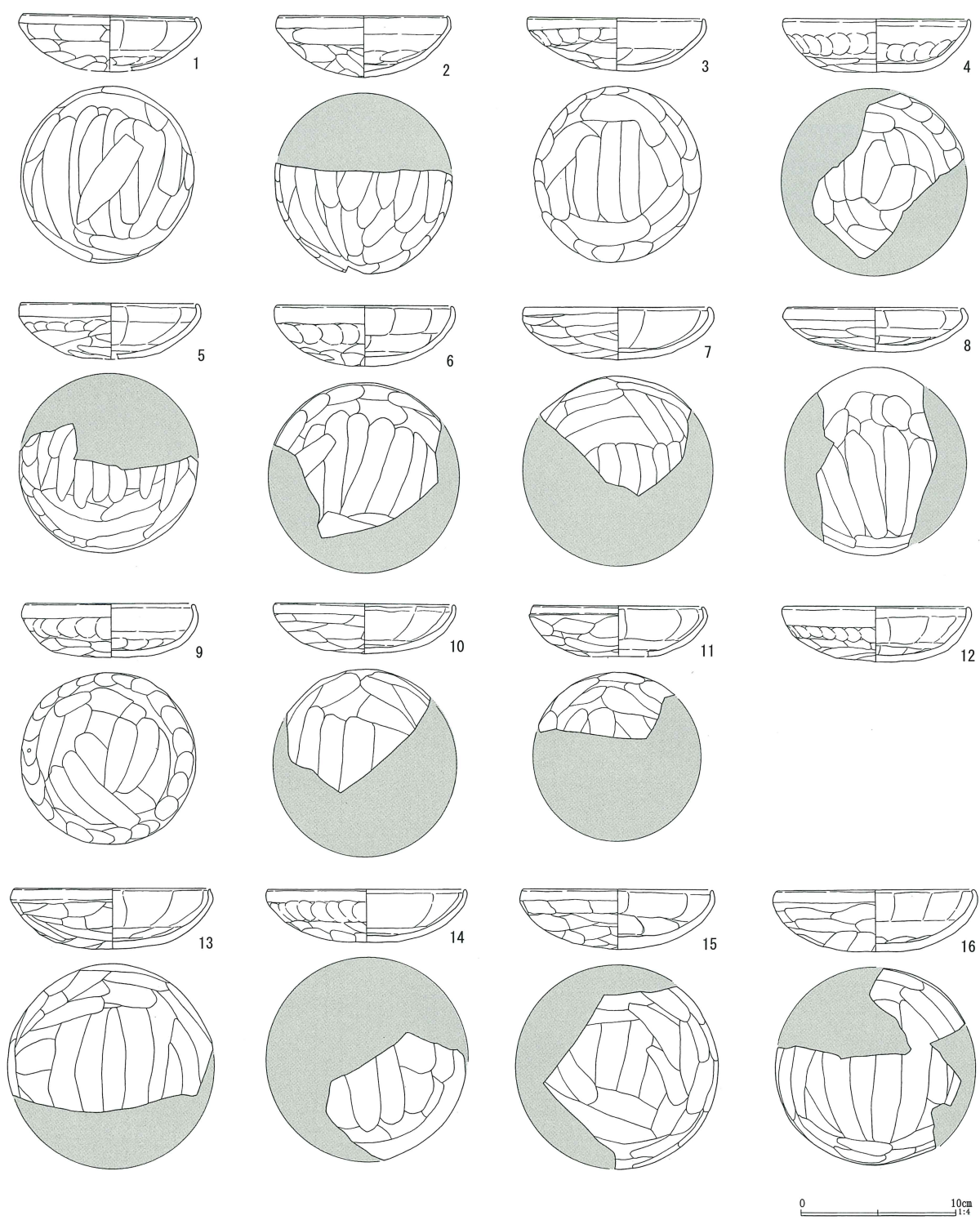
g類 ローム台地の粘質土を用いた内弯口縁坏である。半球形の坏で底部の器肉が厚い。

まず内弯口縁坏は、破片ごとに口径を復元し、破片数を集計した。この結果に基づいて、破片数量の変化を第46図で表現した。これによるとa類は、90mmから存在し、100mm・110mmにピークがあり、140mmに向かって徐々に少なくなる。またb類は、100mm・110mmは少ないが、120mmにピークがあり、130mmまで見られ、140mmに急速に下降する。150mm以上が少量見られる。

しかしこの二種よりもe類は、倍以上の破片数が見られる。100mm以下はなく、110mmからスタートするが、120mmには倍以上となり、ピークを迎える。130mmにはやや下降するが、140mmまで見られる。



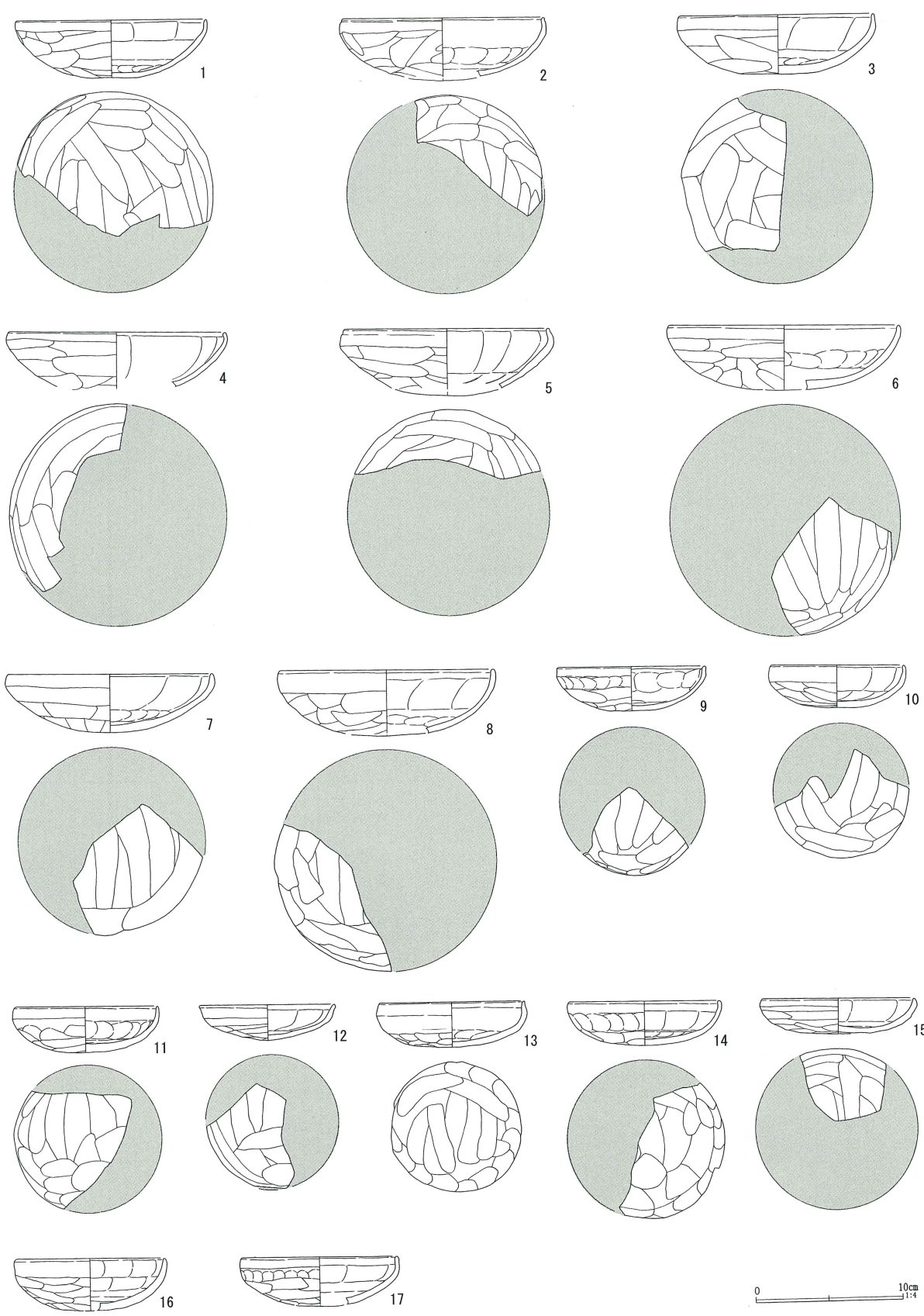
第39図 土器集中出土地点の出土遺物（7）



第40図 土器集中出土地点の出土遺物（8）

150mm以上が多いのは、皿形の製品のためであろう。
 f類は、b類と同様の動きをするが、破片数は半数程度である。c・g類は、出土点数がきわめて少ない。

口径による破片数の変化は、内弯口縁坏が、口径90mm前後から130mmへ向かって次第に大きくなっていく傾向と一致し、出土量のピークが、110~130mmにある点は、土器集中出土地点が、8世紀前半にピ



第41図 土器集中出土地点の出土遺物（9）